

太宰府・佐野地区遺跡群 19

—佐野土地区画整理事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書—



宮6SI045出土小形仿製鏡

平成17年
(2005)

太宰府市教育委員会

太宰府・佐野地区遺跡群 19

－佐野土地区画整理事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成17年
(2005)

太宰府市教育委員会

『太宰府・佐野地区遺跡群 19』正誤表

頁	行	誤	正
6	4	宮ノ本2号窯跡	宮ノ本4号窯跡
6	6	宮ノ本2号窯出土資料	宮ノ本4号窯出土資料



調査区周辺の環境【▽箇所が調査地点】



宮ノ本遺跡6SI045出土小形仿製鏡

序

本書は、市西部において進められている佐野土地区画整理事業に先立って行いました埋蔵文化財発掘調査報告書です。佐野土地区画整理事業は、昭和61年度に事業計画決定がなされ、翌年度から事業によって破壊される佐野地区遺跡群の発掘調査を実施してまいりました。

佐野地区遺跡群には、原始～近世にいたる多くの埋蔵文化財が包蔵され、これまでの発掘調査で太宰府市の歴史のみならず我が国の歴史を考える上で、貴重な多くの成果を収めております。

本書に収録いたしました宮ノ本遺跡は、縄文時代から平安時代までの遺跡で、中でも第1次調査では、日本に二例しかない古代の「買地券」を出土するなど、貴重な例として全国に知られています。今回報告いたします平成2年度に実施いたしました宮ノ本遺跡第5・6次調査では、弥生時代後期から古墳時代後期の集落、奈良時代から平安時代の墓など、宮ノ本遺跡を考える上で重要な成果を収めております。

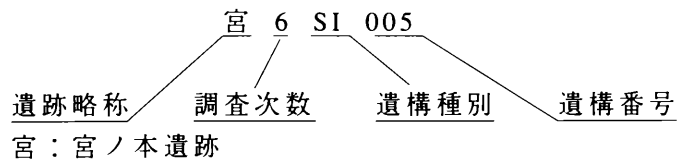
本書が文化財保護の一環として実施された記録としてはもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財保護行政に対してご理解いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申し上げます。

太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

- 1.本書は、太宰府市が進める佐野地区土地区画整理事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。掲載する調査は、宮ノ本遺跡第5・6次調査（平成2年度調査）である。
- 2.本書に掲載した調査の実施年度は、先述した年度において実施してきたものであり、調査組織についてはI.調査組織に記載している。なお整理作業は、各調査終了時より随時行ってきたが、主として平成16年度に実施した。
- 3.遺構の実測は、中島恒次郎、緒方俊輔（現高千穂町教育委員会）が行い、図の浄書は、中島恒次郎、松本里栄子が行った。なお遺構配置図は、（株）アジア航測が行った。
- 4.遺物の実測は、中島恒次郎ならびに（株）埋蔵文化財サポートシステムが行い、図の浄書は、中島恒次郎、松本里栄子が行った。
- 5.遺構の写真撮影は、中島恒次郎、緒方俊輔（現高千穂町教育委員会）が行い、遺跡全景写真撮影は、（有）空中写真企画（代表 壇睦夫）が行った。また周辺調査状況把握のための合成写真作成は、（株）写測エンジニアリングが作成した。遺物の写真撮影は、デジタルカメラ（750万画素）を用いてフォトハウス岡（代表 岡紀久夫）が行っている。
- 6.遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を示す。
- 7.出土した金属製品の保存科学処理は、下川可容子が行った。
- 8.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお、各調査報告文中では、調査ごとの報告内容中に関して遺跡略称は省略している。



- 9.本書の執筆ならびに編集は、中島恒次郎が行った。作表にあたっては、古賀美穂の協力を得た。
- 10.出土遺物、図面、写真等の諸記録は、全て太宰府市教育委員会が保管している（平成16年度現在：太宰府市文化ふれあい館にて保管）。
- 11.本書に掲載した遺物の分類は、以下の記載された分類によっている。

土器

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡 II』

太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡 II-窯跡篇-』

太宰府市教育委員会（2004）『国分地区遺跡群1』

輸入陶磁器

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡 XV』

また報告文中において記される時期、例えば大宰府X期などの記載については、下記の文献を御参照いただきたい。

太宰府市教育委員会（1996）『大宰府条坊跡 IX』 Tab.1大宰府の土器型式と年代

目次

I. 調査組織	1
II. 環境	2
III. 学説史	4
IV. 調査の概要	8
1. 宮ノ本遺跡 第5次調査	8
1) 調査に至る経過	8
2) 基本土層	8
3) 検出遺構（付図）	8
4) 出土遺物	13
5) 小結	20
2. 宮ノ本遺跡 第6次調査	21
1) 調査に至る経過	23
2) 基本土層	23
3) 検出遺構	23
4) 出土遺物	26
5) 小結	43
V. 大宰府における墓造営 ―宮ノ本遺跡評価のために―	45
1) 序	45
2) 太宰府における墓研究	45
3) 大宰府における墓	46
4) 宮ノ本墓地の位置	51
5) 成果と課題	60
付表	63
写真図版	69

I. 調査組織

発掘調査は、各報告にて記載したように平成2年度に実施し、その後整理作業は随時行ってきたものの、主として平成16年度に行った。したがって調査に伴う組織は、現地調査を実施した平成2年度ならび、整理作業を主として進めた平成16年度を記す。なお調査ならび整理作業を担当した者を、ゴシックにて表記している。

調査実施年度

宮ノ本遺跡 第5次調査

宮ノ本遺跡 第6次調査

(平成2／1990年度)

総括	教育長	長野 治己	
庶務	教育部長	西山 義則	
	社会教育課長	関岡 勉	
	文化財係長	鬼木 富士夫	
	主任主事	岡部 大治	
	主 事	白水 伸司	
調査	主任技師	山本 信夫	
		狭川 真一	
		城戸 康利 (7月1日～)	
	技 師	城戸 康利 (～6月30日)	緒方 俊輔 山村 信榮
	技 師 (嘱託)	中島 恒次郎	狭川 麻子

整理作業実施年度

(平成16／2004年度)

総括	教育長	關 敏治	
庶務	教育部長	松永 栄人 (4月1日～)	
	文化財課長	木村 和美	
	保護活用係長	久保山 元信	
	調査係長	永尾 彰朗	
	事務主査	藤井 泰人 (～6月30日)	
	事務主査	齋藤 実貴男 (7月1日～)	
	主任主事	大石 敬介	
調査	主任主査	城戸 康利	
	技術主査	山村 信榮	中島 恒次郎
	主任技師	井上 信正	高橋 学 宮崎 亮一
	技師 (嘱託)	下川 可容子	森田 レイ子 柳 智子 渡邊 仁
		長 直信	松浦 智 (7月1日～)

なお下記の方々、諸機関には報告にあたってご指導、ご教示を賜りました、心よりお礼申し上げます

げます。

岩永省三（九州大学総合研究博物館）、橘田正徳（豊中市教育委員会）、狭川真一（元興寺文化財研究所）、田中良之（九州大学大学院比較社会文化研究院）、田中則和（仙台市地底の森ミュージアム）、富永直樹、白木守（久留米市教育委員会）、舟橋京子、降矢哲夫・小田裕樹（九州大学大学院）

II. 環境

今回報告する宮ノ本遺跡は、北部九州のほぼ中央部、背振山系から東方へのびる丘陵に所在し、花崗岩を主とする基盤層上に形成されている。標高約85m前後を測る低丘陵が平野側へ伸びており、盆地状をなす太宰府にあって西を遮蔽する丘陵となる。また宮ノ本丘陵の南には、大佐野川が流れ、この川による開析によって狭小な平野を形成している。

このような自然環境下にあつて、これまでの発掘調査によって、縄文早期からの人々の痕跡である土器が採集され、その後弥生時代中期の土器が出土するものの明確な帰属遺構が検出されず、土地利用状況は不明である。古墳時代に至り古墳の造営をはじめ住居の建築など土地利用が活発化し、古代においては須恵器生産窯、買地券をはじめとする墓としての土地利用が顕著となる。

これまでの調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭、古墳時代前期から後期の住居、古墳時代前期の墳墓が検出され、特に古墳時代における遺構群は、太宰府における集落動態を考える上で、周辺状況と比較して特異な状況を示している。具体的には、貯蔵施設の希薄さ、共同体から飛び出した溝区画住居規模の小ささ、古墳への甕棺追葬など、階級形成期の「首長」の様態が今ひとつ顕著ではないといえる。一方古墳終末から宮ノ本遺跡群を包括する牛頸窯跡群に入り、生産遺跡としての土地利用が付加される。窯業遺跡としてはその後奈良時代後期まで引き続き確認される。しかしこれも牛頸窯跡群内では特異なあり方をしている。牛頸窯跡群内における他の支群の窯は、奈良期では群在するような窯の操業形態を示すにもかかわらず、宮ノ本遺跡内で検出される同時期の窯は、全て単体での操業を行っている。他の支群では長期操業を物語るように、数基の小型窯と1ないし2基の大型窯が営まれており、この点から、宮ノ本遺跡内の窯跡はいずれも短期的な操業が想像できる。生産遺跡としての土地利用とともに、丘陵を利用して墓が形成される。「買地券」を出土した宮ノ本遺跡「1号墓」が有名であるが、「買地券」の釈読内容では被葬者と関係のある「好雄」が、被葬者のために土地を「買い求めた」旨が書かれている。出土状況から炭化物を包含する土中に立てるような状況で出土している点を考慮すると、報告文にある墓としての機能が妥当かどうかは再度検討を要する。なおその後の葬地としての土地利用は平安中期まで継続して行われ、奈良期から平安前期前半までが火葬墓、平安前期後半から平安中期までが木棺墓である。副葬品・供献品の種類が多いのが特徴として上げられ、鏡・輸入陶磁器・黒色土器・土師器・緑釉陶器・篠産須恵器など多彩である。なかでも他の大宰府周辺における葬地での副葬品・供献品の例と比較した場合、鏡や搬入遺物の質量が突出しており、この点から「公葬地」としての性格付与がなされている（狭川、

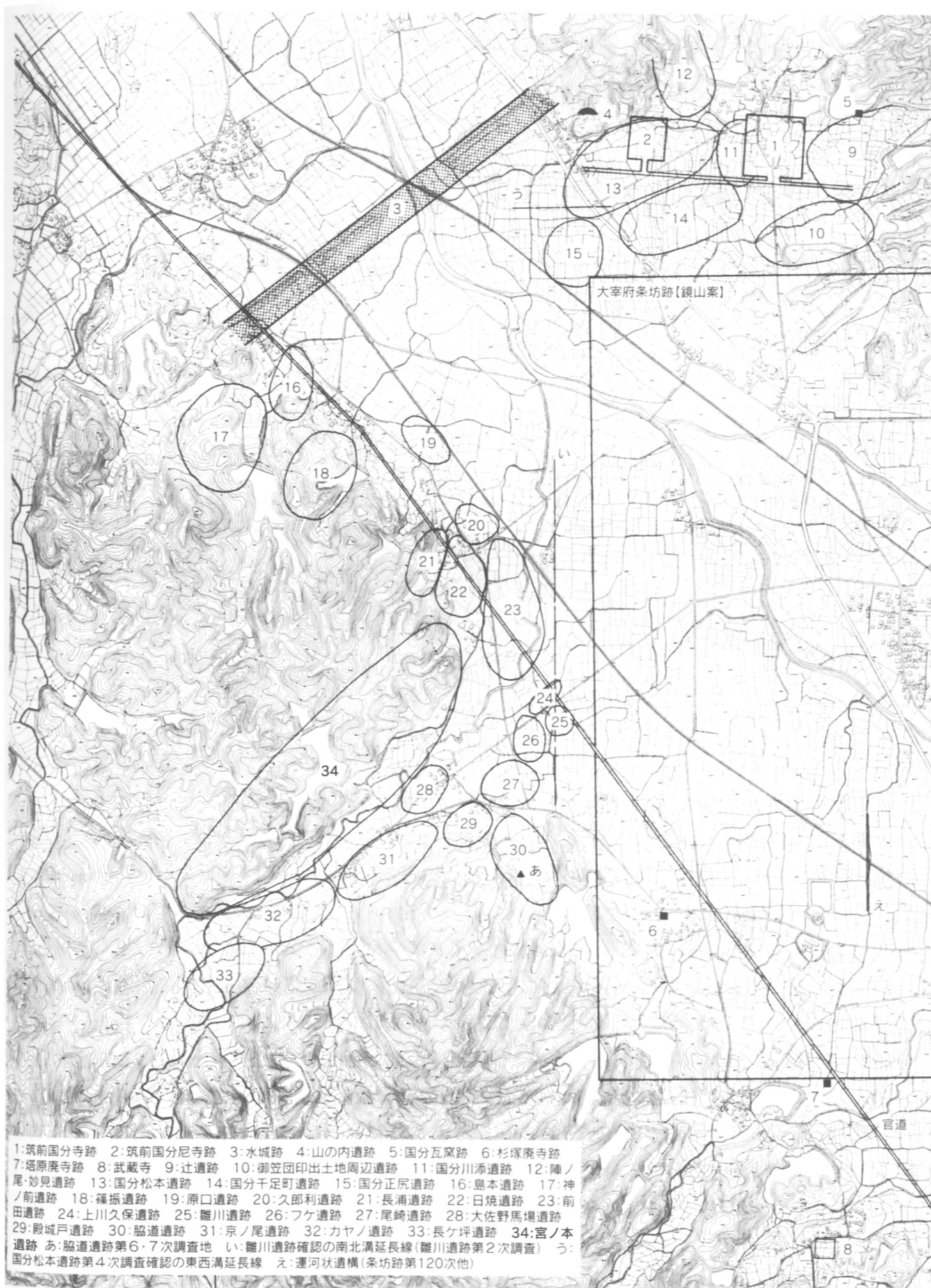


図1.報告遺跡周辺の環境

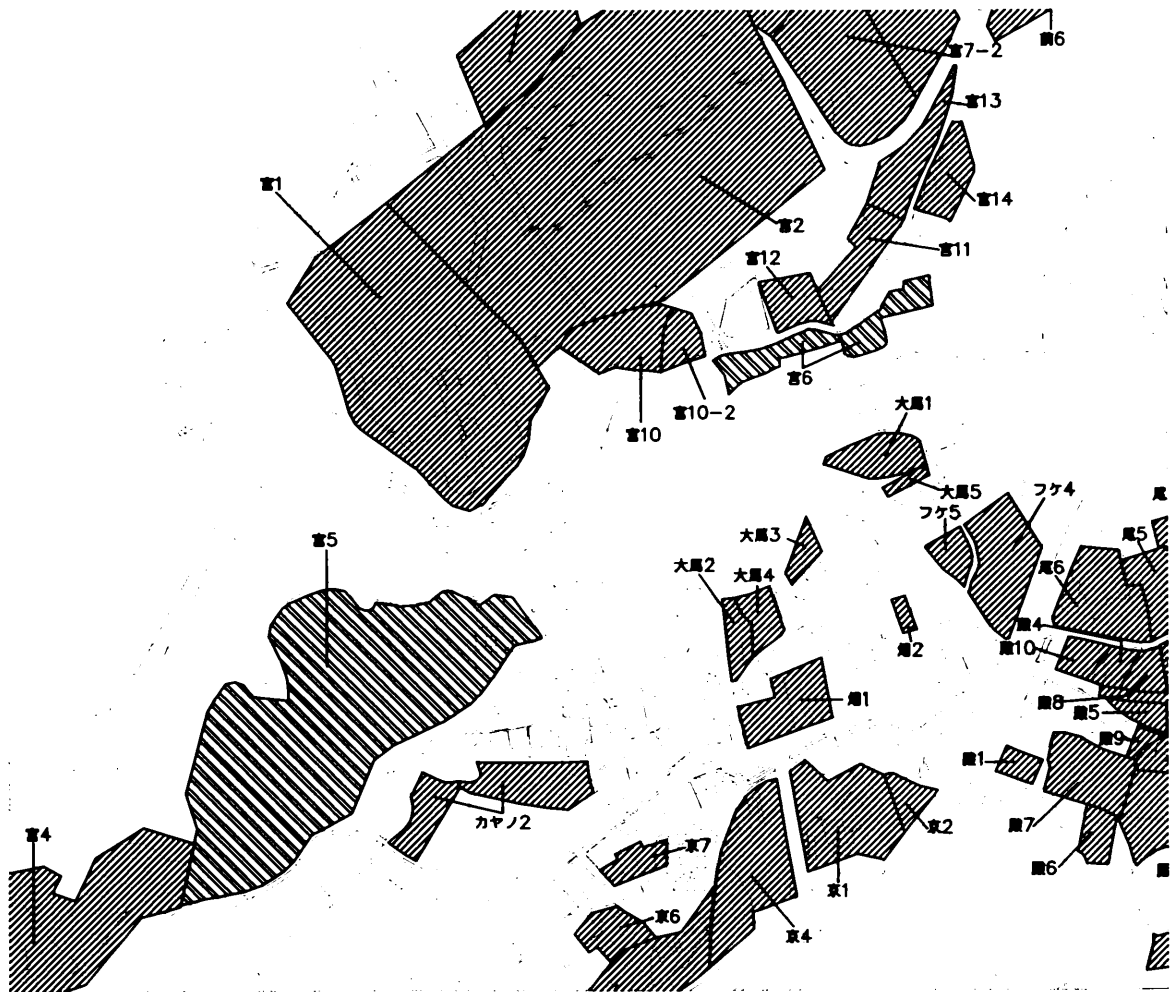


図2.報告遺跡周辺の調査実績

1998)。「公葬地」概念については、副葬品・供献品のみならず、その立地、墓造営集団の系譜、造営経緯などを複合的に解釈する必要がある。この点については、墓地立地、造営作法ならびに造営時間幅から後論にて検討する。

その後の土地利用は、平安後期から鎌倉期中世前期の遺物が散見されるが、明確な遺構が確認できておらず、詳細は不明である。

Ⅲ.学説史

宮ノ本遺跡は、歴史環境で記載したように原始から近世までの時期の遺跡であり、特に学説史上は古代における買地券出土例が日本において2例目、かつ出土例としては国内1例ということもあり、極めて重要な位置を占めている。宮ノ本遺跡の有する学説史上での位置は、多岐にわたり、墓・窯業遺跡としての学説史が際立って多い。

墓：古墳期から平安中期までの墓が形成されており、特に古代における大宰府との関係から論じられる古代の墓に関する論考が多い。

古代における墓に関しては、大宰府との関係から論じられることが多く、墓造営の現象面の

把握がまず行われた（中間、1984）。中間氏は、大宰府に展開している奈良期から平安期にかけての墓を集成し、生活空間としての条坊域と墓の関係を問い、墓域分布を三類型に区分された。1）条坊内にあるものの中心域からは外れ、かつ副葬品が豊富なもの。2）条坊内にありかつ中心域に近い場所に形成されるが、副葬品の質が1）に比して劣るもの。3）条坊内にあり中心域および官衙域に形成され、かつ副葬品が豊富なもの、の三類型を提起し、1）の造墓階層を一氏族の墓とし、2）を「庶民」の共同墓として解釈されている。それまで現象面の整備のみがおこなわれていた点を踏まえると、生活域との関係ならびに造墓階層まで踏み込んで論じられた点は評価できる。しかし現在の視点に立脚した場合、時間変化による墓地立地の変化、造墓階層指定の手続きが不明で、遺物の多寡が階層を想起させるのは現状でも変わらないが、並列する二者の墓の埋納品に差が観察される事例の解釈を考えた時、単に造墓階層に直結するものであるのかは疑問である。また被葬者の性別については、秋山浩三氏による分析があるが、その結果を大宰府における墓資料への適用が行われていないのが現状である。一方古墳と火葬墓との関連から造墓者を想定する論が狭川真一氏によって提示されている。狭川氏は、後期古墳造営地と古代の火葬墓との関係から1）継続的に造墓されるもの。2）一時断絶し、再度造墓されるもの。3）空閑地において新規造墓されるもの。4）継続的に造墓されるが、奈良期において断絶するもの、の4つに類型化された。これら4類型の造墓背景として、1）は在地豪族層の安定経営、2）は新興豪族層による系譜表明装置としての造墓、3）は新規墓地形成として、外在勢力による墓地経営開始、4）在地豪族層の没落をそれぞれ想定している（狭川、1998）。狭川氏の立論は間壁葎子氏や渡邊邦雄氏、花田勝広氏が論じた後期古墳の再利用に関する論考の一つに位置づけることができる（間壁、1982。花田、1988）。ただし墓地立地の視点は、後期古墳造墓者と古代における造墓者の系譜を同一と仮定した上での論であり、現象面理解としての可能性は否定できないものの、考古事象上からみた同一系譜を論証しておく必要がある。しかし、単系的な血縁関係では捉えることができない当時の親族関係であったとするこれまでの学説史を考慮するならば、古墳造営者と火葬墓造営者の間の親族関係を、血縁関係のみから立証することは容易ではない（義江、1985）。検証方法としては人骨の出土が一次的な手がかりではあるが、人骨検出例が少ないだけに資料面からも困難であり、今後検証方法、資料増加を含めて考えていく必要がある。また火葬墓の立地のみならず、狭川氏は埋納品の質を分析し、宮ノ本墓地の「優品」埋納傾向を導き出し、空間差としての宮ノ本墓地の優位性を結論付けている。埋納品からみた宮ノ本墓地の優位性は現在でも変更はなく、中間氏によって論じられた墓地傾向を資料増加と詳細な分析によって客観化されたものとして評価すべき内容であった（狭川、1990）。以上中間氏、狭川氏の墓地研究は、九州における古代の墓地研究を先導し、各地において傾向の把握がなされてくる。両氏の墓地研究は日本考古学における墓地研究の流れの中で位置づけられるとはいえ、北部九州にあって大宰府の特質を明瞭化せしめた点で重要な論考である。

両氏による宮ノ本墓地に対する論考以降、丘陵消滅を結果としてもたらした佐野区画整理事業が進行し、遺跡破壊とは裏腹に多くの墓地が確認され、両氏が論じた考察を追認する結果が

収集されている。

窯業遺跡：窯業遺跡としては、古墳終末期にあたる飛鳥期から奈良後期にかけての須恵器焼成窯が確認できており、大宰府造営期から律令体制期にかけての時期にあたる。特に飛鳥期にあたる宮ノ本2号窯跡については、その帰属時期が飛鳥III期ないしはIV期に該当し、大宰府造営時期、すなわち大野城、水城整備時期を考古事象上から特定できる材料を提供するだけに重要な位置を占める。宮ノ本2号窯出土資料と同一様相と考えられる資料が大宰府条坊跡第98次調査から出土しており、共伴資料中に畿内産土師器がありこの型式が飛鳥IIIないしはIV期に帰属するとされることから、その帰属実年代が西暦660年代から690年代に考えられ、宮ノ本2号窯が大宰府造営期の操業であると考えられるに至った（山本、1992・中島、2000）。ついで、奈良前期に位置づけられた宮ノ本9号窯は、同一様相下にあると考えられる大宰府史跡第160次SK4141から、やはり畿内産土師器が共伴し、この土器が平城宮式土器II新段階からIII古段階に帰属すると考えられている。また、当該遺構から出土した土師器が、大宰府政庁正殿調査にても出土しており、特に政庁I期遺構埋没時の堆積土から出土した土器と同一型式であることを考えると、政庁II期施工時期を表現するものとして考えられ、大宰府官制施行時期とも接合するだけに重要な意味を有する（中島、2000）。

これらの窯の他に奈良後期までの窯が検出されているが、いずれも単独窯であり、牛頸窯跡群内における他の支群の群在する窯跡のあり方とは、明らかに異なっている。これが何を意味しているのかは俄かに明らかにし難いものの、操業規模の小ささから臨時的操業を想定することは可能ではないだろうか。

集落遺跡：集落遺跡としては、今次調査成果により弥生終末期から古墳後期にかけての住居が確認できているが、宮ノ本遺跡ならびに佐野地区遺跡群内における集落総体としての評価に関する論考は見出せない。これまで集積された調査情報の公開が原因しているが、文化財保護行政としての発掘調査を位置づけた場合、早急な報告公開が必要となる。

佐野地区遺跡群内での発掘調査が開始されて、17年の歳月が経過し、多くの遺跡が記録保存を行うことで消滅してきた。本報告で取り上げた宮ノ本遺跡が所在していた宮ノ本丘陵も、ついに消滅してしまい、当時の景観を観察することは、もはやできなくなってしまった。これまで収集された記録が、結果として「現象面」の記録にとどまっており、歴史に結びつける記録となり得ているのかは、調査成果の評価を行うことこそが重要である。これまでの成果の印象からのみ描き得る点は多々あるものの、調査された各調査成果の細部にわたる整理作業を実施することで、共時的空間利用を把握し、学説史的に描かれている時代像との検証作業を行う必要性を感じている。具体的には、住居および墓の階層化、貯蔵施設の集積化、分業機構の形態など多岐にわたる。また、現代の行政区という枠内での評価は必要ではなく、広域的な視野での分析が必要であることは述べるまでもない。

上記の諸点を踏まえ、最終章において北部九州における墓地変遷分析への基礎資料の整備を行う。

【引用文献】

- 間壁霞子（1982）「八・九世紀の古墳再利用について」『日本宗教社会史論叢』水野恭一郎先生頌寿記念会
- 中間研志（1983）「大宰府の奥津城」『大宰府古文化論叢』下巻 九州歴史資料館
- 義江明子（1985）「古代の氏と共同体および家族」『歴史評論』No.428 歴史科学協議会
- 花田勝広（1988）「律令制の確立にみる葬地の変革」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会
- 狭川真一（1990）「古代都市・大宰府の検討」『古文化談叢』第23集 九州古文化研究会
- 山本信夫（1992）「4.まとめ」『宮ノ本遺跡Ⅱ -窯跡篇-』太宰府市教育委員会
- 狭川真一（1998）「古代火葬墓の造営とその背景」『古文化談叢』第41集 九州古文化研究会
- 中島恒次郎（2000）「大宰府における実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会

Ⅳ.調査の概要

1.宮ノ本遺跡 第5次調査

1) 調査に至る経過

平成2年11月に対象地において区画整理事業に伴う工事計画が立案されたことにより、事前調査を行うことで担当課である区画整理課と合意した。発掘調査は平成2年11月5日から平成3年1月8日までの期間に行った。地番は大字向佐野236-1外、開発対象面積は10,000m²、調査面積は7,400m²を測る。調査は中島恒次郎・緒方俊輔が行った。

2) 基本土層

丘陵部では、表土除去後に花崗岩風化土が確認でき、この風化土に焼土坑などの遺構が検出できた。C区などの丘陵裾部では、崩壊土などの堆積層が観察できるが、それら堆積層を除去すると遺構が確認できる。

3) 検出遺構(付図)

丘陵部の調査で、樹木伐採後に適所を判断しトレンチを設定して重機にて確認調査を実施した。その後、遺物ないしは遺構が確認できた箇所を拡張し、手作業による精査作業へ移行した。結果としてA～C区と設定した調査箇所にて、弥生期から江戸期までの遺物ないしは遺構を確認している。また丘陵を利用して、江戸期から現代までの大佐野地区の墓所が営まれており、墓所経営事情を知る上で重要と判断し、墓石の記銘調査ならびに遺構としての墓の調査をその後、補足調査として実施した。

a.焼土坑

遺構壁面に焼土が確認でき、遺構底部に炭化物層が堆積している。このような遺構の性格に関しては、木炭製作用施設・火葬用施設など様々な解釈が示され、遺構形成空間の解釈によって性格付与を考える必要がある点を確認されているものの、具体的には性格不明であるのが現状である。したがってここでは、焼土坑として報告するが、「土坑」略称であるSKは用いず、性格不明な点を考慮して、「SX」略称を用いることにする。

5SX001 (A区 図3)

A区中央にて検出したもので、丘陵中腹部分に位置している。丘陵上位を整形し、平坦面を形成した後、整形箇所中央部に焼土坑がつくられている。丘陵上位の整形箇所は、長軸長5.55m、短軸長2.45mを測り、その下位に長軸長1.15m、短軸長0.7m、残存する深さ0.5mを測る長方形の焼土坑が形成されている。焼土面は長軸面2面、短軸面1面で、長軸面の焼土面は長軸方向に約半分程度が焼けている。底部には小穴による凹凸が顕著に観察でき、その上位に炭化物層が0.25mほど堆積していた。なお、丘陵整形部分から土師器(図10-3)が出土しており、おそらくは遺構使用時期に直接結びつく可能性が高い。

5SX002 (A区 図4)

A区中央丘陵頂部付近で検出したもので、丘陵上位部分が崩壊しており、平面形が三角形を呈しているが、原形としてはやや不整形ながら長方形を呈している。焼土坑部分の長軸長は0.94m、短軸長0.75m、残存する深さ0.5mを測り、底部分には小穴が多数形成されている。そ

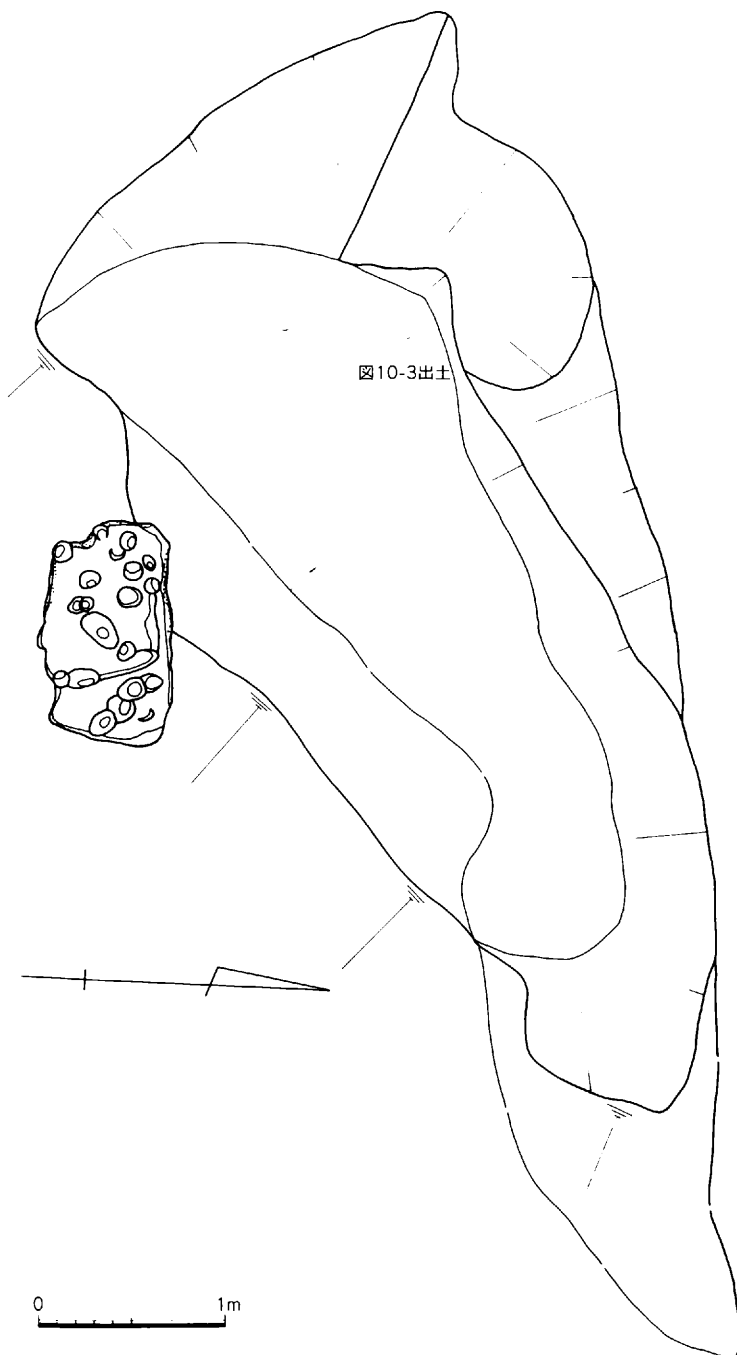


図3.A区SX001遺構実測図 (S=1/20)

の上位には炭化物層が丘陵下位部分に堆積していた。当該遺構の焼土面は、さほど顕著ではないものの、わずかながら長軸面の2面に観察できる。

5SX003 (C区)

C区西端部に検出したもので、後世の攪乱によって部分的に崩壊しているものの、ほぼ長方形の形をとどめている。長軸長1.72m、短軸長0.9mを測り、残存する深さ0.5mを測る。焼土面は全ての壁面に観察でき、酸化・還元両層が確認できる。底面には小穴が多数形成されており、その上位に炭化物層が0.2mほど堆積していた。

5SX004 (C区)

C区北西端にて検出したもので、遺構長軸の1面が根穴によって崩壊していた。長軸長1.31m、短軸長0.92m、残存する深さ0.4mを測り、底面には小穴が確認できるが、他の遺構に比して極端に少ない。壁面は長軸面2面、短軸面1面に還元層を確認している。酸化層は全ての面に確認できている。底面から0.17mほど炭化物層が堆積していた。

5SX006 (C区)

C区北端部にて確認したもので、長軸長1.16m、短軸長0.83m、残存する深さ0.2mを測る。壁面の焼土は、長軸・短軸ともに1面のみで、酸化・還元両層ともにわずかな残存であった。底面には小穴が形成されているが、他の遺構に比して少ない。底部に堆積している炭化物層は0.07mと薄層で、遺構の残存度合いが極端に悪かった。

5SX007 (C区)

C区南部に確認したもので、不整形ながら長方形をとどめている。長軸長0.95m、短軸長0.55~0.39m、残存する深さ0.3mをそれぞれ測る。焼土面は長軸面に極わずかに観察できる程度で、底面にもわずかに確認している。遺構が部分的に崩壊しており、全体の状況を反映して

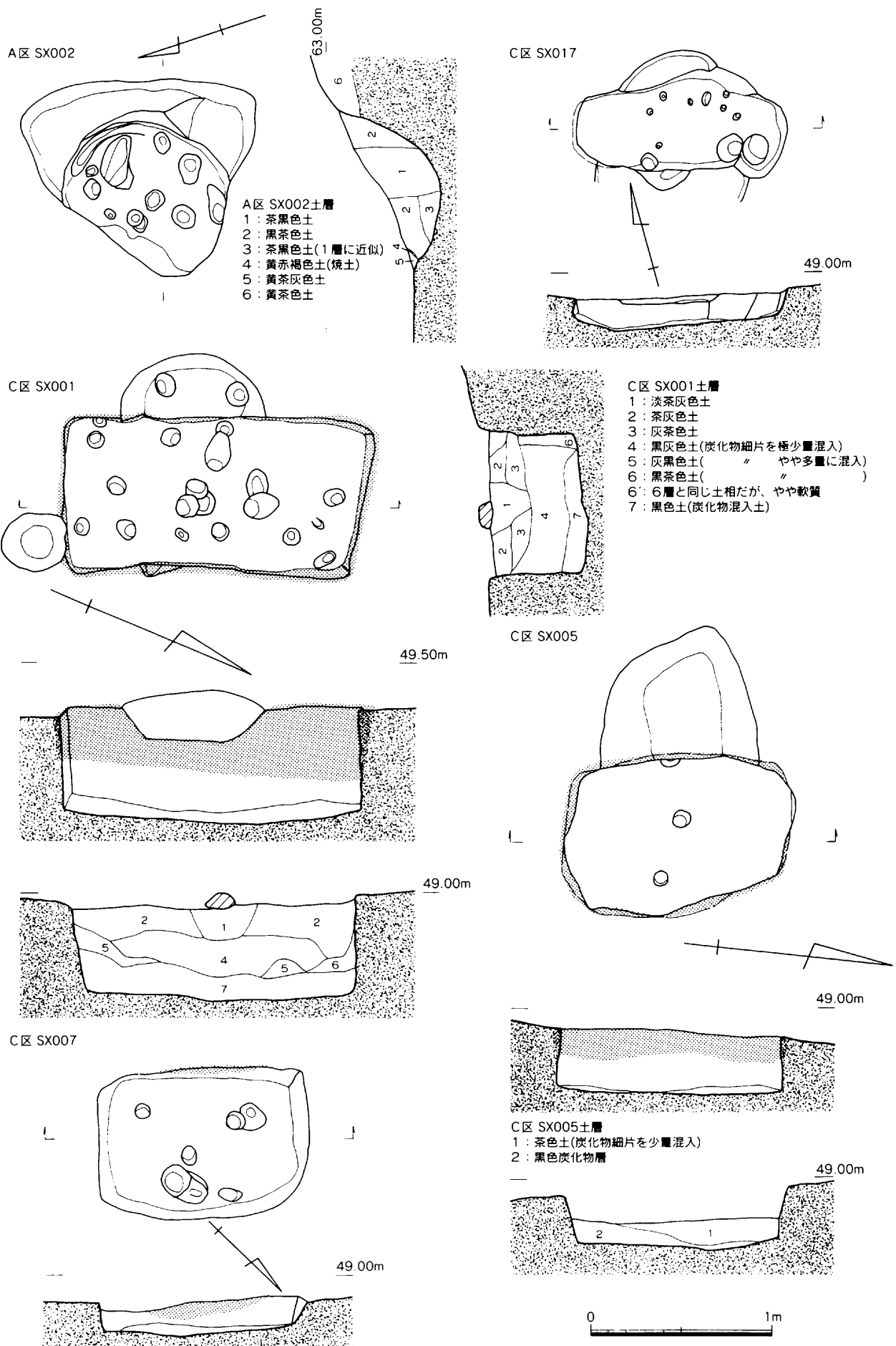


図4.焼土坑遺構実測図 (S=1/30)

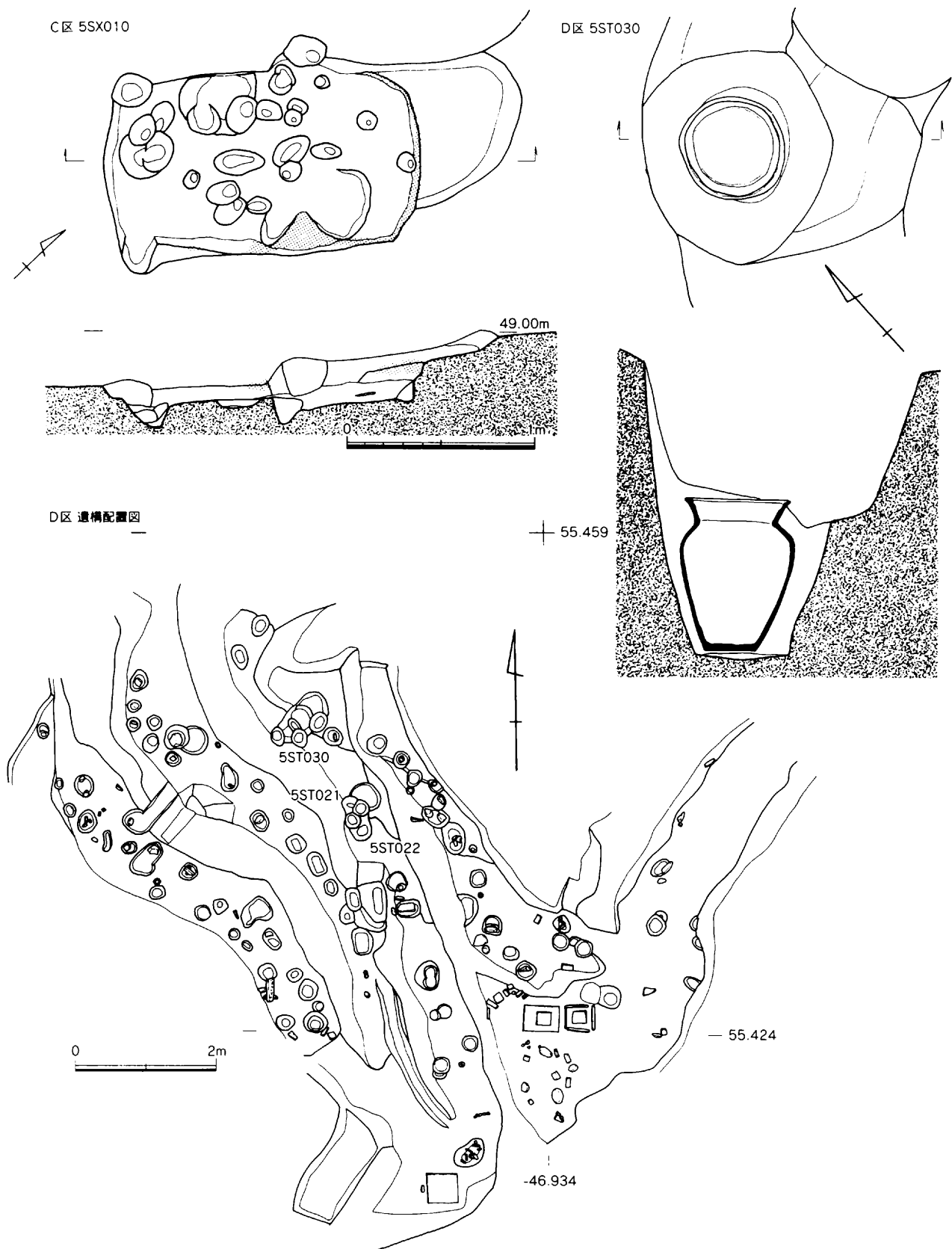


図5.焼土坑・甕棺墓遺構実測図 (S=1/30)、D区遺構配置図 (S=1/80)

いるかどうかは不明である。底面には小穴がわずかに観察できる。

5SX008 (C区)

C区南東部にて確認したもので、長軸長1.69m、短軸長0.98m、残存する深さ0.32mを測る。焼土面は長軸面2面、短軸面1面に酸化層が観察でき、底面に小穴が多数検出された。これら小穴上位に炭化物層が観察できる。

b. 近世墓

A区とC区の間に形成されている墓域で、江戸期からの墓誌が観察できたことから、急遽記録作成を行った。遺体埋葬形式には、甕棺、脳骨壺、方形木棺など様々である。骨が残存するものもあり、記録作成後、墓域を統括する寺へ移管した。

b-1. 墓石法名 (図6)

D区 5ST021・022

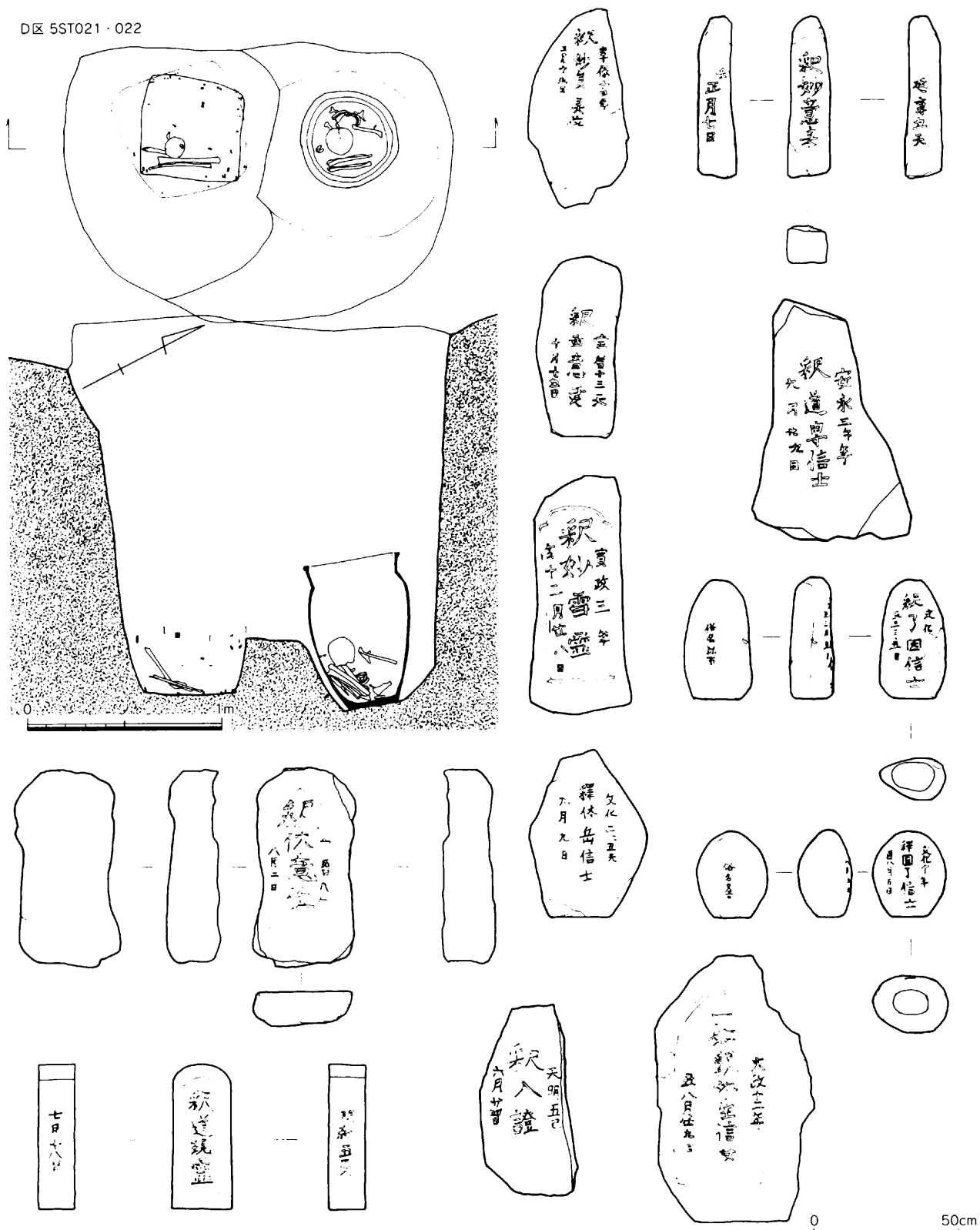


図6.墓遺構実測図 (S=1/30)、墓石実測図 (S=1/20)

当該地は、昭和30年代の改葬まで大佐野地区の墓地で、改葬時にその多くは倒れており、古いものは享保十四（1729）年銘のものから確認できた。墓石法名には異体字も多く、判読は容易ではなかった。

4) 出土遺物

a. 墓出土遺物（図7）

5ST021

陶器

壺（3） やや上げ底気味ながら平底から直立する体部形態を有し、口縁端部を平坦に仕上げる「バケツ」状の形態をとるもので、骨蔵器として利用されたものと考えられる。器表面が平滑なため成形・調整痕跡が観察できない。

5ST024

陶器

蓋（20）

b. 土坑出土遺物（図7～9）

5SX002

須恵器

蓋c3（1） ボタン状のつまみを貼付するもので、口縁端部形状が断面三角形を呈し、2工程による成形を行っている。天井部外面は全面を回転ヘラ削りによって仕上げておいる。やや歪みがあるように観察できる。

壺d（2） 肩部から上位ならびに底部を欠損しており、全形を推し測ることができない。肩部下位に粘土紐による縦方向の耳が二箇所貼付されており、双耳壺に位置づけられる。体部外面下位を1/3ほど回転ヘラ削りによって仕上げておいる。

5SK023

陶器

いずれも骨蔵器に使用されるものと考えられる。

蓋（4・6・8・10・12・14・16・18） 全てかえりを有する蓋で、施釉を行うもの（4・6・12・14・16・18）と素焼きもの（8・10）の二者がある。また施釉をするものは、黄釉（4）、灰釉（6・12・14）、鉄釉（16）、緑釉緑彩（18）と様々である。17は底部外面に「検」の文字が印刻される。

壺（5・7・9・11・13・15・17・19） 施釉するものと、無釉のもの二者があることは先の蓋と同様であり、加えて釉薬の状態は蓋と一致するように同質の釉が掛けられている。なお壺の形態には、短頸壺のもの（5・7・13・17・19）と「バケツ」状のもの（9・11・15）がある。また緑釉緑彩を施す19には見込み部分と畳み付け部分に目跡が観察できる。

5SK031

陶器

5SK002

5ST021

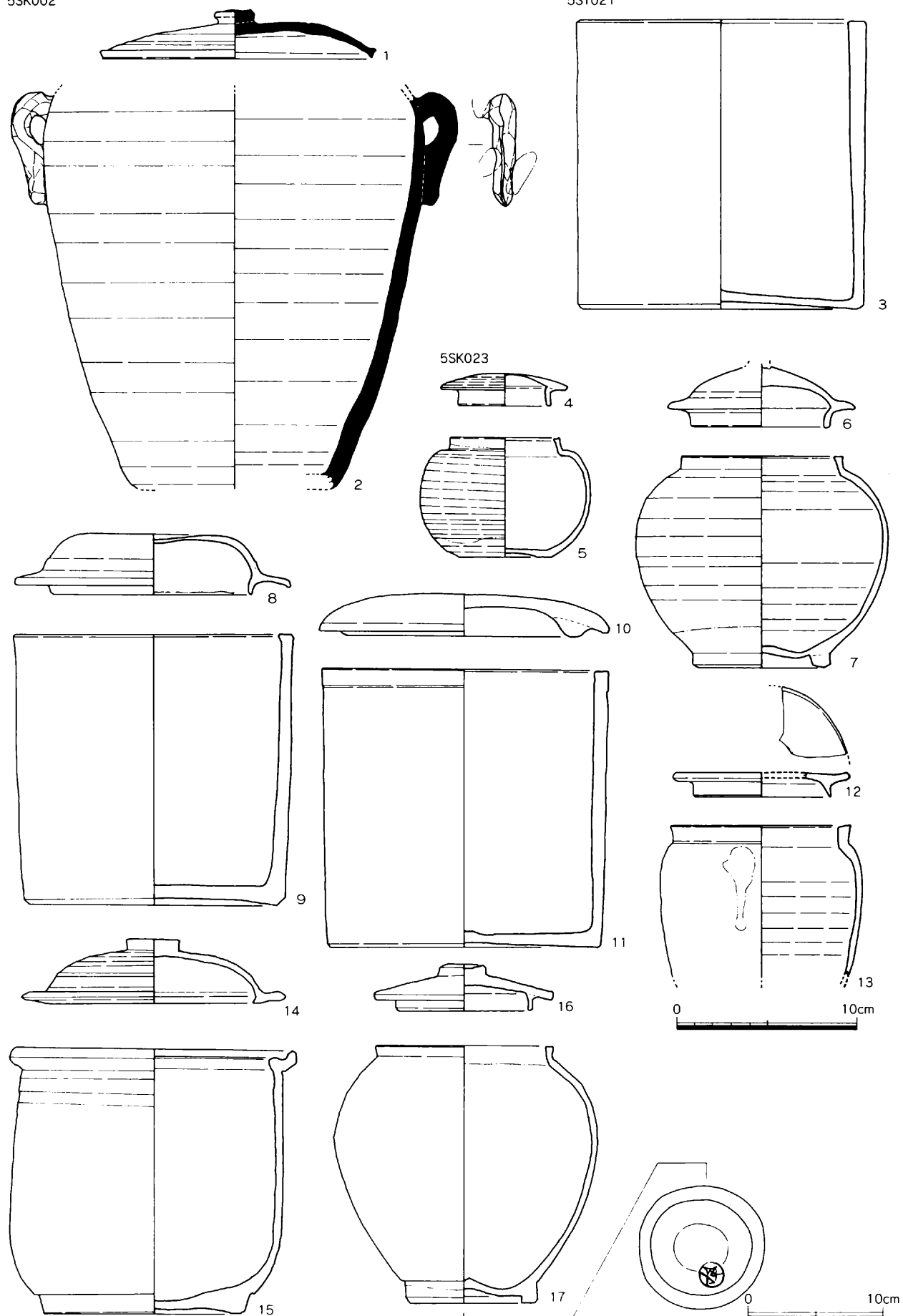
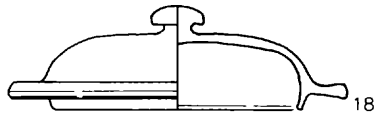


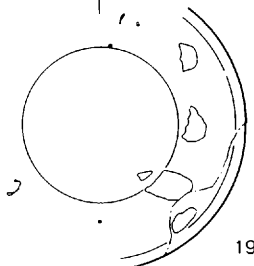
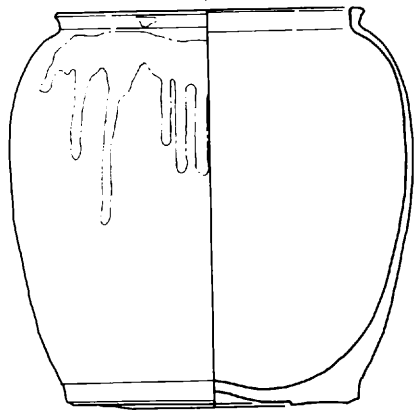
図7.土坑・墓出土遺物実測図(1)(S=1/3・1/4、16・17:1/4)

5SK023

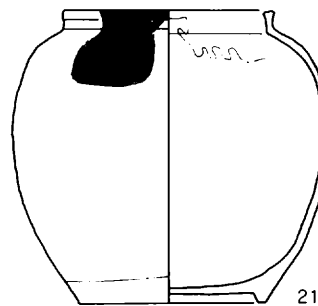


5ST030埋土

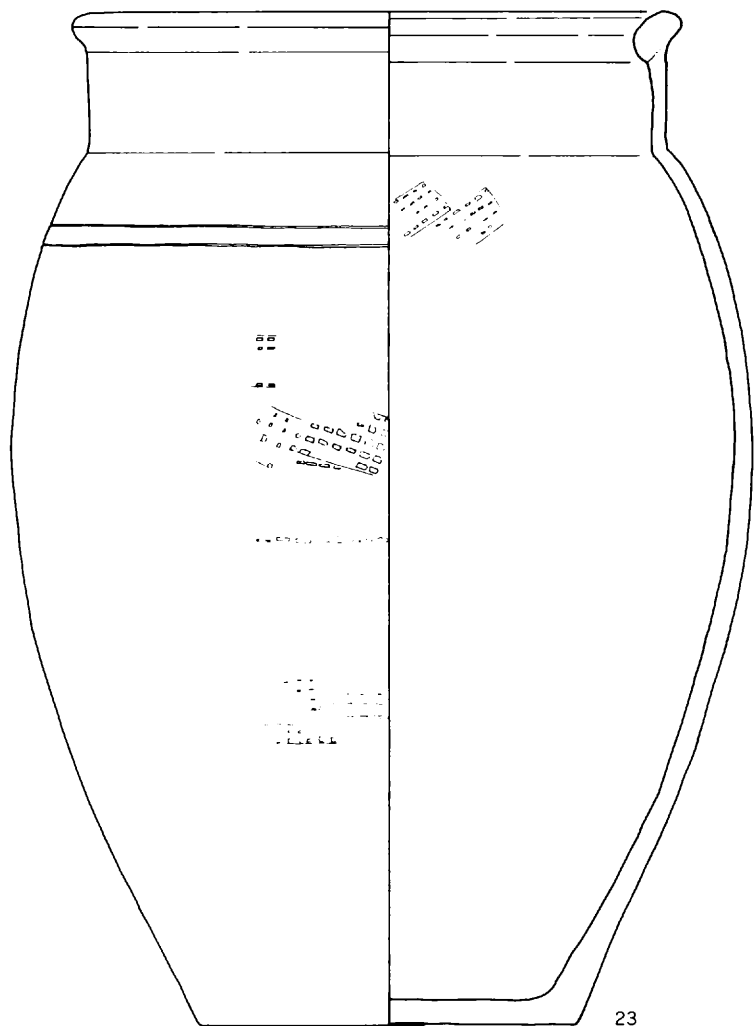
市百



5ST024



5SK031



0 10cm

0 10cm

図8.土坑・墓出土遺物実測図 (2) (S=1/3・1/4、18~21:1/4)

甕 (23)

甕棺として利用されたものと考えられるが、調査所見では土坑とされていることから甕として報告する。頸部を直立気味に立ち上げるもので、口縁端部を内側に肥厚させる。体部外面には叩き痕跡が観察できる。口径32.2cm－器高53.5cmを測る。

5SK032

陶器

蓋 (25) かえりを有するもので、同一遺構出土として報告する陶器甕には伴うものとは考えられない。外面には丁寧な磨き痕跡が観察でき、光沢を有する。

甕 (26) 中型の甕で、青白色釉と青緑色釉を二度掛けし底部内外面に目跡が観察できる。口径38.8cm－器高47.8cmをそれぞれ測る。

5SK036

土製品

土鈴 (27) 素焼きのもので、紐を通す箇所はつまみ上げによって成形され、その他の箇所は丁寧なナデによって成形されている。

c. その他の遺構出土遺物 (図10)

5SX001 焼土坑

須恵器

杯a (1) 底部から体部への開きが、直線的に外方へ立ち上るもので、底部外面は回転ヘラ切り、底部-体部の境界部分が明瞭な屈曲部を形成している。口径12.8cm、器高3.95cmを測る。

杯c (2) 杯aと同じ形態で、外端部をやや跳ね上げる高台形状をとる。見込み部分は成形のための回転ナデの後、不定方向のナデによって仕上げている。

5SX001

土師器

杯d (3～5) 3以外は破片資料であり、全形を伺い知れないものの、調整技法、形態から杯dと判断した。全形の分かる3は、平底の底部から丸みを有しつつ立ち上がるもので、内外面ともに回転ナデにより成形し、底部～体部下位の外面を回転ヘラ削りにより丸く仕上げている。4と異なり回転ヘラ磨きが観察できないことから、杯d形式内においても新しい型式にあたると考えられる。4は成形技法ならびに底部から体部外面の回転ヘラ削りは3と同じであるが、底部外面を除く多くの部分を回転ヘラ磨きによって仕上げている。そのことから3とは異なり杯d形式内における古い型式にあたると考えられる。5はやや外反する口縁部形態を呈している。

5SX009

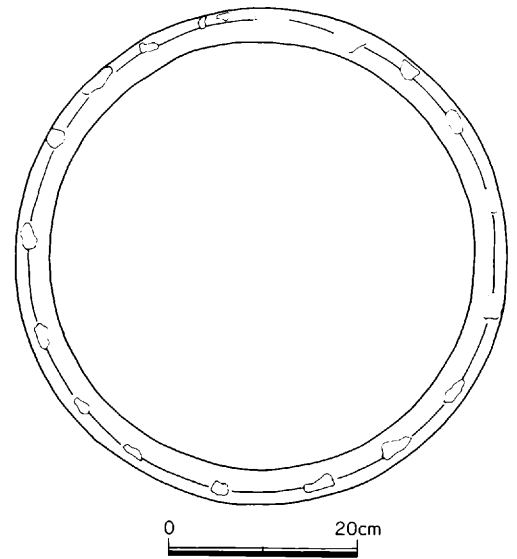
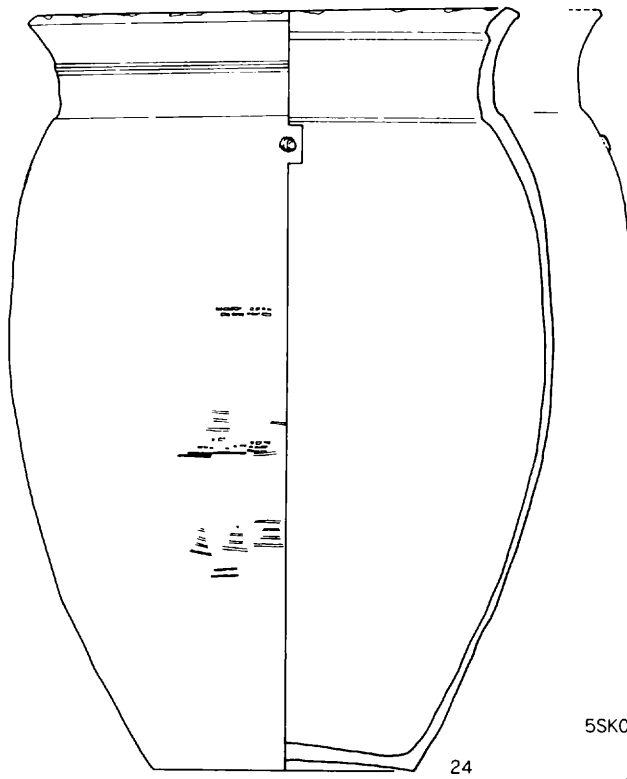
石製品

スクレーパー (6) 黒曜石製で、調整のための細かい剥離が観察できる。使用痕跡については明確に観察できていない。

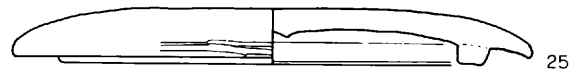
5SX037

土師器

5ST030



5SK032



5SK036

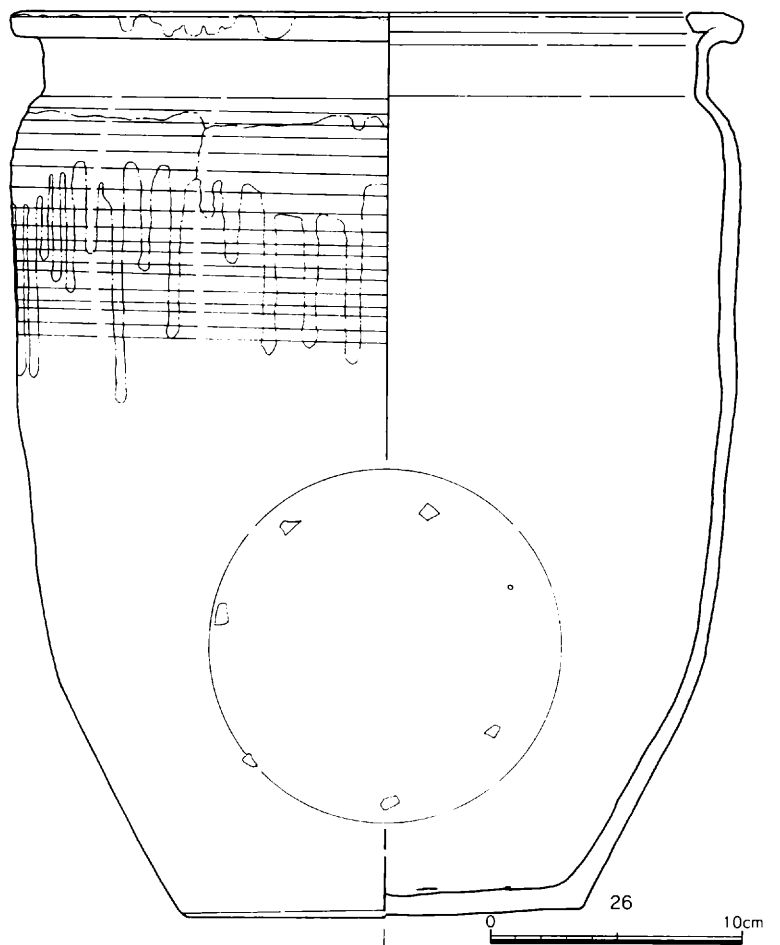
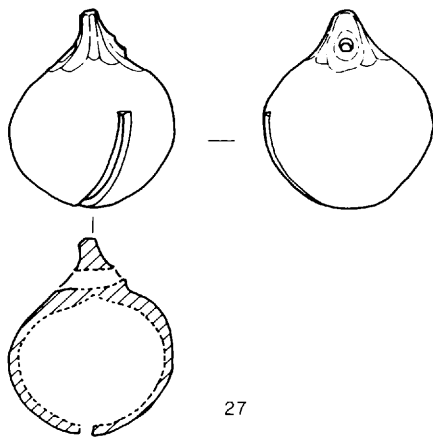


図9.土坑・墓出土遺物実測図 (3) (S=1/3・1/8、24:1/8)

皿a (7) 底部のみの破片資料で、全形については明らかにし難いが、底部－体部境界が丸く、やや外方に開く口縁部へ至るものと推定できる。底部を含む外面は回転ヘラ磨きによって仕上げられており、内面は回転ナデにより成形し、見込み部分は不定方向のナデにより仕上げている。

甕a (8) 頸部を「く」字に屈曲させ、丸底を有するもので筆者分類の甕II類に該当する（中島、2001）。口縁部内面～外面についてはハケにより調整し、体部はヘラ削り、底部内面は指頭圧痕跡が観察できる。

d.土層出土遺物（図10）

黒茶色土

縄文土器

浅鉢 (9) 口縁部のみの破片で、全形は不明。口縁部を平坦に外方へ屈曲させる。胎土には白色砂粒を多く含む。焼成が悪く、成形調整痕跡は観察できない。

須恵器

杯身 (10) 口縁部のみの破片で、法量の確認ができないが、やや深めの器高を有するものと考えられる。体部下位の調整痕跡は磨耗のため不明。

杯蓋 (11) 底部から体部への立ち上がりの回転ナデが観察できないことから、杯蓋と判断した。天井部外面は回転ヘラ切り後、未調整でヘラ記号と考えられるヘラ描き条線が三条観察できる。口径13.2cm、器高2.7cmを測る。

蓋1 (16) 口縁部のみの破片で、つまみの有無については不明。かえりを有する蓋で、かえり部分が口縁部より出ないものである。天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げている。

蓋3 (12～15・17) つまみの貼付が確認でき蓋c3と認定できるもの（12～15）と、口縁部のみのもの（17）がある。つまみの形状が確認できるものは「ボタン」状のもので、天井部－口縁部の境部分のみを回転ヘラ削りするもの（12・14）と、未調整のもの（13・15）がある。口縁部のみのもの（17）は、破片資料のため推定ではあるが大型の蓋になるものと考えられ、天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯c (18) やや高脚の高台形状をとり、底部から体部への移行箇所を丸く仕上げている。口縁部はやや外方へ開き、内外面ともに回転ナデによって成形調整している。

製塩土器

煎熬土器 (19) 煎熬土器として考えたが、体部のみの破片で確定的なものではない。焼成が悪く、実測図からは須恵器甕と判断できるものであるが、土師質の焼きで胎土中に砂粒を多く混入し、かつ叩き技法を用いているものであることから煎熬土器の破片であると判断した。

表土

土師器

小杯 (20) 手づくねにより成形したもので、口径7.0cm、器高3.3cm、底径3.9cmを測る。内外面に指頭圧痕跡をとどめ、口縁部は横ナデによって仕上げている。

杯a (21) 口縁部のみの破片資料で、外方へ大きく開く体部形状をとる。内外面ともに回転

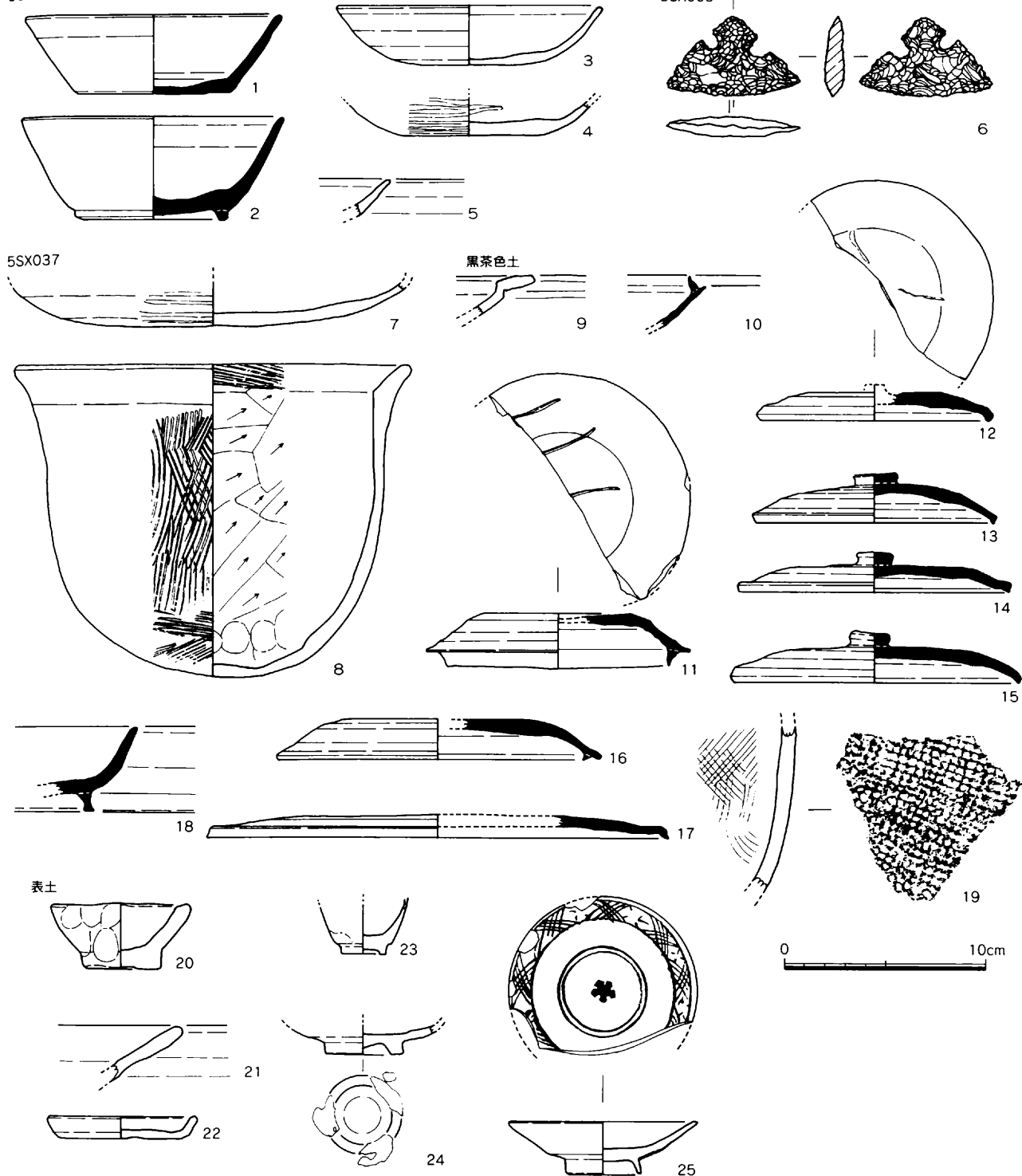


図10.その他の遺構・土層出土遺物実測図(2)(S=1/3)

ナデにより仕上げる。

小皿a1 (22) 底部外面に切り離し痕跡として回転糸切り痕をとどめるもので、口径7.4cmを測り、胎土中に白雲母細片を多く含んでいる。

白磁

小杯 (23) 高台径2.3cmを測る小型のもので、高台から底部外面を除く全面に、青味がかった白濁釉を掛けている。

椀×皿 (24) 高台から底部にかけての破片資料で、向付け様のものと考えられるが、椀×皿

と記載する。高台畳み付け部分に目跡が観察できる。見込み部分に煤状の付着物がある。

染付

椀×蓋（25） やや足高の高台から、直線的に外方へ開く体部形態をとるもので、見込み部分に五弁花の文様を描く。体部内面に呉須による袈裟襷文を描く。足高高台形状から蓋の可能性もあると考えられる。

5) 小結

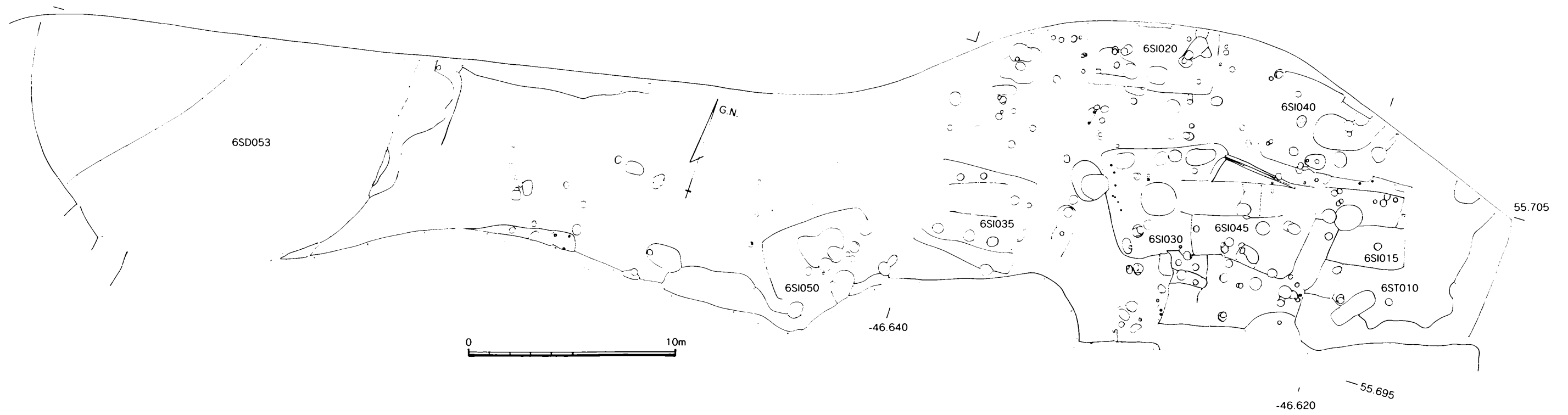
宮ノ本遺跡が有する墓域ならびに窯業遺跡としての性格から、報告してきた焼土坑の性格に関しては、空間利用状況が錯綜している遺跡ということもあり、断定し難い。同一遺跡内において検出した9号窯跡灰原下位に検出した焼土坑に関して、木炭製作のためのものではないかとの考えを示したが、これに関しても再考の必要はある。これら錯綜した状況の解決方法の一つとして、脂肪酸分析を行ってきたが、今ひとつ断定的な情報を得ることができていない。これは分析法のみに帰せられる問題ではなく、試料環境（試料の抽出～保管環境）にも帰せられるものであることから、今後の課題にせざるを得ない。

このような不安定な成果にありながら、5SX001において、遺構の形成ないしは使用時期の一端を知り得る手がかりを得ることができた点は特筆できる。その時期は、丘陵整形時期と考えられる遺構直上において土師器杯dが確認でき、その帰属時期から考えて奈良期中頃から後半の時間内に位置づけることができる。

【引用文献】

中島恒次郎 2001 「大宰府における土師器甕の変遷」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

遺構配置図



遺囑略測図

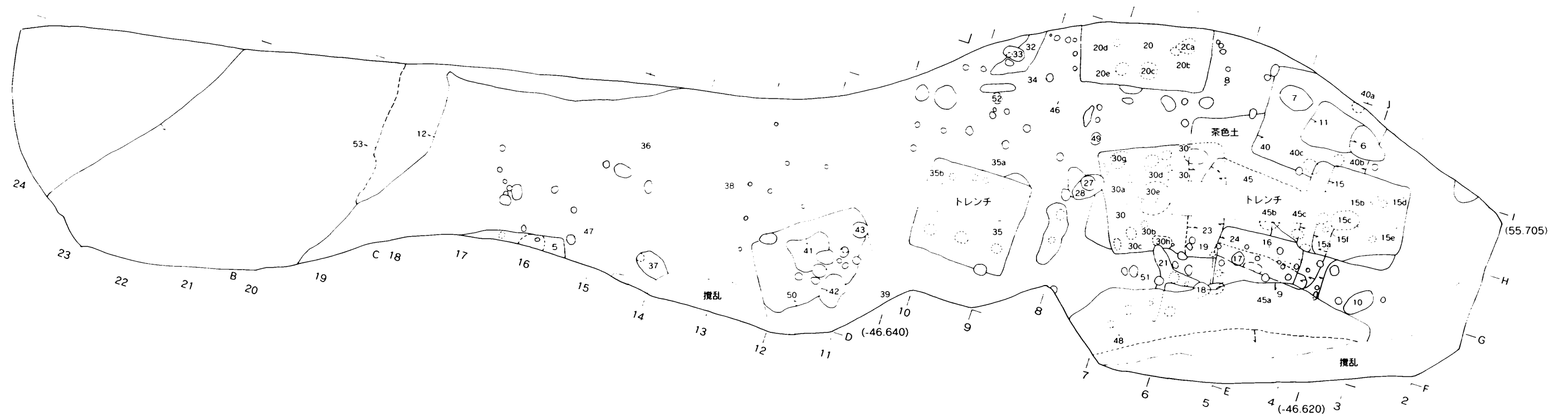


図11.宮ノ本遺跡第6次調査 遺構配置図・遺構略測図 (S=1/200)

2. 宮ノ本遺跡 第6次調査

1) 調査に至る経過

平成2年7月に対象地において区画整理事業に伴う工事計画が立案されたことにより、事前調査を行うことで事業課である区画整理課と調整し、その後確認調査を行い埋蔵文化財が確認されたことにより発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は平成2年7月9日から平成2年7月30日までの期間に行った。地番は大字向佐野197・192-1外、開発対象面積は60,000m²、調査面積は900m²を測る。調査は中島恒次郎が行った。

2) 基本土層

調査着手まで水田利用がなされていたため、耕作土除去後に茶色土が堆積しており、18ライン以西にはその下位に黒茶色砂が堆積している。

3) 検出遺構

a. 竪穴住居

6SI015 調査区東部にて検出した遺構で、周辺における各住居遺構の中で最も新規の遺構にあたる。遺構形状は略方形で、4本主柱を有するものと判断される。主柱の径は、約0.3m、深さ0.4mを測る。中央には焼け面は観察できなかったが、長軸長1.48m、短軸長1.26mの窪みが確認できた。遺構規模は、長軸長4.86m、短軸長4.42mを測り、検出面からの深さは約0.2mと残存状況は悪い状況であった。

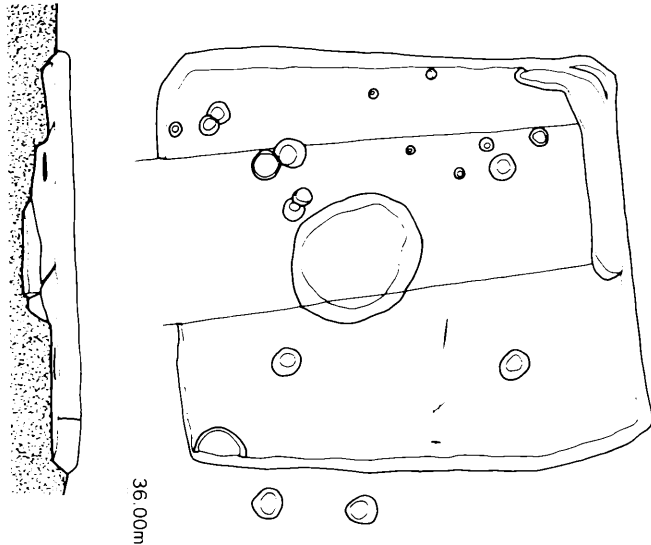
6SI020 調査区北端部にて検出した遺構で、全形については明らかにし難いものの、略方形ないしは長方形を呈するものと判断される。4本主柱穴を有するものと考えられ、南壁中央部分に入り口と考えられる土坑が検出できている。主柱穴の規模は、径0.3～0.4m、床面から0.45mの深さを測る。入り口施設と考えられる土坑（6SI020c）は長軸長1.54m、短軸長1.3m、深さ0.36mを測る。なお実測図として提示したものは、床形成土を除去した状況を示している。

6SI030 調査区東側にて検出したもので、長軸長6.2m、短軸長5.04mを測る略方形を呈している。4本主柱のものと考えられ、主柱規模は径0.3m、床面からの深さ0.18m程度を測る。遺構中央部には、長軸長1.13m、短軸長1.84m、床面からの深さ0.24mを測る。なお、南壁中央部分（6SI030h）には焼土および赤変箇所が観察でき竈が存在した可能性を示唆している。遺構南東部の窪みは、後述する6SI045を誤って掘ったことによるもので、当該遺構とは関係しない。

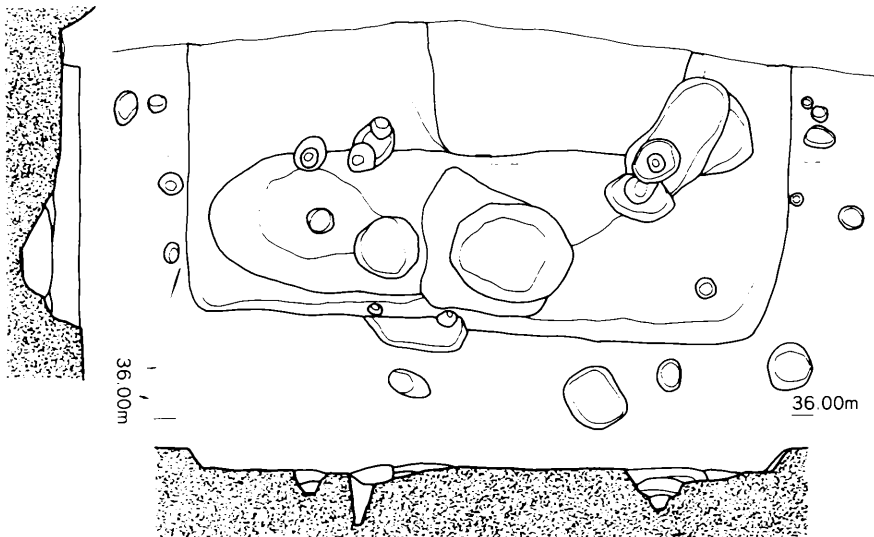
6SI035 調査区中央部にて検出した遺構で、長軸長4.8m、短軸長4.5mを測る略方形を呈している。検出面から床面までの深さは0.12mと浅く、残存状況としては悪かった。4本主柱を有するものと考えられ、主柱の規模は径0.3～0.5m、床面からは0.43mの深さを測る。なお調査時の情報収集に不備があったため入り口部の位置に関する情報を得ていなかった。

6SI040 調査区東部にて検出した遺構で、北東部を調査区外へ展開することから欠失しているものの、長軸長5.9m、短軸長4.3mを測る長方形を呈している。検出面からの深さは0.2mと極めて悪い状況であった。遺構内に攪乱坑があることから主柱穴の位置と数についての情報が欠失しているものの、遺構形状ならびに遺構西半部における小穴の位置から、2本主柱を有す

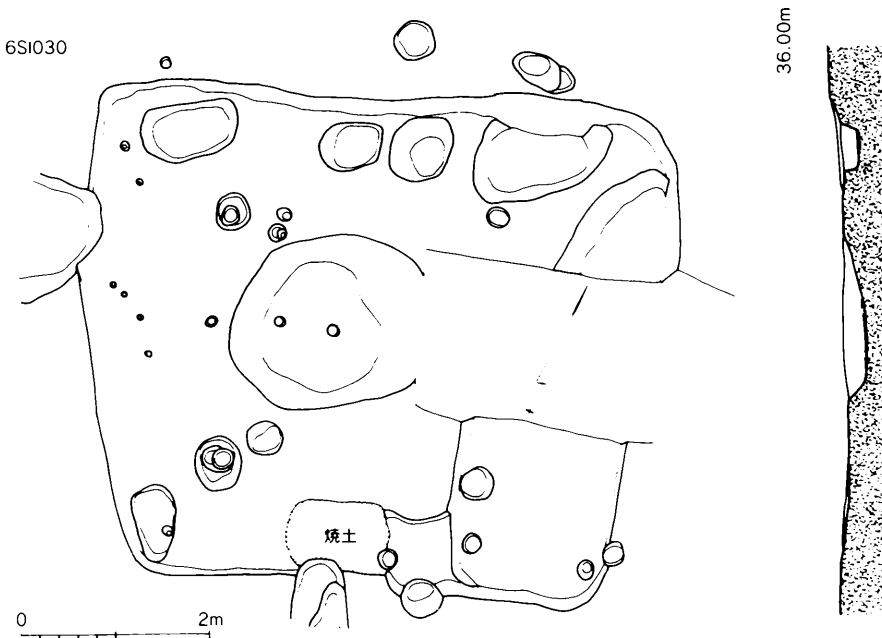
6SI015



6SI020



6SI030



るものと考えられる。また入り口施設と考えられる土坑が南壁中央にて検出され、長軸長0.96m、短軸長0.66m、床面からの深さは0.3mをそれぞれ測る。

6SI045 調査区東部にて検出した住居遺構で、周辺の住居に対して最も切られている遺構にあたる。前後関係は以下のとおり。遺構内には暗茶色土が堆積しており、入り口と想定される6SI045a土坑から小型製鏡が1面出土している。主柱穴を2基検出し、床面からの検出された深さは0.5m内外を測る。東側床面にてベット状の高まりを検出したが、西側については6SI030によって削平されているためか明確に検出できなかった。北側壁際には壁溝と考えられる小溝が確認できている。遺構規模は、長軸長6.8m、短軸長4.5mを測る。検出面からの残存する床面までの深さは0.3mと極めて浅く、残存状態はよくなかった。

【前後関係】

6SI045 → 6SI030 → 6SX025 → 6SI015

6SI050 調査区中央部にて検出したもので、遺構南半分を後世の削平によって欠失している。なお主柱穴が明確ではなく、残存状態も不明瞭

図12. 竪穴住居跡遺構実測図 (1) (S=1/80)

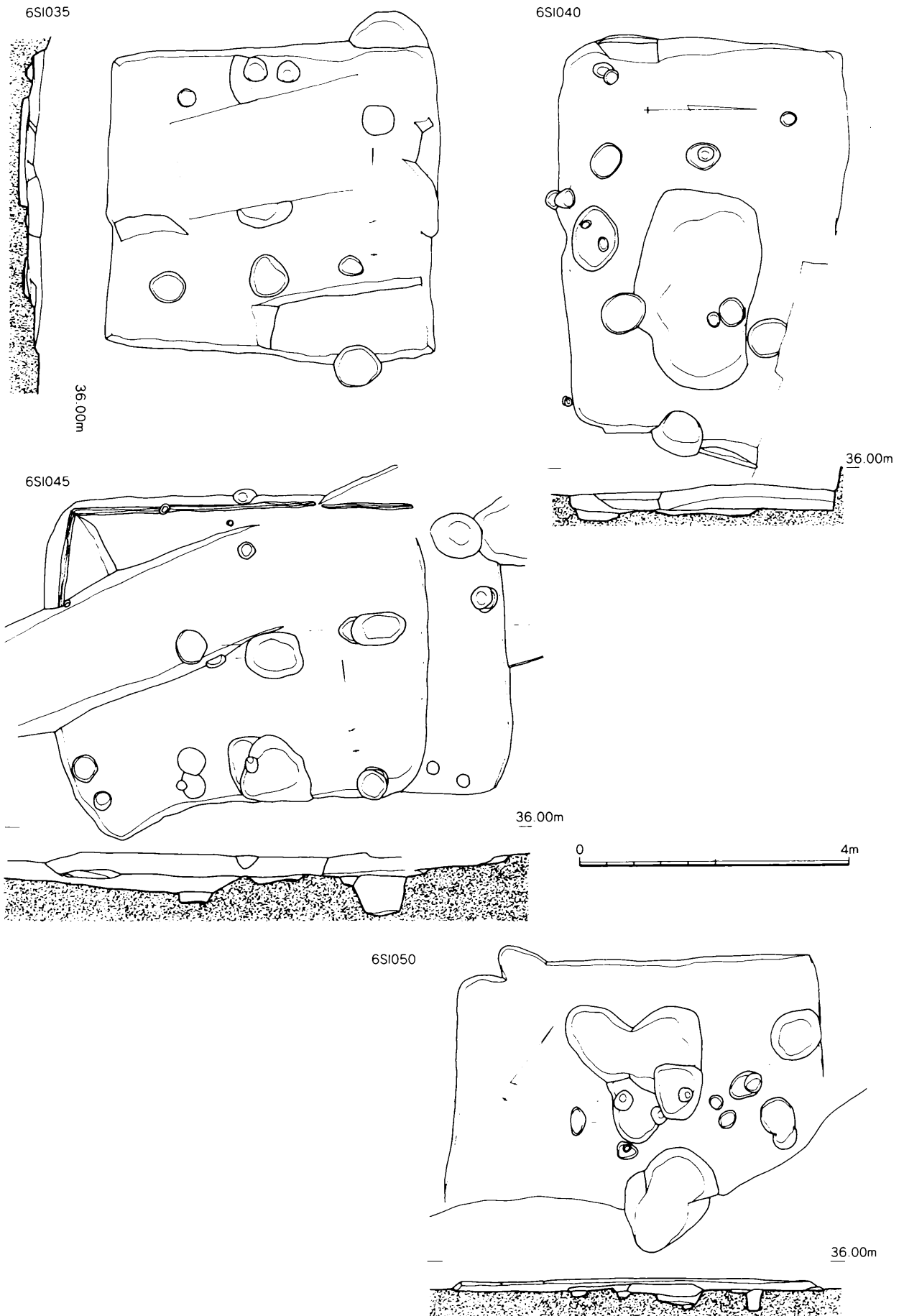


図13. 竪穴住居跡遺構実測図 (2) (S=1/80)

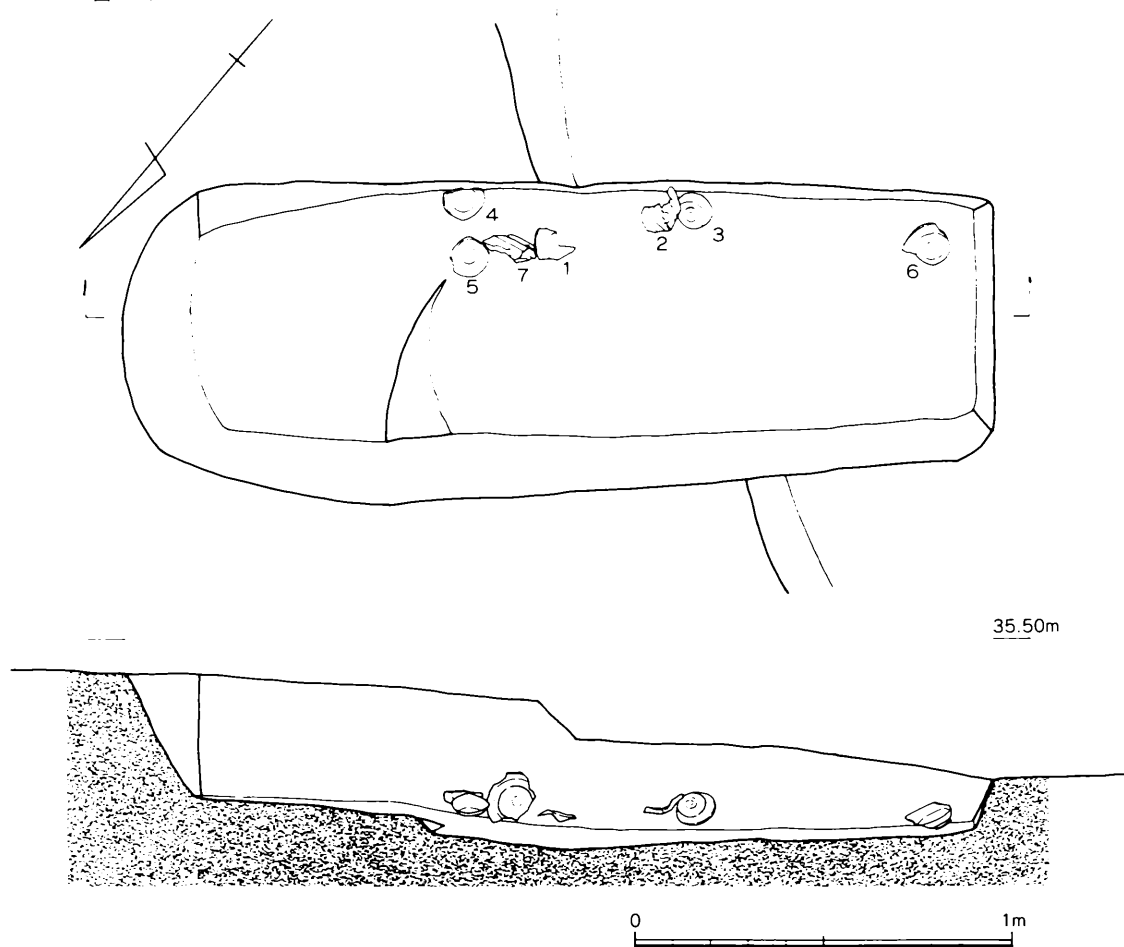


図14. 6ST010遺構実測図 (S=1/20)
【図中の番号は、図20の番号と一致】

なため住居と認定できるものかは判然としない。遺構規模は、残存長軸長5.46m、短軸長3.6mを測る。

b. 木棺墓

6ST010

調査区東部にて検出した遺構で、長軸長2.3m、短軸長0.8m、検出面からの深さ0.35mをそれぞれ測る。墓壙東辺において供献土器と考えられ

る土師器杯他が転落した状況で出土している。なお土層観察を怠っているため、木棺墓か土壙墓であるのかは明らかにし難い。また墓壙底部において段差を記録しているが、これについても観察に基づくものではないことから、掘りすぎによる段差を考えている。

c. 溝

6SD053

調査区西部にて検出した溝で、幅9.2m、深さ0.5mを測り、調査区を南北に縦断する状況で検出した。自然地形における谷地形とも考えられ、堆積土の状況は、上位から灰色砂←灰色粘土が堆積していた。

4) 出土遺物

a. 竪穴住居 (図15～19)

遺構の項で述べてきたように、7軒の竪穴住居が確認されている。しかし個々の状況から、出土遺物の傾向は様々である。なお、調査時において遺構確認後、遺構内における空間利用状況を観察する目的で、4分割し掘り下げを実施したが、上位からの流れ込みならびに、住居床面直上での遺物残存状況が悪く、当初目的を果たすことができなかった。したがって、遺物説明にあたっては4分割し掘り下げ、出土区画は遺物注記において分かるものの、報告にあたっては一括して報告する。

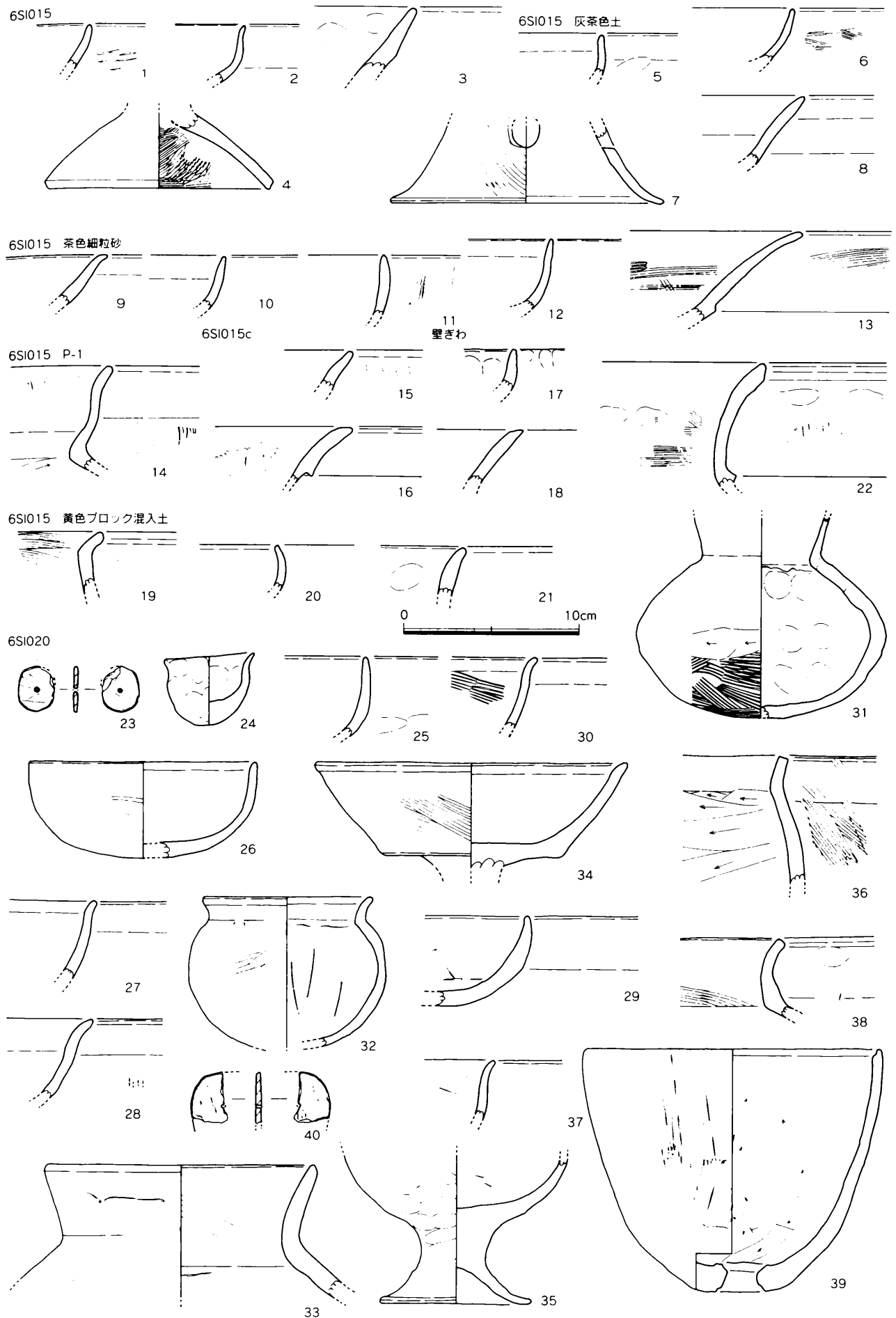


図15. 竪穴住居跡出土遺物実測図 (6SI015・6SI020、S=1/3)

-1.6SI015

6SI015

全て破片資料であり、全形を判断できるものではない。

古式土師器

鉢（1・2） 口縁部のみの破片で、外方に直線的に開くもの（1）と内湾しつつ立ち上がり、口縁部が外反するもの（2）がある。前者は外面に叩き痕跡が観察できるのに対して、後者は丁寧に横ナデにより仕上げている。

高杯（3・4） 口縁部のみの破片（3）、脚部の破片（4）で全形が明らかなものはない。口縁部のみの破片は内面に指頭圧痕が観察できる。また杯底部と口縁部を接合する箇所にハケ痕跡が観察でき、器面調整後に接合したことが分かる。脚部の破片は、内外面をハケにより仕上げており、やや粗製の印象を受ける。

6SI015灰茶色土

古式土師器

鉢（5・6） いずれも口縁部のみの破片で、内湾気味に立ち上がるもので、横ナデにより仕上げているもの（5）と、外面をハケによって仕上げているもの6がある。ただし破片であることから、全体の状況が明らかにし難い。

高杯（7・8） 脚部の破片7、口縁部の破片8で、脚部破片は外方へ裾広がりの形状をとり、円形の穿孔が見られる。外面はハケ調整で粗製の印象を受ける。一方口縁部のみの破片である8は、外反気味に広がる口縁部形態を有するもので、内外面ともに横ナデにより仕上げている。

6SI015茶色細粒砂

古式土師器

鉢（9～12） 9は外反する口縁部形態を有し、内外面ともに横ナデにより仕上げている。高杯になる可能性も残る。10～12は、内湾気味に立ち上がるもので、ナデによって仕上げるもの10と外面をハケによって仕上げるもの11がある。なお12は外面が磨耗しており調整痕跡が観察できなかった。

高杯（13） 外方へ大きく開く口縁部形態を有するもので、内外面ともに横方向のハケ調整痕跡が観察できる。なお成形は横ナデによって行われ、観察できたハケ調整は最終調整と判断される。

6SI015p-1

古式土師器

壺（14） 二重口縁壺と考えられるが、擬口縁から口縁部への立ち上がりが緩やかな形状をとる。内外面ともにハケ痕跡がわずかに観察できるが、その後横ナデにより仕上げている。頸部内面下位にはヘラ削り痕跡が残る。

6SI015c

古式土師器

甕×高杯（15） 口縁部のみの破片資料であることから、全形について明らかにし難いものの、

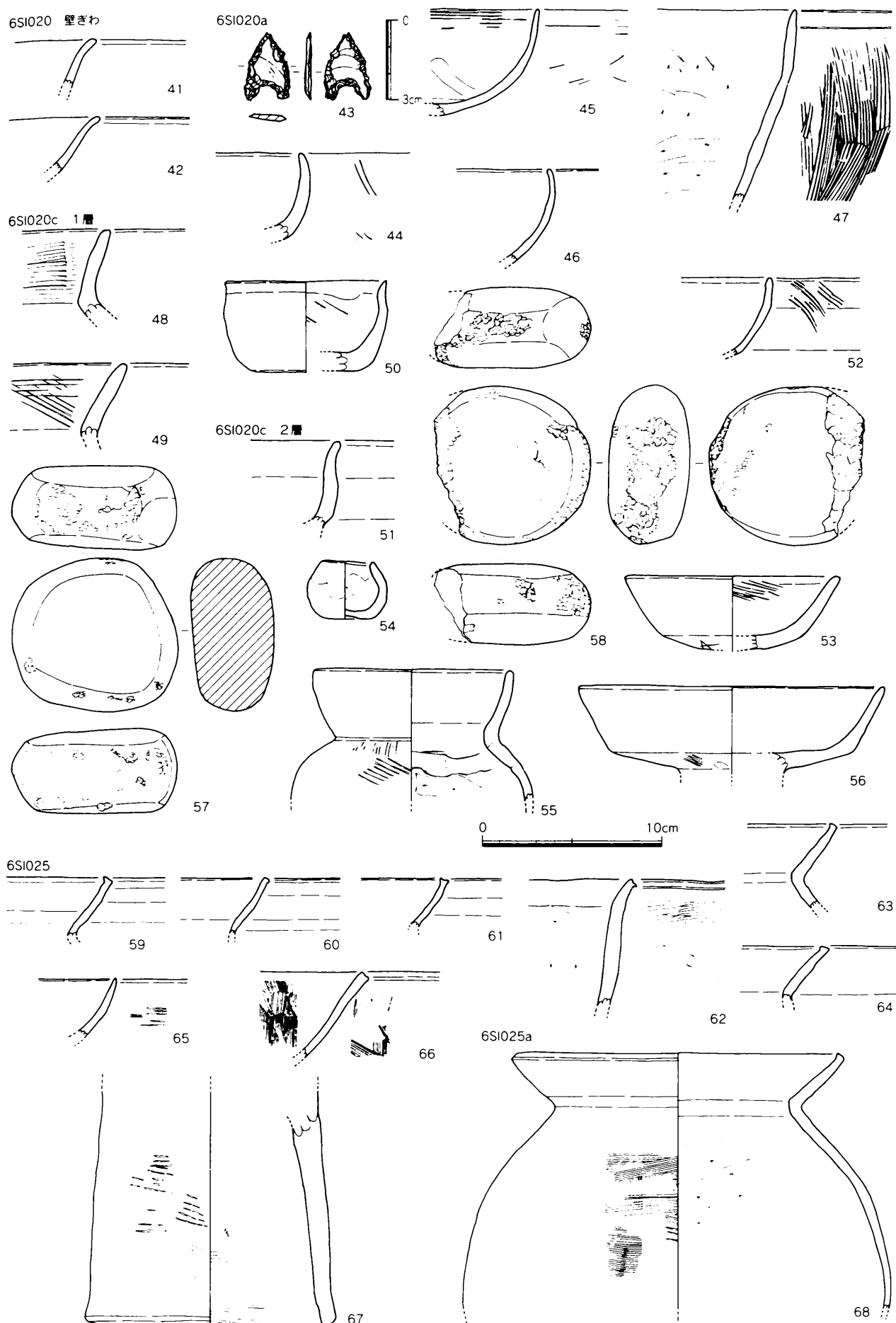


図16. 竪穴住居跡出土遺物実測図 (6SI020・025、S=1/2・1/3)

口縁部内面に調整のための横ナデが観察でき、外面に縦方向のハケ痕跡が確認できる。

高杯 (16) 口縁部のみの破片であるが、内面に縦方向の磨き痕跡が残る。また杯底部と口縁部の接合箇所にハケ痕跡が観察できる(写真153)。

6SI015壁ぎわ

古式土師器

鉢 (17) 内湾しつつ立ち上がるもので、内面には横ナデ痕跡が観察できるが、外面は付着物のため観察できなかった。

壺 (18) 口縁端部を平坦に仕上げるもので、口縁部のみの破片であることから、全体形状については明らかにし難い。外面には縦方向のハケによって仕上げている。

6SI015黄色ブロック混入土

古式土師器

甕 (19・21) 19は頸部を「く」字に屈曲するもので、口縁部内面ならびに外面にハケ痕跡が残る。体部内面はナデによって仕上げている。21は口縁部のみの破片資料で、全形について明らかにし難い。直立気味に立ち上がり、内面に指頭圧痕、外面にハケ痕跡が残る。

鉢 (20) 内湾気味に立ち上がるもので、器面磨耗のため成形調整痕跡が明らかにし難い。

壺 (22) 口縁部から頸部にかけての破片資料で、内外面にハケならびに指頭圧痕跡をとどめる。頸部外面には断面三角形の凸帯を貼付する。

-2.6SI020

6SI020

石製品

玉 (23・40) いずれも滑石製で、中央部に直径2mm程度の穿孔を行う。丁寧な削りにより器面調整が行われる。石材色調は淡黄緑色。

土師器

鉢 (24～30) 24はミニチュア土器で、手づくねによって成形されている。他は横ナデにより仕上げるもので、内湾気味に口縁部を立ち上げるもの(25・26)と口縁部を外反させるもの(27・28)がある。26は外面に磨き痕跡がわずかに観察できる一方、28は縦方向のハケ痕跡が観察できる。29の内面には、ハケ調整の際の工具のあたりが観察できる。30は破片資料であることから鉢としたが、内面にハケ調整痕跡が観察でき、甕である可能性も残る。

壺 (31～33) 31は、直線的に口縁部へ至る直口壺であると考えられ、底部外面に粗いハケ痕跡が観察でき体部中位にはヘラ削り痕跡が残る、他の部位は横ナデにより成形され、内面には粘土紐接合痕跡ならびに指頭圧痕が多くとどめる。32は頸部を「く」字に屈曲させるもので、外面に煤状炭化物が付着する。内面には工具当り痕跡と考えられる条線が縦方向に残り、外面にはハケ痕跡が観察できる。33は、口縁部を直線的に立ち上げる直口壺で先の31よりは大型になる。口縁部外面に粘土紐痕跡が残る、口縁部内外面ともにハケ痕跡をとどめる。

高杯 34・35 34は、水平な杯底部から屈曲し外方へ開く口縁部形態を有するもので、内面は磨耗し調整痕跡が判然としないものの、外面にはハケ痕跡が観察できる。35は裾広がりな

脚部から丸みを有する鉢を接合するもので、脚と鉢の接合部に指頭圧痕が残る。鉢部内外面にハケ痕跡が残る。

甕 (36～38) いずれも頸部から口縁部に至る破片資料で、細片のため口径復原に至っていない。36および37は、体部内面をヘラ削りするが、38はナデにより仕上げている。外面はいずれもハケによって仕上げている。

甕 (39) 底部を一箇所穿孔するもので、底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部を凹ませる。内面は縦方向の削り、外面は縦方向のハケにより仕上げている。

6SI020壁ぎわ

土師器

鉢 (41・42) いずれも口縁部のみの破片資料で、外方へ開く形態を有する。内面が両者とも磨耗。

6SI020a

石製品

石鏃 (43) 黒曜石製で円形の抉り形状を有する。重量0.9gを量る。

土師器

鉢 (44～46) 三者とも内湾する口縁部形態を有するもので、横ナデにより成形するが、44のみ外面をハケにより仕上げている。

甕 (47) 体部上位から口縁部にかけてのもので、甕と断定することはできないが、6SI030出土甕に類似する形態を有することから当該資料も甕と判断した。内面はヘラ削り、外面は縦方向のハケにより仕上げている。

6SI020c1層

土師器

壺 (48・49) 口縁部の破片資料で、内外面にハケ痕跡をとどめる。

鉢 (50) 平底の底部から直立気味に立ち上がるもので、口縁部をやや外反させる。内面にハケ状原体の当り痕跡と考えられる条線が観察できる。

6SI020c2層

土師器

鉢 (51～54) 51・52は内湾気味に立ち上がる体部形態を有し、51は口縁部をやや外反させ、52は直立させる。51は内外面ともに横ナデにより仕上げ、52は外面をハケにより仕上げる。53はやや丸底の底部から直線的に外方へ開く口縁部形態を有し、内面にハケ痕跡をとどめる。54はミニチュア土器で手づくねによる成形である。

壺 (55) 小型丸底壺と考えられ、丸みをもつ体部からやや外方へ開く口縁部形態を有する。頸部外面にハケ痕跡をとどめ、粗製の印象を受ける。体部内面には粘土紐痕跡ならびに指頭圧痕を観察できる。

高杯 (56) 平底の杯底部から屈曲して外方へ開く口縁部へ至るもので、内外面ともに横ナデによって仕上げているが、脚部と杯部の接合箇所には指頭圧痕が観察できる（写真155）。脚部

6SI030

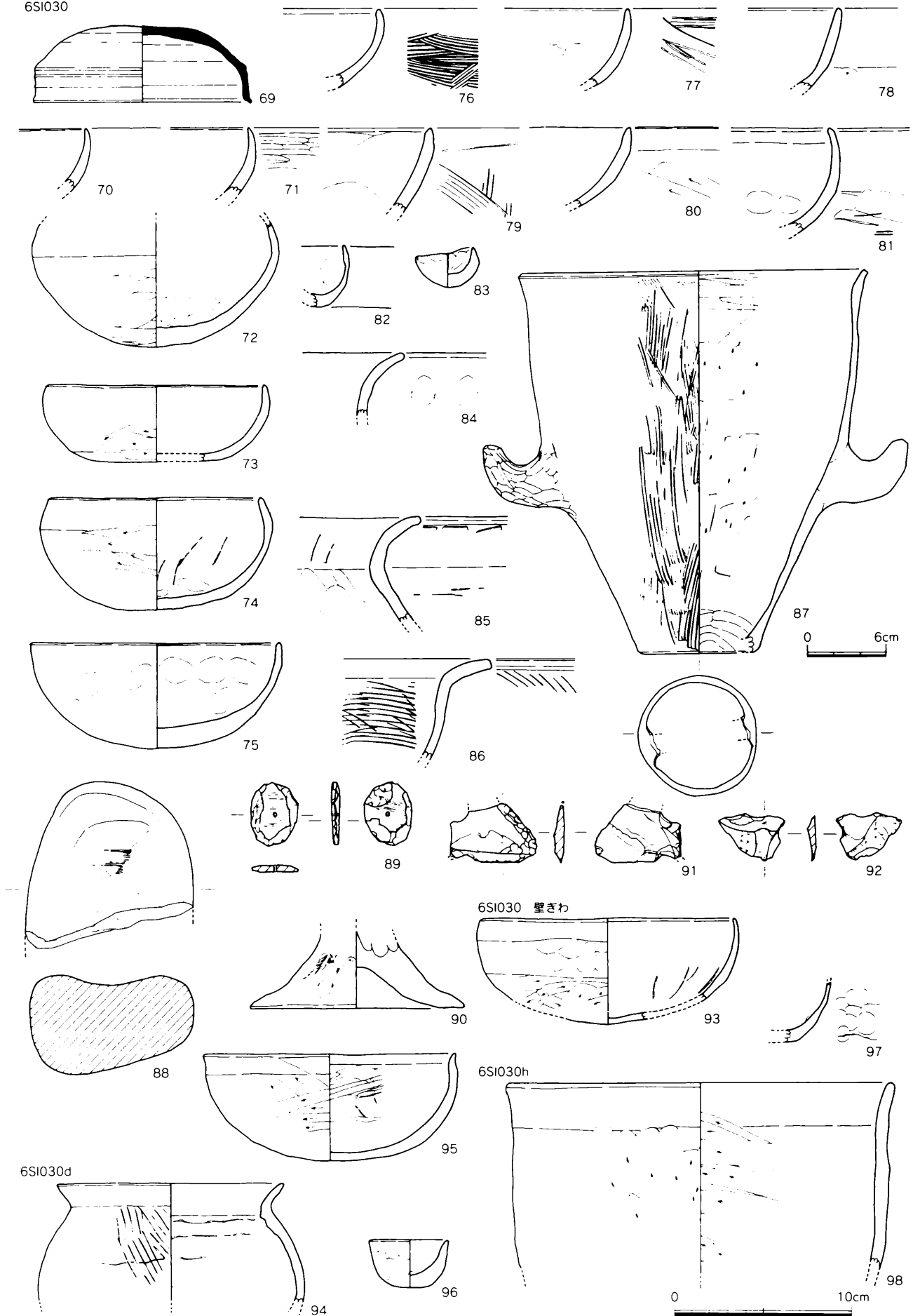


図17. 竪穴住居跡出土遺物実測図 (6SI030、S=1/3・1/4)

は、その残存状況から杯部へ挿入する方法が取られていると考えられる。

石製品

叩き石（57・58） 円礫側面を叩くもので、57は花崗岩製、58は砂岩製である。

-3.6SI025

6SI025

古式土師器

甕（59～64） 外方へ屈曲する62以外は、口縁端部を内面に肥厚する。62は「く」字に屈曲させる頸部形態を有し、内面をヘラ削り、外面をハケにより仕上げる。他は口縁部の破片資料であり全形が定かではないが、口縁端部形状から6SI025aで出土している甕（図15－68）の形態を有するものと判断される。

鉢（65・66） 65は内湾気味に口縁部へ至るもので、外面に磨き痕跡が残る。66は外反気味に開くもので、内外面にハケ痕跡をとどめる。

支脚（67） 脚部のみであり、上位形態が判然としない。外面には叩き痕跡、内面にはハケ調整後、ナデにより仕上げている。

6SI025a

古式土師器

甕（68） 頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部を内側に肥厚する。外面には頸部下位から下および口縁部に煤状炭化物が付着している。体部外面には平行叩き痕跡がわずかに観察でき、その後ハケによる仕上げがなされている。

-4.6SI030

6SI030

須恵器

杯蓋（69） 丸みを有する天井部から下降するように口縁部へ至るもので、天井部と口縁部の境界に凹線を残す。口縁端部は内面に凹みを有するものである。天井部外面は約1/3ほどを回転ヘラ削りにより仕上げている。

土師器

鉢（70～83） 70～81は、内湾する体部形態を有するもので、横ナデによって仕上げているもの（70、72～75、78、80、81）、磨きによって精良に仕上げているもの（71）、外面をハケ調整によって仕上げているもの（76、77、79）の三者がある。82および83はミニチュア土器で、指頭圧痕が多く残っている。

壺（84） 大きく開く口縁部形態を有するもので広口壺になるものと考えられる。外面には指頭圧痕をとどめるが、内外面ともハケ調整が残る。

甕（85・86） 頸部屈曲が「く」字状を呈するもの（85）と、開き気味の体部から屈曲しつつ外方へ開く口縁部形態を有するもの（86）がある。85は頸部外面下位に煤状炭化物が付着している。

甗（87） 把手を二箇所有するものと考えられ、底部から開き気味に口縁部まで屈曲なく至

る。内面はヘラ削り、底部内面付近には横方向のナデ痕跡が残る。外面は縦方向のハケによって仕上げられている。甑底部は、粘土板を一箇所両端に渡す形態をとるものと考えられる。

高杯（90） 裾広がりを開く脚部で、外面はハケ調整の後、ナデによって仕上げられている。

石製品

磨り石（88） 砂岩製で、凹むように磨り面が一面確認できる。

玉（89） 蛇紋岩製で板状のものの周囲を打ち搔きによって成形する。ほぼ中心部分に直径2mmの穿孔を行う。

石匙（91） サヌカイト製で、片方を挟み成形している。使用痕跡については定かではない。

剥片（92） 石材はサヌカイト。

6SI030壁ぎわ

土師器

鉢（93） 内湾する体部形態を有するもので、底部外面をヘラ削り、体部から口縁部外面は横ナデ、内面はハケによって調整されているものと考えられる「当り」痕跡が確認できるが、その後丁寧なナデによって仕上げられている。

6SI030d

土師器

甕（94） 丸みを有する体部から「く」字状に屈曲し、外方へ開く口縁部へ至る。内外面ともに粘土紐痕跡をとどめ、内面は縦方向のナデ、外面は縦方向のハケによって仕上げている。

鉢（95・96） 95は丸底から内湾する体部形態を有し、やや内傾する口縁部形態をとる。外面はナデによるとみられるが、砂粒の移動が観察できる。内面にはハケの「当り」が残存するが、磨きによって丁寧に仕上げられている。96はミニチュア土器で、内外面に指頭圧痕が残る。

6SI030h

土師器

鉢（97） 小型の鉢と考えられるが底部のみの破片資料で、外面に指頭圧痕、内面に縦方向のナデ痕跡が観察できる。

甑（98） 体部下位から直立気味に立つ形状を示すことから、甑と判断した。口縁部内外面は横ナデ、体部内面はヘラ削りをし、体部外面は縦方向のナデによって仕上げている。ただしナデが強いためか砂粒の移動が観察できる。

-5.6SI035

6SI035

古式土師器

甕（99～102） 口縁部のみの破片資料であり、全形については判然としない。99～101は厚手のものであるが、102は薄く、口縁端部を上方へ肥厚させる。

壺（103・112） 103は二重口縁壺で、頸部が独立し、口縁部は外方へ大きく開く。体部は外面をハケ調整、内面下位をヘラ削り、頸部内面はハケによって仕上げている。112は、やや尖底気味の底部から丸みを有する体部に至り、口縁部は直口口縁を呈する。体部外面中位に煤状

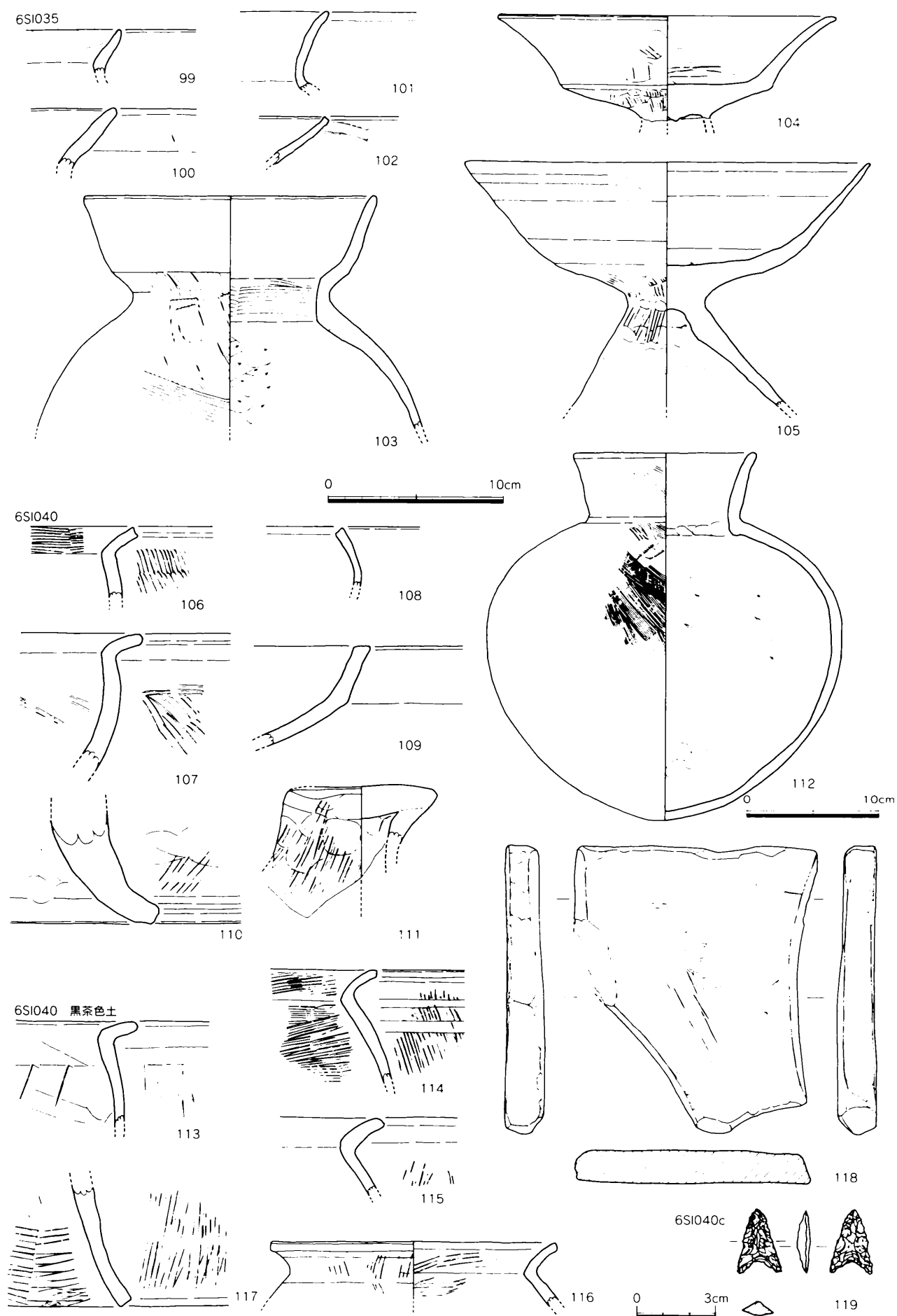


図18. 竪穴住居跡出土遺物実測図 (6SI035・040、S=1/3・1/4)

炭化物が付着している。

高杯（104・105） 口縁部が大きい外方へ開く杯部形状を有するもので、外面にはハケ痕跡が残る。内外面に指頭圧痕が観察でき、やや粗製の印象を受ける。

-6.6SI040

6SI040

弥生土器

甕（106・107） 頸部が「く」字を呈し、内外面をハケによって仕上げている。

高杯（108・109） 内傾する口縁部形態を有するもの(108)、やや厚手であるが外方へ開く口縁部形態を有するもの（109）の二者が出土している。

支脚（110・111） 粗製のもので、110は脚部、111は受部と考えられる。

石製品

砥石（118） 砂岩製の砥石で、3面を使用している。

6SI040黒茶色土

弥生土器

甕（113～116） 頸部「く」字状のもので、内外面ともにハケによって仕上げている。

支脚（117） 厚手のもので、内外面を粗めのハケによって仕上げている。

6SI040c

石製品

石鏃（119） サヌカイト製で、三角形の抉り形状を有する。重量は1.3gを量る。

-7.6SI045

6SI045

弥生土器

甕（120・121） 体部から外方へ屈曲するように開く口縁部形態を有するもので、内外面に粗いハケ痕跡をとどめる。121は底部で、「レンズ」状底を呈する。底部内面に指頭圧痕をとどめるほかは、内外面ともにハケによって仕上げている。

鉢（122） 底部を欠損するもので、開き気味の体部からさらに外方へ屈曲し口縁部へ至る。内面にはハケによる調整痕跡が残る。

支脚（123） 器面磨耗のため成形調整痕跡は不明。やや内傾気味に広がる脚部形態をとる。

石製品

スクレイパー（124） 細かい敲打によって刃部を作り出しているもので、把手部分が欠損している。石材はサヌカイト製と考えられる。

6SI045a

弥生土器

甕（125） 口縁部の破片で、口縁端部を面取りによって仕上げている。口縁部内面にはハケ痕跡をとどめる。

金属製品

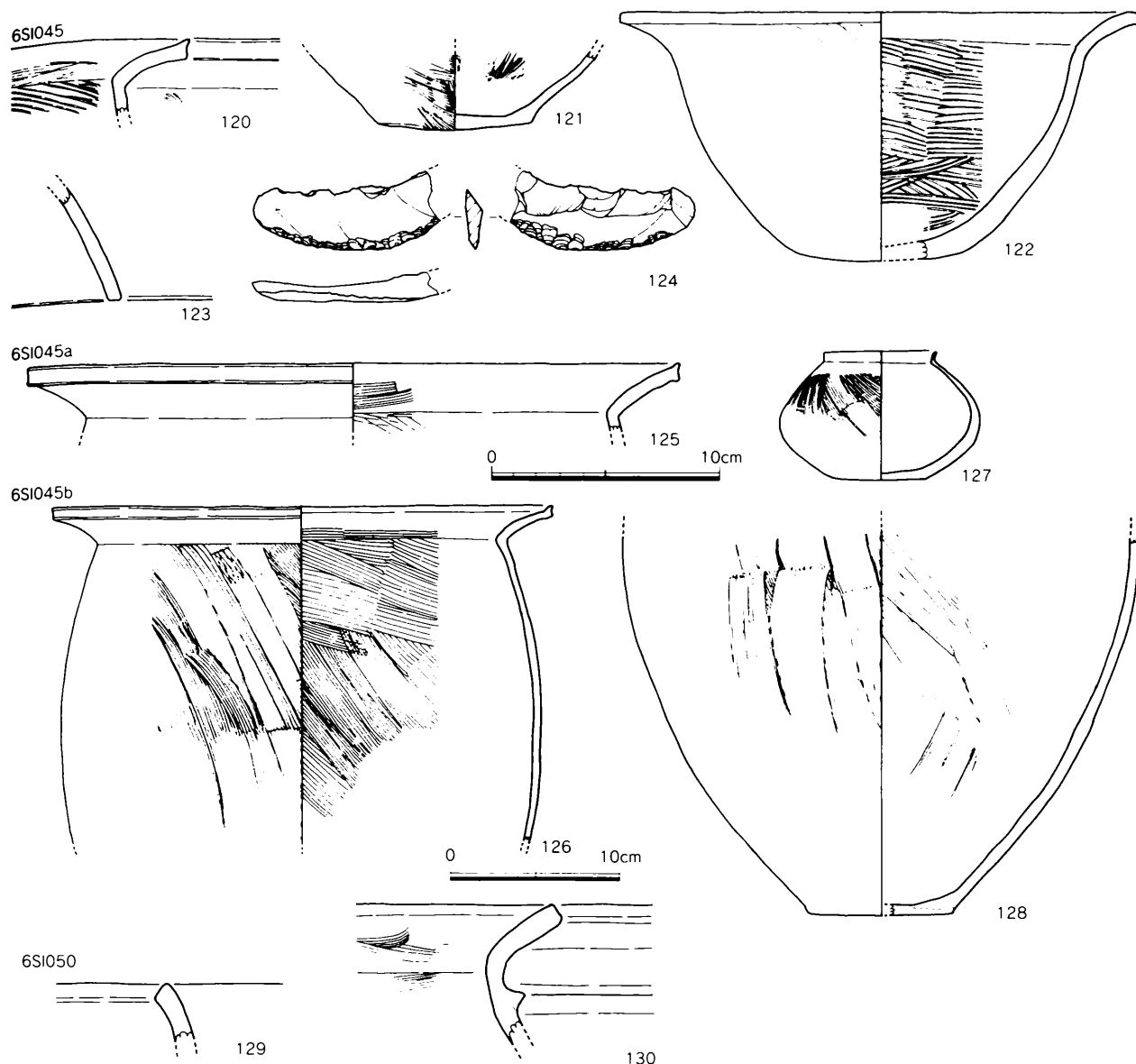


図19. 竪穴住居跡出土遺物実測図（6SI045・050、S=1/3・1/4）

鏡（図21-1） 腐蝕が著しく、全体法量を明らかにし難いが、残存箇所から直径7.0cm、紐を除いた厚さは0.2～0.3mmを測る。腐蝕が著しいことから鏡式を明らかにし難かったが、X線による画像から内行花文仿製鏡であることが明らかとなった（写真158）。紐部分については、鏡中心からややずれた位置にある。

6SI045b

弥生土器

甕（126・128） 「く」字状の頸部形状を有するもので、口縁端部を面取りする。内外面ともにハケによって仕上げているもので、126と128は同一個体と考えられる。

壺（127） 小型の壺で外面をハケにより仕上げている。なお内面が赤色に変色しており、朱などの容器として使用されていたものと考えられる。

-8.6SI050

6SI050

古式土師器

壺 (129) 二重口縁壺ないしは高杯と考えられる破片資料で、内外面に煤状炭化物が付着している。

甕 (130) 大型の甕で、頸部外面に断面三角形の凸帯を貼付する。内面にはハケ痕跡が観察できる。

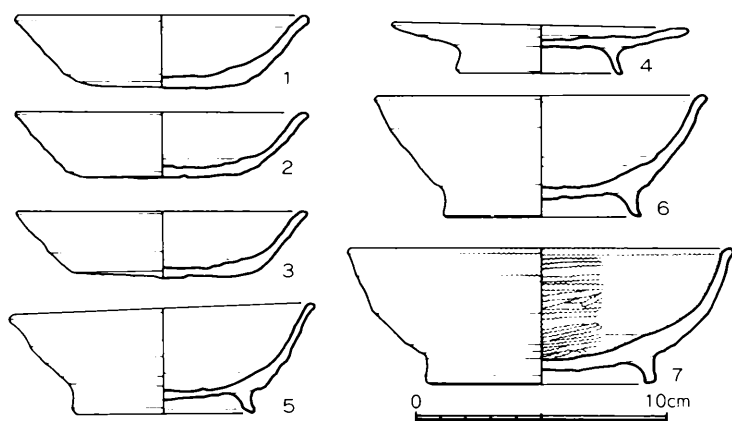


図20. 6ST010出土遺物実測図 (S=1/3)

b. 土壙墓

6ST010 (図20)

土師器

皿 c (4) 高台を貼付する皿で、扁平な皿部形状を呈する。内外面ともに回転ナデにより仕上げられており、皿部底部外面は回転ヘラ切り後、粗いナデによって調整されている。

杯 a (1~3) 口径11.3cm~11.5cm、器高2.6cm~2.9cmを測り、各法量の縮小化

傾向が伺える。底部外面の処理は回転ヘラ切り。底部形状にやや丸みを有する印象を受ける。

杯 c (5・6) 口径11.8cm~12.8cmを測り、体部形状に丸さが表現されつつあるものの、体部形状はまだ直線的であり、杯c1の範疇に入る。

黒色土器A類

碗 c1 (7) 口径14.9cm、器高5.4cm、高台径9.0cmを測る碗で、内面のみを黒色化したA類に該当する。底部からやや丸みを有しつつ立ち上がる体部形態を有し、口縁端部をやや外方へ屈曲させる。高台径が、口径に対して広く、模倣原型である瓷器系の碗の形態に近似している。

c. 溝 (図22)

6SD001

土師器

杯 a (1) 底部のみの破片で、法量を推定することはできなかった。底部切り離し処理は、回転糸切りによる。

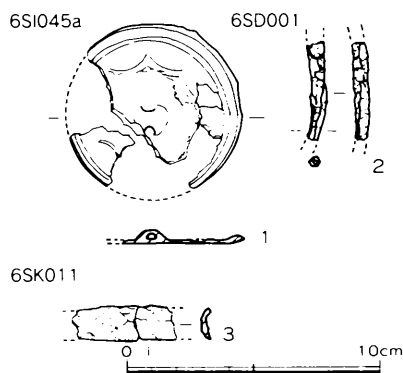


図21. 出土金属製品実測図 (S=1/3)

金属製品

釘 (図21-2) 鉄製の釘で、釘両端が欠損し、法量については定かではない。断面形状は正方形を呈する。

6SD004

須恵器

甕 (2) 口縁部のみの破片で、全形については不明。口縁端部に平坦面を形成し、外面に工具を波状に動かす波状文を描いている。

6SD012

6SD012 灰色砂

弥生土器

甕 (3・4) 口縁部の破片で、全形は判然としない。3は内外面ともにハケにより調整し、口縁端部は面取りによって仕上げている。4は内面を横ナデ、外面をハケによって調整している。

石製品

石包丁 (5) 凝灰岩製で、1/2が欠損しているため、法量が定かではない。穿孔が確認できる

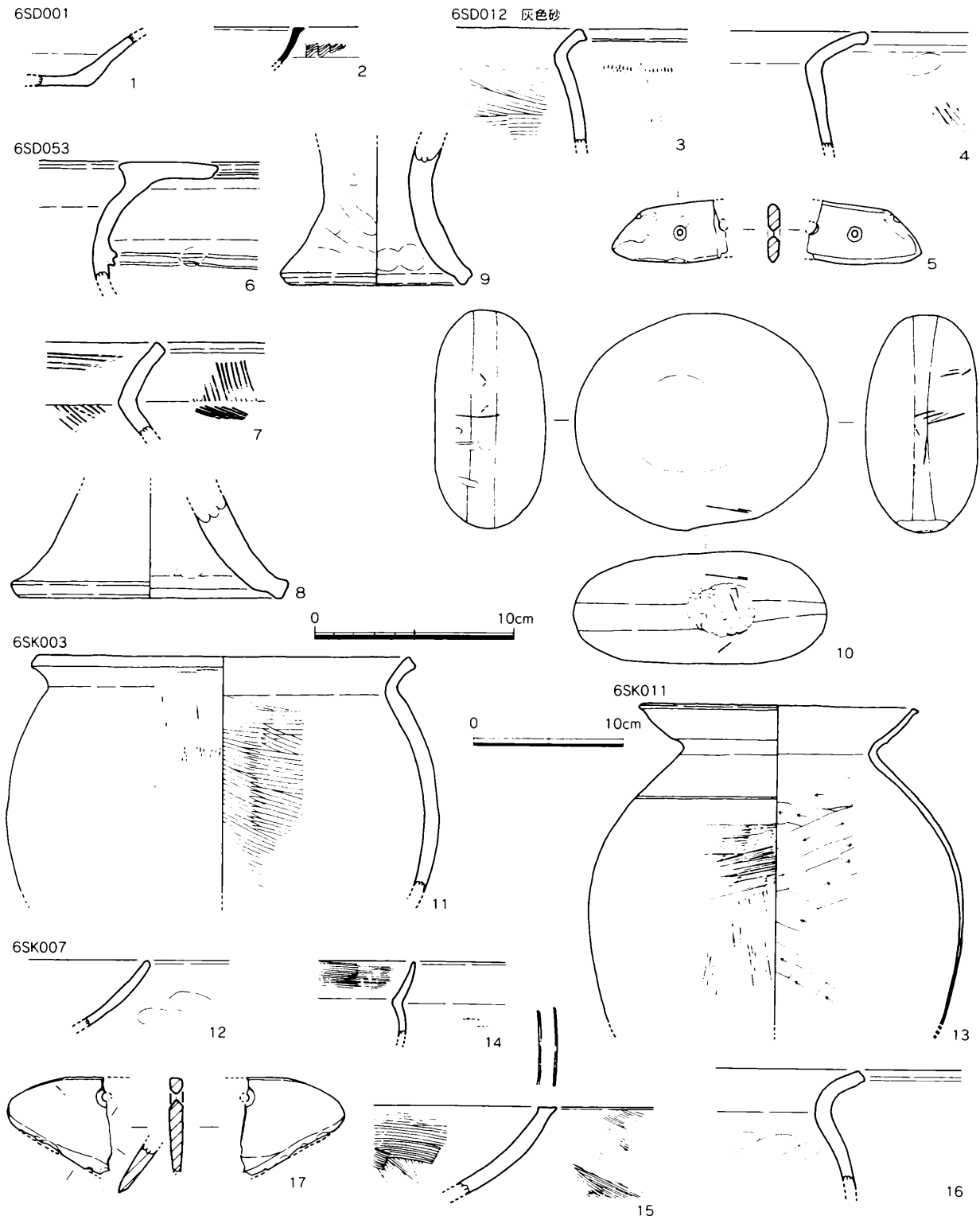


図22. 溝・土坑出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

が、製品中央に向けて擦り部分大きい。刃部は片面が部分的に欠損している。

6SD053

弥生土器

壺 (6) 口縁部のみの破片で全形が判然としないが、壺1a類に該当するものと考えられる(太宰府市、2004)。丹塗りのもので、頸部外面に凹字状の凸帯を貼付している。

甕 (7) 口縁部のみの破片で、内外面にハケ痕跡をとどめる。

支脚 (8・9) 脚端部の破片で、両者ともにナデによる成形を行い、指頭圧痕が顕著に観察できる。

石製品

叩き石 (10) 玄武岩製で、4面の使用痕が観察できる。

d.土坑出土遺物(図22)

6SK003

弥生土器

甕 (11) 底部が欠損し、「く」字状に屈曲する頸部形状をとり、球形に近い体部になるものと考えられる。体部内外面ともにハケにより調整しており、口縁部は横ナデによって仕上げている。

6SK007

古式土師器

鉢 (12) 小型の鉢と考えられるが、口縁部の破片で全体法量については明らかにし難い。内面はハケ、外面には指頭圧痕が観察できる。

6SK011

古式土師器

甕 (13・16) 13は長胴化した体部から「く」字状の頸部形状をとり、やや内湾気味に立ち上がる口縁部で、口縁端部を内傾気味に面取りする。頸部よりやや下がった部分の体部内面をヘラ削りを行う。外面には口縁部下位から体部にかけて煤状炭化物が付着している。16は、やや丸みを帯びた「く」字状の頸部形態を有し、内外面ともにナデ調整を行う。

鉢 (14・15) 14は小型丸底壺の口縁部から頸部の破片と考えられ、外面および体部内面は横ナデし、口縁部内面はハケにより仕上げている。全体印象としては粗製である。15は、やや大型の鉢で、口縁端部を平坦に仕上げ、内外面ともにハケにより調整している。

石製品

石包丁 (17) 1/3のみの破片と考えられ、穿孔1ヶ所のみ観察できる。材質は凝灰岩と考えられる。両面とも磨ぎ痕跡と考えられる裂痕跡が見られる。

金属製品

刀子 (図21-3) 製品両端を欠損し、全形が明らかではない。断面形状が円形に曲がっている。

e.その他の遺構出土遺物(図23)

6SX016

古式土師器

高杯（18） 脚部の破片資料で、外面はハケ痕跡が残り、脚端部から内面についてはナデにより仕上げている。

6SX017

土師器

6SX016

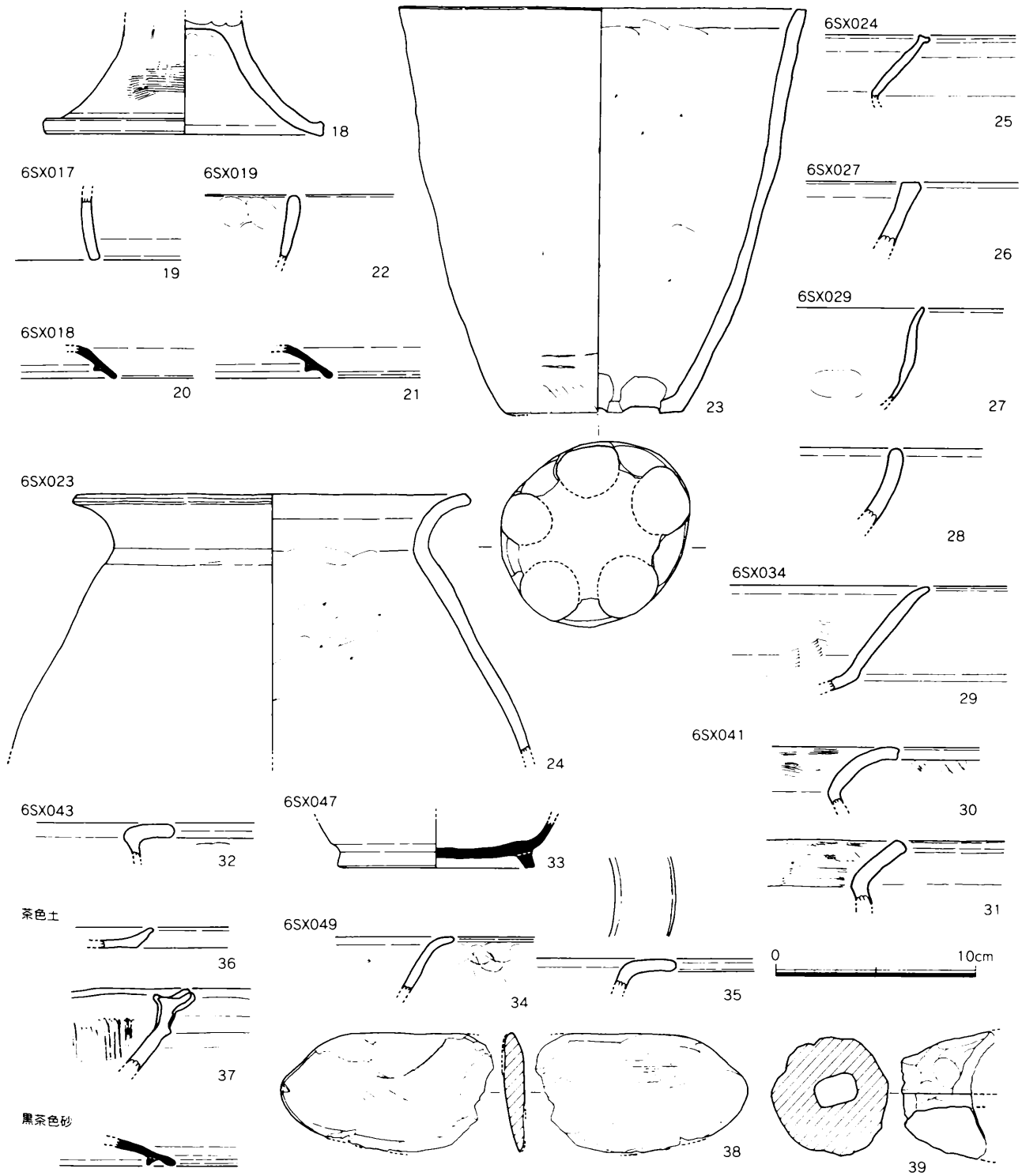


図23. その他の遺構・土層出土遺物実測図 (S=1/3)

支脚（19） 脚部破片のため、全形が判然としない、外面にハケ痕跡をとどめる。

6SX018

須恵器

蓋1（20・21） 口縁端部の破片。かえりを有する蓋で、口縁端部が接地する。かえり部分は貼り付けと考えられる。

6SX019

土師器

甗（23） おそらく把手が貼付されているものと考えられるが、残存箇所からは明らかにし難い。底部分を5ヶ所円形に穿孔するものと考えられ、内面は縦方向の削り、外面は叩きの後ハケにより調整されている。

用途不明（22） 小型の鉢になるものと考えられるが、破片資料であることから明らかにし難い。外面は横ナデ、内面には指頭圧痕が観察できる。

6SX023

古式土師器

甗（24） 下膨れ状の体部形態を有し、頸部から丸みを持ちつつ外方へ屈曲する口縁部形態をとる。体部内面は右上がり方向の削り、外面はハケ調整の後、不定方向のナデにより仕上げている。頸部下位から体部にかけて外面には煤状炭化物が付着していたものと考えられ、黒灰色に変色している。

6SX024

古式土師器

甗（25） 口縁部の破片資料で、口縁端部を内傾気味に肥厚させる。内外面ともに横ナデによって成形されている。

6SX027

古式土師器

壺（26） 口縁端部と考えられる小破片であることから、器種特定には躊躇する。精製のものであり厚手であることから壺と推定した。内外面ともに横ナデにより仕上げている。

6SX029

土師器

鉢（27・28） 両者ともに口縁部の破片資料で、内外面ともに横ナデによって仕上げているが、28は体部外面下位にハケ痕跡をとどめている。

6SX034

古式土師器

高杯（29） 杯部の破片資料で、杯底部から外方へ大きく開く口縁部形態をとる。内面にはハケ痕跡が観察できる。

6SX041

弥生土器

甕 (30・31) 口縁部の破片資料で、「く」字に屈曲する頸部形態を有する。内外面ともにハケ痕跡をとどめる。

6SX043

弥生土器

甕 (32) 頸部から大きく屈曲し、平坦な口縁部形状を有するもので、内外面ともに横ナデにより仕上げている。

6SX047

須恵器

杯c (33) 底部の破片で、全形については明らかにし難い。断面長方形の高台形状を呈し、高台外面から体部下位にかけて、丁寧な回転ナデによる高台接合がなされている。底部外面は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げている。

6SX049

土師器

鉢 (34) 粗製の鉢と考えられ、逆「八」字形の体部から、さらに外方へ屈曲する口縁部へ移行する。内面は削り、外面は指頭圧痕をとどめるが、ハケによって仕上げている。

f.土層出土遺物 (図23)

茶色土

土師器

小皿a (36) 小破片のため、法量を明らかにし難い。底部外面の処理は回転糸切り痕をとどめる。

陶器

擂鉢 (37) 口縁部の破片資料。口縁部を「T」字形にし、内面に条線を描く、条線が重なりあっていることから、条線の単位がつかめない。内外面を施釉する。

土製品

鞆羽口 (39) 羽口挿入箇所の破片、指頭圧痕をとどめ、赤色、黒色に変色する。

石製品

石包丁 (38) 両面に成形のための磨り痕跡をとどめるが、握り手のための穿孔が見られないことから、未製品と考えられる。

黒茶色砂

須恵器

蓋1 (40) 口縁端部の破片で、かえりと口縁端部の両者が設置する。

5) 小結

住居の共時性

遺構の建築方向ならびに遺構構造から推定される各住居遺構の共時性は、以下のように想定される。

I期（2本主柱）：6SI040・6SI045

II期（4本主柱）：6SI015・6SI020・6SI035

III期（4本主柱）：6SI030・6SI050

ただしI期とした2棟の住居については、0.75m程度の距離しか離れていないことから、住居構造上建築困難と考えられ、わずかな時間差を見込む必要があるかもしれない。

各遺構の形成時期ないしは埋没時期は、出土遺物の帰属時期から推定すると以下のようになる。

I期：弥生後期 II期：古墳前期初頭 III期：古墳後期

なおIII期とした6SI030および6SI050については、6SI050の遺構残存状況が悪くかつ出土遺物がわずかであることから、帰属時期を推定し得なかった。結果として建物方向の近似性から導き出したにすぎない。

墓

当該調査区周辺においては、既報告の10次調査地より火葬墓および木棺墓が検出されている。造墓時期にわずかな時間差が存在しており、平安前期という枠内ながら、前半期が火葬墓、後半期が木棺墓である。火葬墓については、宮ノ本丘陵内において奈良期から造墓活動が確認されており、奈良期は丘陵上位に造墓され、10次調査地にて検出された平安期のものは丘陵下位に造墓される傾向が観察できる。これら各種の造墓階層に関しては、「有力」官人層、在地官人層、有力氏族など様々な想定がなされており、具体的な検討は宮ノ本遺跡第1次調査にて検出された買地券記載内容の検討から、郷長階層の在地「豪族」層という解釈が提示されているのみである（高倉、1980）。この買地券出土例以外のものは、文字記載資料がなく、造墓階層特定材料がないのが実状である。今後は造墓階層特定のための方法を検討すべきであるが、具体的には大宰府管内における墓資料による相対化および、都での墓誌共伴資料からの比較に基づく方法しか案出し難い。なお造墓階層の析定は、その背景となる歴史像を考慮する基礎であり、造墓者が誰なのかを検討しておく必要がある。都市論として昇華する課題として、都市形成前の民族的な社会から「国家」的な社会の空間形成を視野に入れた場合、造墓活動が単に「在地」官人層の墓と単純に解釈してよいのかという素朴な疑問が生じる。国家機関による意図的な造墓空間形成という性格はないのかという観点から分析をすすめたい。具体的には考察の項目にて検討する。

【引用文献】

高倉洋彰 1980・「(1)宮ノ本1号火葬墓出土の買地券」『宮ノ本遺跡』太宰府町教育委員会
太宰府市教育委員会 2004・「太宰府・国分地区遺跡群 Ⅰ」 太宰府市の文化財 第73集

V.太宰府における墓造営 ―宮ノ本遺跡評価のために―

1.序

太宰府域¹において古代に位置づけられている墓は、これまでの調査成果から多く確認され、中でも宮ノ本遺跡は「買地券」の発見以来、全国的に注目されることとなった。また生活空間としての太宰府条坊跡との関連から「都市」的空間形成過程との関係性の把握や、「古代」的世界の形成を論じる上で前代の墓制との比較など、時空間軸上での様々な検討の材料として適宜整理されてきている（中間、1983。狭川、1998・1999）。昭和40年代以降に活発化した福岡都市圏の拡大に伴い、太宰府でも史跡指定闘争、住宅促進事業としての区画整理事業の開始など、遺跡破壊の波は他地域と同様、社会問題化するように拡大してきた。太宰府での諸開発事業は、史跡指定化の議論を巻き起こした特別史跡太宰府跡をはじめ市域の北部を占める史跡群の団地造成計画に端を発し、「都市的」空間と考えられている太宰府条坊域（当時は鏡山猛氏推定案）での観世地区区画整理事業へと拡大、さらに太宰府西域における佐野地区区画整理事業へと継続してきている（太宰府市、1994）。歴史的環境からみると、官衙域から居住空間域へさらに周縁部へと開発の進展とともに遺跡内容が明らかになってきたともいえる。

このような状況下にあって、太宰府周縁部における遺跡内容が明らかとなり、官道・墓・太宰府条坊域外における集落展開など太宰府を理解する上での様々な情報が収集されるに至った。近年の成果では、官道以前の道路と官道との関係、時間軸上での墓分布域と墓構造の情報、条坊域外における集落展開など、歴史事象解明のための基礎情報が収集されたことは、大きな成果であるといえる。ここで問題とする墓制については、太宰府周縁部を行政的に管轄する太宰府市・筑紫野市によって記録保存のための調査が実施され、未整理状態のものを多く抱えるものの断片的に発信される情報からは、その多様さのみが伺い知れる。ここでは、これら多様化する条坊域外の土地利用情報の中で墓制に焦点をあて、基礎資料の整備を目的とし、造墓背景立論のための基礎とする。

2.太宰府における墓研究

太宰府における墓の研究は、現在も市域に点在している石塔の報告にはじまる。中でも福岡県指定文化財である一石彫成五輪塔は、鎌倉期の作とされ太宰少貳武藤資頼の墓と伝えられている（島田、1937。太宰府市、1998）。このような中世期の石塔は、太宰府市北部、四王寺山南麓に多く見られ、中世期の寺院が点在していることを考えると、中世前期末からの寺院寄生の墓地を考える上で貴重な資料である。石塔の報告にはじまる太宰府の墓地研究は、その後途絶えるが、高度経済成長期の大規模開発の波にのまれ、太宰府市域でも宅地造成、道路新設など各種開発事業が開始される。これらに呼応するように先述した史跡指定の協議が開始され、指定地内の調査が開始されるとともに、指定地外における埋蔵文化財の記録保存措置が開始される。主として福岡県教育委員会による調査、続いて九州歴史資料館の調査が開始されることになる。昭和55年度より太宰府市(当時太宰府町)へも文化財職員が配置され、市域の調査を展開してきた。結果として、埋蔵文化財としての墓地資料も増加し、地上造立物の調査から埋蔵文化財の調査へと進み、多くの「未知」の所見から論考が提出されることになる。中でも中

間氏の研究は、墓地立地状況を把握し、古代における居住空間としての条坊域を外した地域への造墓、さらに中世に至って居住域への墓地進入、さらに寺院寄生の墓地への変化を時間によって提示された（中間、1984）。さらに狭川真一氏により後期古墳と古代火葬墓との立地環境から、造墓者の系譜関係を問う論考は、それまで古墳と古代墓の研究が分離しがちだった点を解消する点で重要な位置を占める（狭川、1998）。この狭川氏の視点は、間壁葎子氏や渡邊邦雄氏による古墳再利用墓に関する論考ならびに花田勝広氏による古墳葬地と火葬墓の立地について文献資料を加味した論考の流れの中に位置づけられる（間壁、1982。花田、1988。渡邊、2000）。

一方直接的には太宰府における墓地の位置づけを目的としたものではないが、造墓作法や被葬者の性別推定に関する研究が江浦洋氏、秋山浩三氏により、大宰府史跡出土資料を用いた研究が進められる（江浦、1984。秋山、1999）。また墓地の立地に関しては、先の中間・狭川両氏により大宰府西部に所在する宮ノ本および剣塚丘陵所在の墓地が、次第に時間の経過とともに居住域である条坊内への侵入を説く。その後は市域北東部に点在する寺社に寄生するような墓地形成が行われていることは、現在までの調査所見から追認されてきている。

ここでは、太宰府にて確認できている墓を集成し、今後の墓制変遷解明の基礎資料とする。なお抽出対象時空間軸上での範囲は、以下のように考えている。

時間軸上の範囲

大宰府官制の施行時期とそれに伴う諸施設の整備時期に時差が生じていると考えられ、その時差を考慮しつつも諸施設の整備ならびに工人層の再編など多岐にわたって再編成・再構成がなされた時期が抽出資料の古い位置になる。具体的には、朝堂院形式の政庁整備、官道整備、工人再編など一斉に広域かつ多面的に施行・施工された時期にあたり、現在の考古資料に基づく学説史上の見解では8世紀前半のどこかということになる（中島、1995ab・2000ab）。土器編年からは、平城宮IIないしIII古段階のどこかと判断している。詳細については、「多面的」とする根拠と合わせて別稿にて詳述する。時間軸上の最新の時期は、宮ノ本墓地の帰属時期である平安前期を主たる時期とするが、宮ノ本墓地の位置を考える必要があることから平安中期までを抽出対象時間幅とする。なお実年代による表記は、資料評価次第で微動する可能性があることから、ここでは土器様相から設定される大枠から古代を二分し記述する。具体的な帰属時期は、古代前期が奈良期から平安前期、古代後期は平安中期とする。なお太宰府における墓地変遷の概略を記述する項目にて中世の傾向を記述している。その際の区分については中世前期が平安後期から鎌倉期、中世後期が室町期から南北朝期としている。

空間軸上の範囲

空間軸上での範囲は、大宰府条坊が所在すると考えられる空間およびその周囲を含むが、自然地形上、大宰府が所在する盆地を空間軸上での範囲とする（図24）。

3. 大宰府における墓（図24～27、表1）

これまで太宰府域にて検出された墓の資料を集成し、墓地傾向が描かれてきている。分析に移る前に、学説史上描かれている墓立地の変化を整理し、傾向を把握しておく。

古代前期の墓（図24）

古代前期に位置付けられる墓は、その多くが火葬墓で、墓地選地も居住域外の条坊周辺部に造墓されている。宮ノ本丘陵、君畑丘陵などであり、単独での造墓が一般的である。その多くは現在のところ

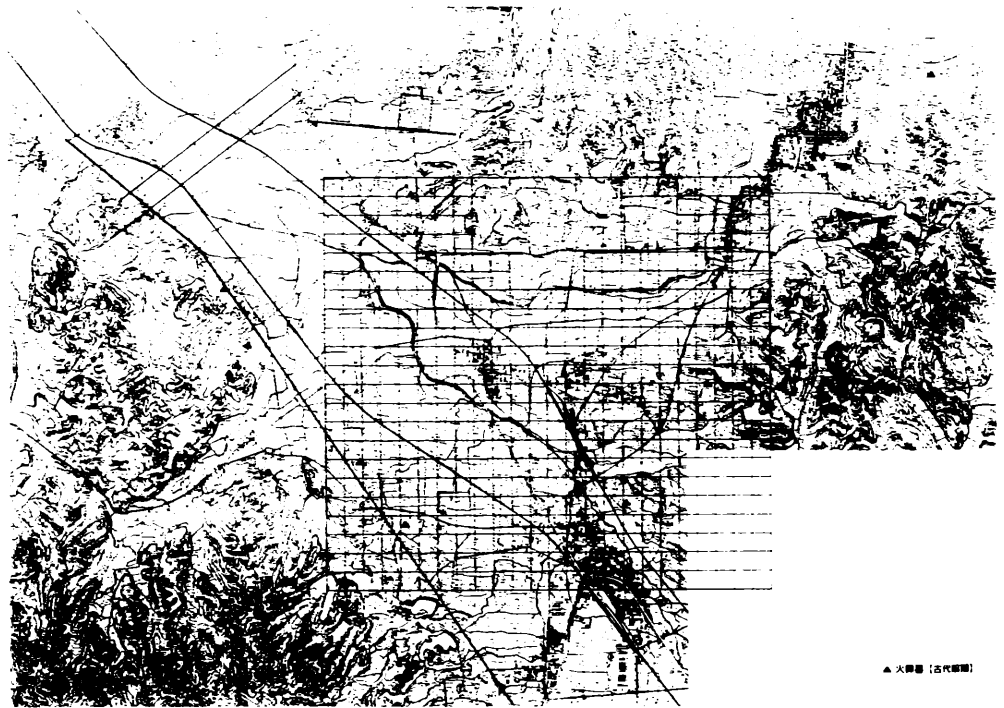


図24. 墓地【古代前期】

本報告で記述してきた宮ノ本丘陵に所在している。しかし、その発見数が当時の墓地占有率の高さを示しているとは即断できない。当該期の火葬墓は単独で発見されることが多く、不時発見を含めその多くが一定の広域調査時での発見例を占める。このことは丘陵部での諸開発に先立つトレンチ調査では確認できない可能性もあり、丘陵部調査の難しさを物語る。現在発見されている当該期の火葬墓は、居住域を取り囲むように丘陵部での検出例が多く、都での動向と同じ傾向を示す（金子、1984）。居住域と墓地の関係は、遠ざけられた墓地というわけではなく、墓地が形成された宮ノ本丘陵裾部には、建物群ならびに官道が構築されるなど、隔絶した地への造墓は想定できない。建物群の性格については、居住施設なのか官衙施設であるのかの判断ができておらず、今後詳細な検討を行ってゆく必要があるが、現況では墓地ではないという点だけは指摘できる。なお墓地形成空間である丘陵部への居住施設の建設は、現在のところ確認できていないが、須恵器生産窯が確認されており、生産の場とは共存していることになる。

当該期の末頃には、次代の主流となる土壙墓ないしは木棺墓が造営されはじめる。

古代後期の墓（図25）

古代後期の主流となる墓制は土葬墓であり、遺体埋置状況によって土壙墓と木棺墓に分けられる。この墓制自体は先述したように古代前期末に発現し、火葬墓と置換するように造墓される。また先代の墓地が居住域から外れた空間を占地していたのと同様に、「居住域」周辺にあたる丘陵部に位置している。ここで「居住域」という記載をとった理由として、古代における大宰府の居住域は、周知のごとく大宰府条坊域が想定される。調査が進展し多くの情報が蓄積された現在にあって、条坊域とされる範囲の検討が必要となってきたことは否めないが、ここで立ち入ることは本稿の目的から逸脱するため、別稿にて検討を加えたい。ここでは、鏡山猛氏による推定条坊域を用いているが、少なくとも当該期の墓を検出した調査区内において、

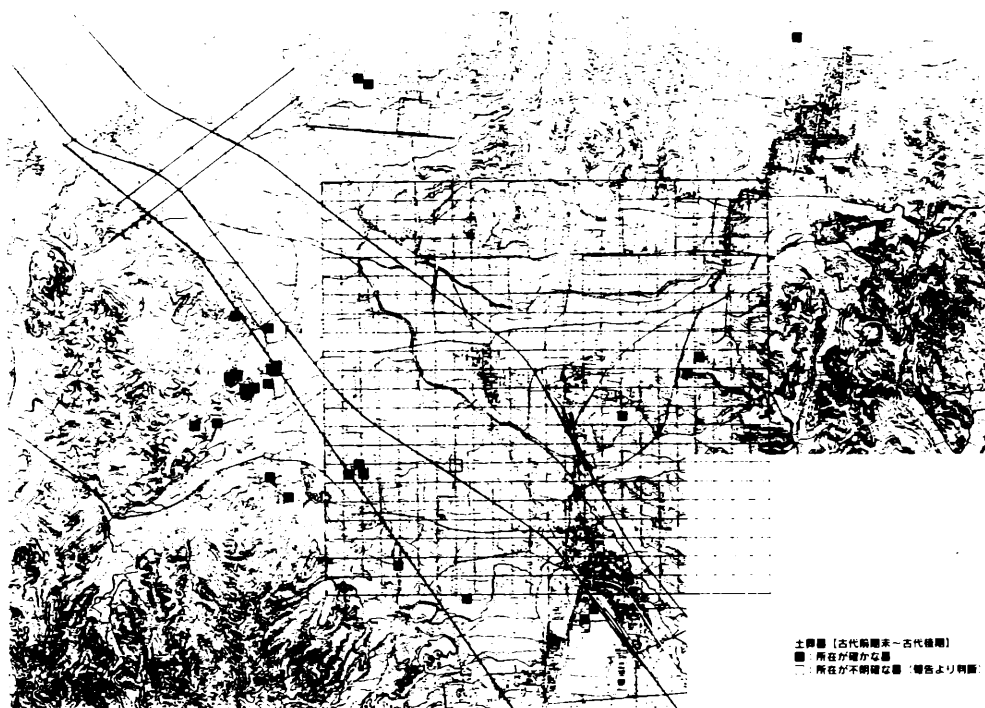


図25. 墓地【古代後期】

前期における墓からである。

ところで古代後期から中世前期への移行状況を考える上で必要な資料が、この移行期に激減する。この背景は、造墓者の激減、造墓地の変更という当時の社会情勢を背景とするものか、資料認識ここでは時間軸設定の根拠資料上の問題という現代の研究視点に帰すべき問題の二者がある。具体的には、墓資料に限らず多くの遺構で古代前期から後期、古代後期から中世前期などの移行期の資料群が激減している状況を見ると、後者の問題が隠れている可能性が高い。

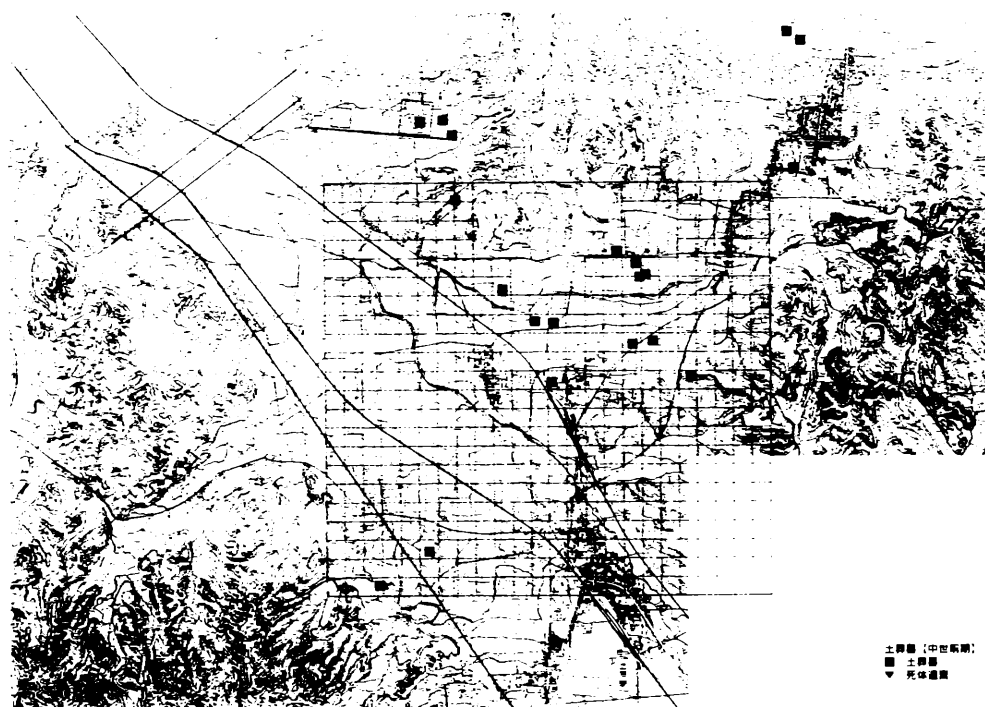


図26. 墓地【中世前期】

同時期の居住をうかがわせる遺構、例えば建物、井戸、廃棄土坑などが検出された例がなく、多くの調査所見からは未だ居住域と墓地は離れた存在であるといえる。

なお居住域内で明らかな共存が確認できるのは、次代の中世

土器編年に関する考え方の枠組みを再度検討すべきと考えている。

中世前期の墓（図26）

中世前期の墓は、これまでの墓と異なり、居住域近郊への造墓を開始する。墓は太宰府域の北東部に偏在する傾向を見せ、

群在し墓地を形成するものが少数見られるものの、多くは単独墓ないしは2基程度のものが観察できる。さらに居住空間との関係を観察すると、隣接する空間に寺や屋敷と考えられる建物・井戸などが確認できるようになり、寺院寄

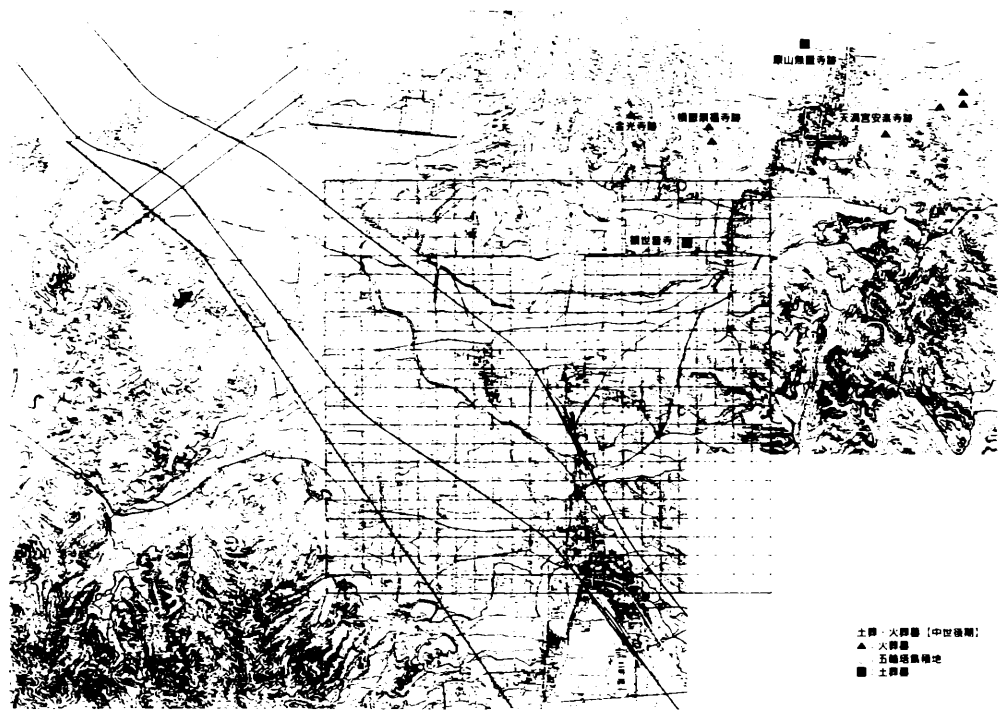
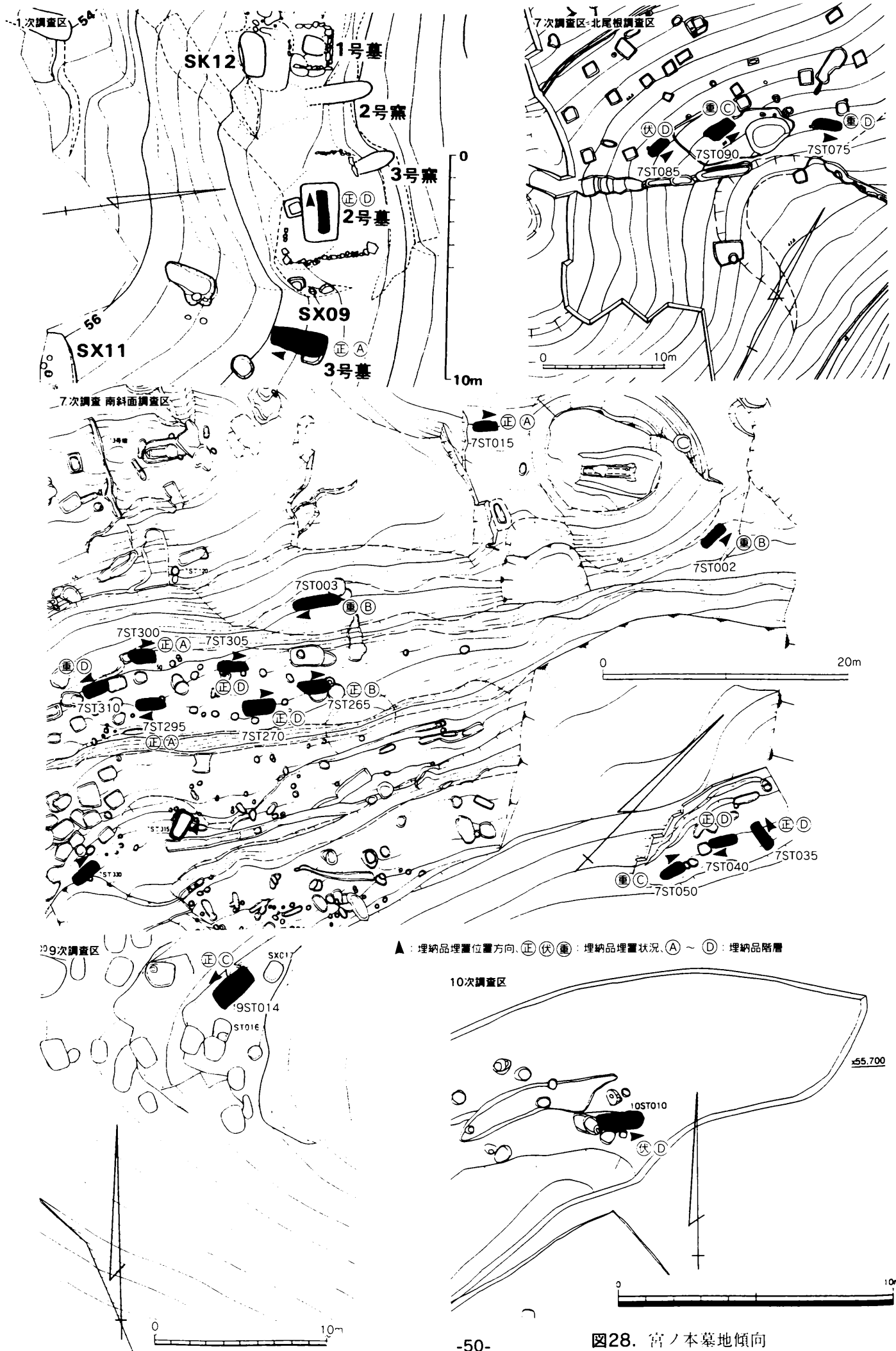


図27. 墓地【中世後期】

生の墓、屋敷墓の範疇に入ると考えられる墓景観を呈するようになる。当該期の墓制は土墳墓および木棺墓である。

なお近年の調査で、「死体遺棄」の痕跡が確認されている。大宰府条坊跡第224次調査SD050出土人骨で、調査所見では平安末期の埋没としている。遺構性格は坊路側溝で、いわば道路側溝への「死体遺棄」痕跡ということになる。具体的な場所は、鏡山推定条坊案による左郭4条10坊にあたり、5条路との交差点部分と推定できる。近年当該地を文献資料との比較から条坊東限の可能性を指摘する意見が提出されたが、いつの時期の条坊であるのかという条坊施工時期の問題、「外側」とする空間の土地利用状況、何をもって条坊域とするのかの諸課題の解決が、考古資料からなされていない中での見解であり、東限確定にはまだ解決すべき課題が多く慎重を要する。東限問題はさておき、死体遺棄という現象面からは、平城京、平安京域でこれまで確認されてきていることで、条坊域で確認できたことの意義は大きい。この事例については、死体損傷状況の分析が現在進められており、その報告を待ちたいが、現場での所見では頭該骨が数体、下肢骨などがあり、一体が完存する状況ではないとのことである。このことから想定されることは、死体片付けによる側溝埋没、死体集積場からの移動の二者が想定できる。前者はいわば「野垂れ死に」状態の死体を側溝へ落とす他者の行為ないしは溝内への転落と考えられ、後者は都での文献資料が物語るように小動物による移動ならびに遺構性格から生じる上流にある墓地からの流れ込みが想定できる(勝田、2003。西山、2004)。いずれかは資料増加ないしは文献記載資料の増加を待つ必要があるが、居住空間内における死体「遺棄」現場が押さえられたことには違いない。先の条坊東限説に基づく居住空間縁辺部における死体遺棄解釈は、大宰府における土地利用状況から考えると根拠に乏しい。遺構埋没時期である平安末期には、「条坊」内における居住空間は観世音寺および太宰府天満宮周辺、いわば「条坊」北



東部へ移動しており、当該地はまさに居住空間内に所在することになる。居住空間内での死体遺棄ということになり、都における河原への死体集積事例の文献記載を参考にするならば、近傍に死体集積場の存在、ないしは「葬る」人から切断された人（死者の生前）が集住していたという観点から解釈すべきであろう。加えて上流における墓の自然現象による破壊行為に伴う流れ込みという観点からの分析も残されており、人骨損傷状態の観察も必要となってくる。この死体遺棄が物語るものは、「都市」的集住を物語る重要な資料であり、簡単に結論付けることは困難であるのみならず、村落での墓地が死体遺棄を前提とし、村落の人々が抱く死体への観念、いわば死体は棄てるものとする観念を考慮した場合の、当該地での事例をどう解釈すべきかという課題も残る。しかし村落の人々は死体は棄てるものとの観念を抱くとされているが、どこにでも棄てるというものではなく、「棄て墓」とされる空間への遺棄が行われていることは考慮すべきである。このような様々な課題を解決するためには、まだ資料不足であり今後の事例ならびに資料増加を待つのみである。

中世後期の墓（図27）

中世後期においては、これまで居住域での造墓であったものが、次第に居住域からの離脱をはじめめる。具体的には寺社背後の丘陵に墓が占地する傾向があり、それらの中には現代へ継続する墓地もある。当該期の墓制は、火葬墓であるが石塔を造立するなど全国的傾向と一致している。なお当該期の初期は群集墓であるものの、一基ごとは単独に造墓されており、個人墓としての性格が強い。しかし次第に「連結」墓と通称されるように、方形区画墓へ取り付くように造墓され、その数を増加させる傾向がある（太宰府市教委、1999。九州歴史資料館、1988。福岡県教育委員会、2004）。この現象面を捉え、造墓階層の低下として捉える考え方があるが、造墓数・被葬者間の関係などを分析し結論すべき問題ではないかと考えている。確かに造墓数が多くなっているのは現象面が語るとおりであるが、墓の数が想定人口数から考慮すると少ないのではないかという疑問が生じる。したがって造墓階層の検討を、石塔造立を含めた造墓対価（水藤、1991）、先述した被葬者間の関係から導かれる造墓者間の関係の側面からの分析を考えてゆく必要がある。また太宰府域の北東部において、埋蔵文化財ではなく地表に露出しているものとして、五輪塔が集積されている場所が点在している。原位置を保持しているものもあれば、移動しているものもあり、集積地が等しく墓地とするには、集積地周辺を含めた調査所見を得る必要があり、明らかにし難い。

4. 宮ノ本丘陵墓地の位置

宮ノ本墓地と宮ノ本丘陵裾部に展開する墓地を含めて、ここでは宮ノ本丘陵墓地と呼称する。宮ノ本丘陵墓地の九州内における「階層」的優位性は多くの先学者によって論述されてきているが、その実態については、「買地券」の出土から在地郷長クラスの墓が造営される墓地として理解され、在地「有力者」の墓地、官人墓地として想定されてきている。本項では、宮ノ本丘陵墓地ならびに太宰府において検出されている墓を相対化の手がかりとして検討し、宮ノ本墓地の「優位性」のみならず、墓地造営者を想定する方法を模索したい。まず各墓地の様相について、個々の墓のあり方を整理しておく。整理しておく墓地は以下に列記したものである。

日焼遺跡5次調査区

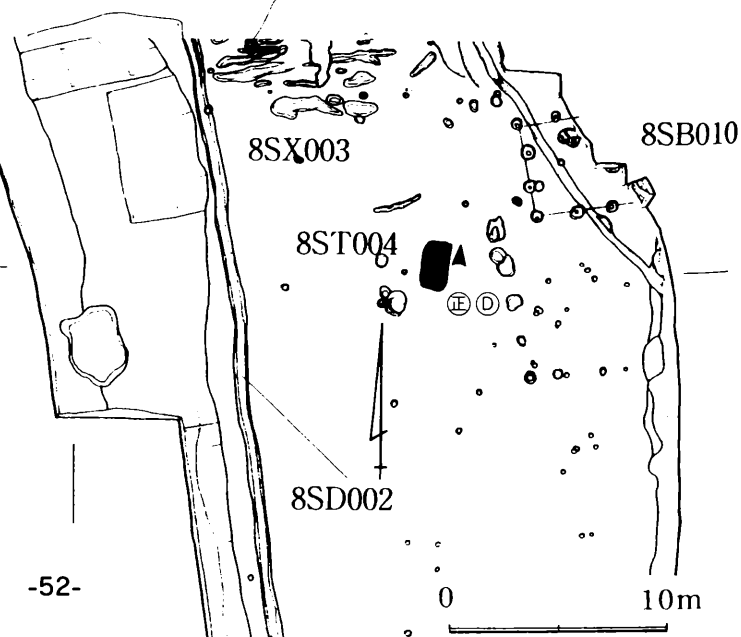


前田遺跡4・5・6・7・11次調査区



図29. 前田・日焼墓地傾向

前田遺跡8次調査区



(図28～31)。

・宮ノ本墓地 ・前田墓地 ・日焼墓地 ・妙見墓地 ・君畑墓地 ・剣塚唐人塚墓地

なお前田墓地および日焼墓地が宮ノ本丘陵裾部に形成された墓地として理解し、宮ノ本墓地と含めて宮ノ本丘陵墓地として考えている。

1)宮ノ本墓地（太宰府市教委、1980・1987・1993・1995・1998・2004）

宮ノ本墓地は、宮ノ本丘陵本体に造営される墓の総称として区分し、これまでのところ本報告で記載した6ST010を含めて30基の墓が確認されている。造墓時期は、大宰府整備時期である奈良期前半から開始され、終焉は古代前期が終焉する平安前期までである。また造墓地は、大宰府条坊の西方に所在する低丘陵で、居住空間からは離れた場を選地している。造墓傾向としては、図28に記載したように丘陵頂部から丘陵下位まで造墓され、造墓時期が早いものは丘陵頂部に時代の下降とともに丘陵下位へ展開する傾向がある。また大まかな傾向として埋納品からみた分類階層では、丘陵上位ほど鏡を埋納するなど「優品」埋納のものが造墓される傾向があり、土師器のみなど分類階層下位に位置づけられると考えられるものが丘陵下位につくられる傾向が読み取れる。ここで埋納品にみる分類階層として、A：鏡埋納、B：陶磁器・搬入品埋納、C：黒色土器埋納、D：土師器埋納の4種に区分する²⁾。

一方、墓壙主軸、埋納品位置、埋納品の埋置状況を視点とした、造墓「作法」の観点から観察すると、墓壙主軸を自然地形に規制されるものと、そうではないものの二者が存在し、さらに埋納品位置を揃える群とそうではない群の二者が観察できる。さらに埋納品の埋納状況が、仮器化する（倒置、重ねる）ものと正置するものの二者がある。これらを個々の墓に表記すると、群構成をとるものと個々ばらばらなものによって構成されることが観察できる。具体的には、宮ノ本遺跡第7次調査にて丘陵中位にて検出された7ST265・7ST270・7ST300・7ST305の四基、ならびに同調査にて丘陵上位で検出された7ST075・7ST090の二基は墓壙主軸を揃え、かつ埋納品位置、埋納品の埋置状況が正置するなど、全てが統一的に造墓されている。これに対し、他のものは、個々ばらばらであり統一的な「作法」の存在が観察できない。

したがって宮ノ本墓地の造墓傾向を整理すると、以下のようになる。

- ・居住地から遠い地への造墓
- ・作法規範の有無が混在
- ・埋納品階層はA～Dまで全て存在
- ・造墓数、多数。

2)前田墓地（太宰府市教委、1998a・1999・2000・2001・2002）

前田墓地は、宮ノ本丘陵東裾に展開している墓地で、宮ノ本墓地同様に居住空間からは離れた地を選地している。なお鴻臚館から大宰府への官制道路近郊および道路内に造墓された墓地であり、道路近辺への造墓を禁止した養老喪葬令皇都条の法令違反にあたる。現在のところ既に道路機能が停止した結果として想定されている。これまで9基の墓が確認され、造墓時期は平安前期から平安中期初めである。造墓傾向は前田遺跡第4次調査にて確認した4ST065・4ST115が、埋納品の埋納状況において異なるものの墓壙主軸、埋納品位置において同じであ

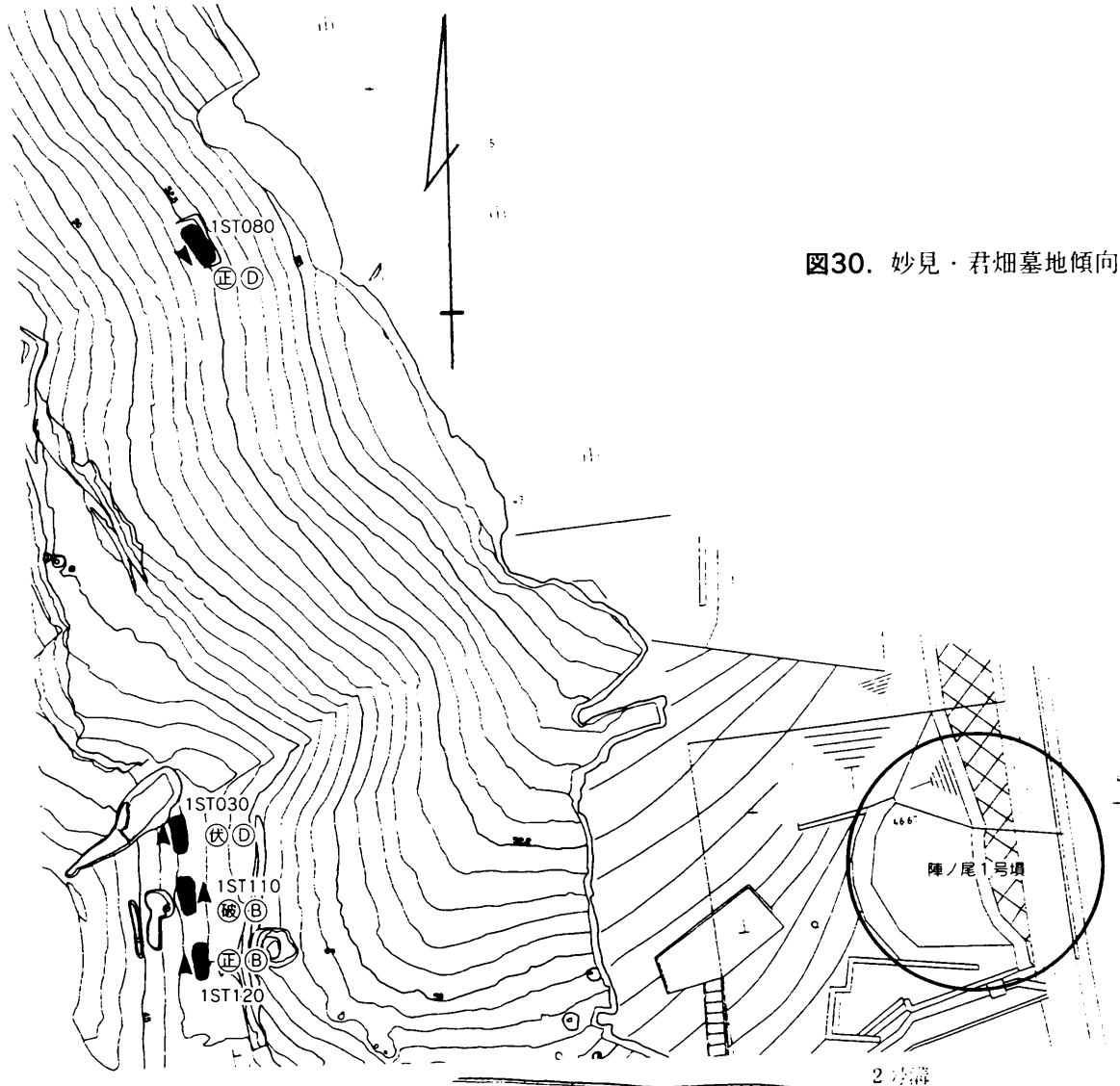
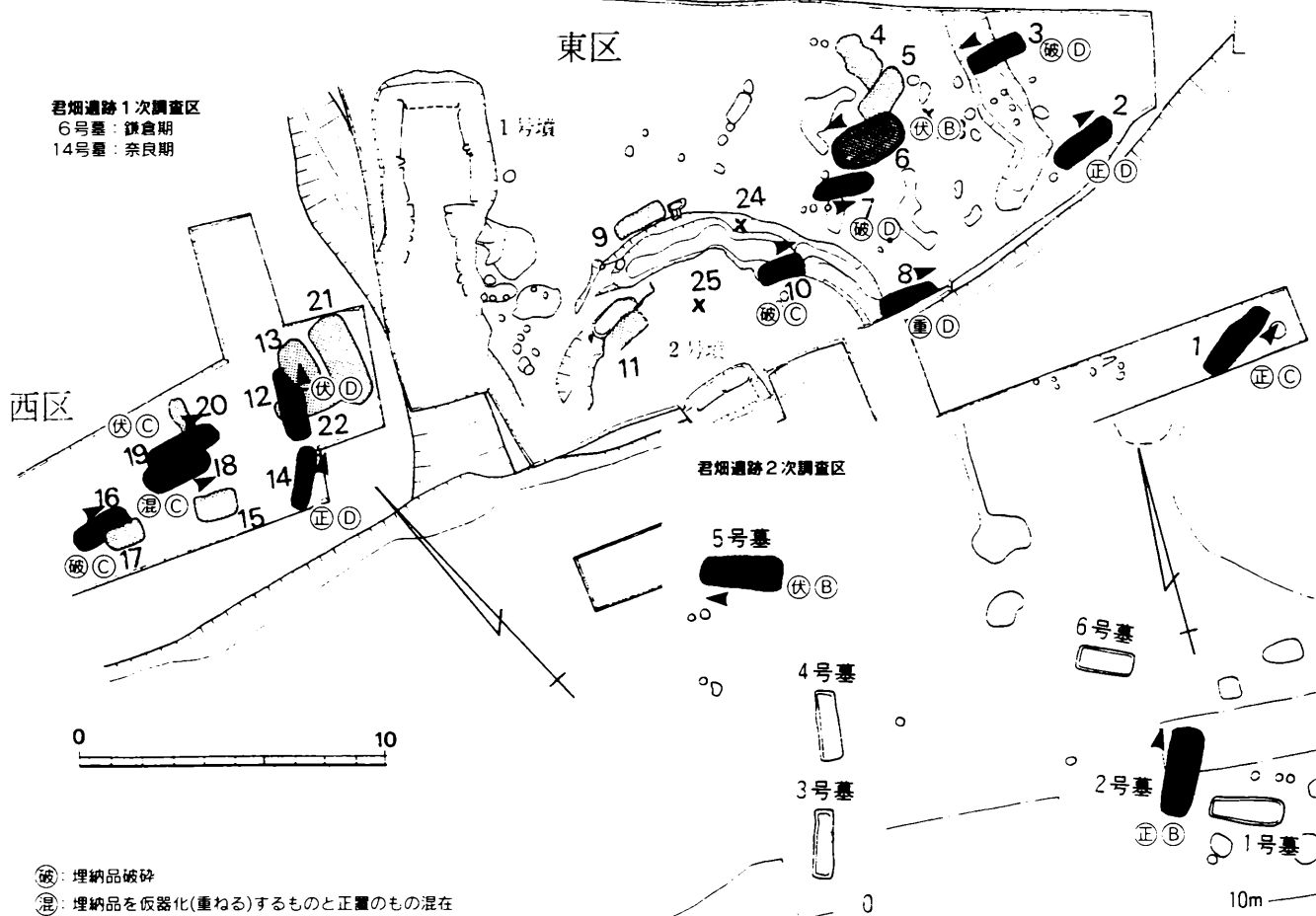


図30. 妙見・君畑墓地傾向



(破): 埋納品破砕

(混): 埋納品を灰器化(重ねる)するものと正置のものの混在

る。この他の墓は、すべて不統一であり、造墓規範は想定できない。厳密に述べれば全ての墓は不統一ということになる。

整理すると以下のようになる。

- ・居住地から遠い地への造墓
- ・作法規範なし
- ・埋納品階層はB～Dが存在
- ・造墓数、多数。

3) 日焼墓地（未報告）

旧字名の関係から、宮ノ本墓地と前田墓地の間に位置し、宮ノ本墓地の北東側へ広がる墓地である。先の二墓地同様に居住域からは離れた地への造墓ということになる。なお前田墓地同様に、官道に近接して造墓されている。これまでのところ全て未報告であり、実態を明らかにすることはできないが、群構成が明らかな日焼遺跡第5次調査で検出された墓について記述しておく。官道西部の丘陵中位にて確認された墓地で、遺構形状のみから墓として想定できるものは13基が検出されている。この中で、埋納品を出土し造墓時期が特定できるものは7基で、造墓期間は平安前期から平安中期前葉である。造墓傾向は、埋納品位置から大きく二者に分けることができ、北側埋置を行う5ST308・5ST317・5ST335と南側埋置を行う5ST303・5ST320・5ST330・5ST331である。これらの群の中に見る埋納品の埋置状況は、5ST331が正置する以外は全て仮器化した扱いを行っており、正置する5ST331を区別した場合、造墓作法は群構成をとることから、造墓規範が混在しているとして考えられる。

整理すると以下のようになる。

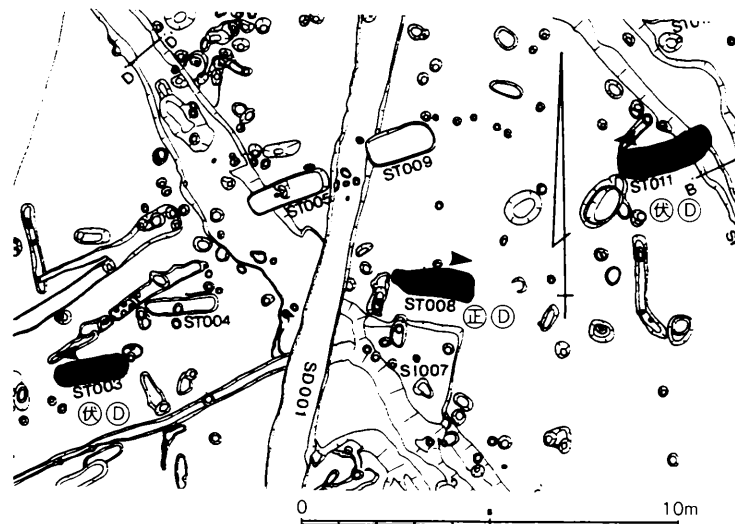
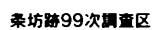
- ・居住地から遠い地への造墓
- ・作法規範が想定できるものと、できないものの二者が混在。しかし、作法規範のあるものが卓越。
- ・埋納品階層はA～Dまで全て存在
- ・造墓数、多数。

以上が宮ノ本丘陵墓地の傾向であるが、全体として多階層墓地であり、かつ造墓規範を有するものと無いものが混在していることが特徴として上げられる。

つづいて、大宰府近郊にて検出されている3つの墓地を上げる。

4) 妙見墓地（太宰府町教委、1982。なお妙見遺跡については、未報告）

妙見墓地は未報告であり、ここでは概略にとどめる。大宰府北西部に所在し、筑前国分寺北西部の丘陵に位置している。墓地は居住域である大宰府条坊の北西部に離れて造墓され、造墓期間は平安前期から平安中期と考えられる。造墓地は、古墳後期に造営された陣ノ尾古墳背後の丘陵斜面に造られ、陣ノ尾古墳石室内も再利用によって墓として使用されている（太宰府町、1982）。この再利用墓を含めて5基の墓が確認されており、造墓傾向としては、墓壙主軸は自然地形に制約されるように南北に揃えるものの、埋納品位置が北に置くものと南に置くものの二者が存在している。埋置状況は、仮器化したもののみにによって占められており、造墓規範の



条坊跡123次調査区

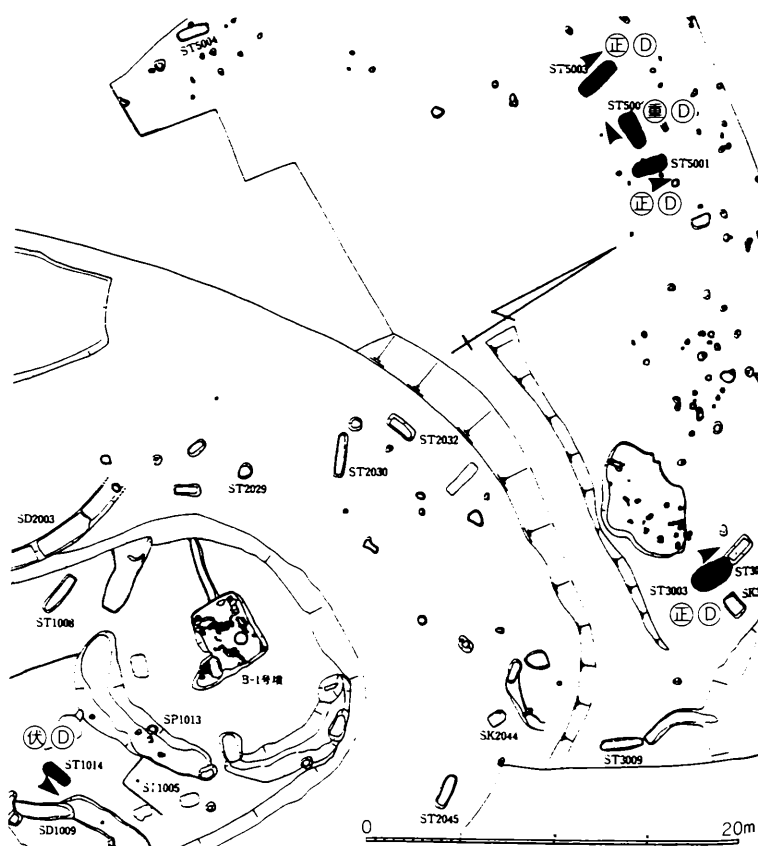


図31. 剣塚・唐人塚墓地傾向

観点からみると、IST080のみが埋納品埋置位置に違いが見られ、他の3基は同じ規範のもとに造墓されたものと考えられる。

以上を整理すると、以下ようになる。

- ・居住地から遠い地への造墓
- ・作法規範が想定できるものと、できないものの二者が混在。しかし、作法規範のあるものが卓越。
- ・埋納品階層はBとDによって構成。
- ・造墓数、多数。

5) 君畑墓地（福岡県教委、1977・1997）

大宰府条坊内の低丘陵部に所在しており、居住域に近接して造墓されている。鏡山条坊復原案では左郭10条8坊に所在している。既に報告がなされており、造墓時期は、平安前期後葉から平安後期までである。これまでの墓地とはやや造墓時期が遅れている。ついで造墓傾向は、多くのものが墓壇主軸を東西に向け、埋納品埋置場所を東にとり、かつ仮器化傾向の埋置を行う。君畑墓地は、これらのみで統一されているわけではなく、**表1. 墓造営傾向**

	大宰府					
	宮ノ本 墓地	所田 墓地	阿蘇 墓地	日焼 墓地	妙見 墓地	鏡山 墓地
立地						
居住地に近い						
居住地の遠近混在						
居住地に遠い						
作法						
規範あり						
規範の有無が混在						
規範なし						
埋納品階層						
多数存在						
少数存在						
造墓数						
多数造墓						
少数造墓						

埋納品階層

※埋納品の数によって造墓階層を設定したが、この埋納品階層が3以上存在する場合は「多数存在」、2以下の場合は「少数存在」とする

造墓数

※任意調査区内で3基以上墓が確認される場合は「多数造墓」、2以下の場合は「少数造墓」とする

整理すると、以下ようになる。

- ・居住地から近い地への造墓
- ・作法規範が想定できるものと、できないものの二者が混在。しかし、作法規範のあるものが卓越。
- ・埋納品階層はCとDによって構成。
- ・造墓数、多数。

なお君畑墓地には、後期古墳が造墓地内に存在し、石室内を焼き場として転用したのではないかと報告されている（福岡県教委、1977）。前代の墓の否定³¹ともいえる行為が想定できるが、ここで取り上げた墓は全て土葬であることから、火葬施設として想定される石室再利用は、ここで上げた造墓者には想定できない。近隣において火葬墓が数基確認されているが、これらの造墓者に比定する方が蓋然性は高いものと考えられる（図24）。

6) 剣塚・唐人塚墓地（福岡県教委、1978。筑紫野市教委、1997・1998）

大宰府条坊南西部に位置し、剣塚古墳・唐人塚古墳が所在する丘陵およびその周辺で検出された墓地を総称する。具体的には、剣塚遺跡、大宰府条坊跡第99次、第123次調査にて検出された墓が該当する。造墓地周辺には日焼墓地、前田墓地にて検出されている官道の南東延長部分があり、大宰府条坊跡第99次調査地では官道内への造墓が確認されている（筑紫野市教委、1997）。居住地との関係は、鏡山条坊復原案では右郭16条11条に位置しており、居住域内と考えられるが、墓地周辺において造墓時期の居住を想定させる遺構は確認されていない。このことから、居住域から離れた場での造墓として考えておく。造墓期間は、奈良中期に造墓を開始

するが、継続的な造墓は平安前期である。現在まで確認報告されている墓で、造墓時期ならびに埋納品の位置関係が明らかな墓は、16基である。これらの墓情報から読み取れる造墓傾向は、個々ばらばらであり、強いてあげるならば、剣塚遺跡にて検出された2号木棺墓と1号土壙墓が共通するのみである。したがって剣塚墓地においては、造墓規範は希薄と考えられる。また埋納品の階層はBとDによって構成されるが、Dが多くを占める。

以上を整理すると以下ようになる。

- ・居住地から遠い地への造墓
- ・作法規範が想定できるものと、できないものの二者が混在。しかし、作法規範のないものが卓越。
- ・埋納品階層はBとDによって構成。
- ・造墓数、多数。

これらが太宰府にて検出されている墓地の概略である。しかしこれらが全てではなく、条坊内における甕棺墓の検出や（太宰府市教委、1998b）、宮ノ本墓地の南に所在する殿城戸遺跡（太宰府市教委、2002）、脇道遺跡（未報告）、さらに条坊の南に検出された堀池遺跡（筑紫野市教委、1997）、など造墓数が数基のみのものなど、多くが検出されている。ここでは墓地傾向を捉える必要から、先述した6箇所を祖上にのせた。

現象面を整理すると、以下ようになる。

- ・居住地からの距離（遠い、近い）
- ・作法の有無（有り【一墓地に複数、一墓地に単数】、無し）
- ・埋納品区分にみる階層数（多い、少ない）
- ・造墓数（多い、少ない）

これらを整理し、各墓地における傾向を表記したものが表1になる。

表から読み取れる点として、造墓規範のない人々による造墓と一定の造墓規範を有する人々による造墓の二者が存在していることが読み取れる。この二者のあり方が、両者の強弱、造墓地と居住域との距離など様々な様態を示しており、単純な類型化は難しい。またこれら各墓地の造墓背景を読み説くには、関連する諸学の成果を整理し考察する必要がある、ここで詳述することは容易ではない。具体的には、「他者」の死体を忌み嫌う死穢観念の成立過程と空間差、これら死穢観念を抱く思想的背景と造墓者の居留意識、造墓階層の多様性などが上げられる。したがって、ここでは現象面から読み取れる内容を整理し、造墓者像の推定へ足掛かりを掴んでおきたい。

まず、造墓作法を共通にする墓群と個々ばらばらな群の一墓地内における強弱に視点を置くと、以下のように整理できる。

- A) 個々ばらばらな墓によって構成される墓地
- B) 造墓作法に共通性が強く観察される墓によって構成される墓地

この二者を両極として、中間類型が観察できる。中間類型としては、両者の強弱によって表

現される。またB類型についても、共通する墓に群が想定でき、それら群のあり方から細分される。

B-1) 造墓作法を共通とする群が一墓地内に複数混在しているもの。

B-2) 造墓作法を共通とする群が一墓地内に一つしかないもの。

この造墓作法に視点を置いたときの、具体的な墓地名を当てはめると以下ようになる。

A) > B) 宮ノ本墓地、前田墓地、剣塚墓地 (Aの傾向が強い、もしくはAのみによって構成される)

A) < B) 日焼墓地、妙見墓地、君畑墓地 (Bの傾向が強い)

Bの傾向が強いとした3つの墓地の中で、共通する墓の群数を観察すると、

B-1) 日焼墓地 **B-2)** 妙見墓地、君畑墓地 となる。

次に、墓地と居住地との距離から分類を行うと、君畑墓地以外は全て居住地から離れている。したがって、養老喪葬令による法規を遵守していることになる。一方居住地近くの丘陵上に造墓した君畑墓地造墓者は法規違反となる。

埋納品の区分階層からみた各墓地の状況は、多階層墓地と少階層墓地に分けられるが、具体的には以下ようになる。

多階層墓地：宮ノ本墓地、前田墓地、日焼墓地

少階層墓地：剣塚・唐人塚墓地、妙見墓地、君畑墓地

加えて、造墓数を観察すると、全ての墓地が3基以上の墓から構成される群集墓地ということになる。

以上を総合的に考え、あえて類型化すると、以下ようになる。

1 類型 **A) > B)**、居住域から離れている、多階層墓地

宮ノ本墓地、前田墓地 (前田墓地の方が、造墓作法の共通度合いが低い)

2 類型 **A) > B)**、居住域から離れている、少階層墓地

剣塚・唐人塚墓地

3 類型 **B-1)**、居住域から離れている、多階層墓地

日焼墓地

4 類型 **B-2)**、居住域から離れている、少階層墓地

妙見墓地

5 類型 **B-2)**、居住域から近い、少階層墓地

君畑墓地

これら諸類型の造墓背景は、造墓作法の規範性の強弱、墓地立地から、規範性の低い墓地を、様々な造墓作法の混在として判断し、1および2類型を、造墓作法を有するものの各々に共通性を見出し難く、造墓地も「与えられた地」への造墓として理解される人々、あえて述べるならば都市集住民による墓地。一方、造墓法令を無視した所行として理解でき、かつ共通した造墓規範によって造られた墓地として5類型を在地勢力による墓地として想定する。この5類型の造墓者については、法令違反を注視しており、造墓時期である平安前期末における社会情勢を

考慮している。なお3および4類型については、埋納品から多階層によって構成される日焼墓地は都市集住民による墓地占有の結果として考えることができる反面、在地勢力による「優良」墓地である宮ノ本墓地に隣接する土地への造墓とも判断できる。一方埋納品による階層が少ない墓地である妙見墓地は、造墓数が他の墓地に比べ少なく、造墓作法も限定的であるなど、都市集住民による墓地とした1および2類型とは異なり、5類型に近いものがある。結果として、先の3類型同様に、都市集住民による墓地占有ないしは、在地勢力による墓地の両者を想定しておく。なお埋納品中における土器は全て在地製品であり、都市集住民による造墓とした1および2類型墓地の造墓者の「出身地」を特定することはできない。さらにこのことが都市集住民とすることへの反証になる可能性もある。しかし、埋納品に表現される造墓者の造墓意識よりも、ここでは造墓行為そのものに視点を置いた結果である。しかし都市との対置概念としての村落の墓地を分析組上にのせていない段階では、これ以上踏み込むことはできない。先の関連諸分野での成果を検討し、再度分析を深めてゆきたい。

以上の分析から、学説史上、「優品」埋納から上級官人層による墓地として位置づけられ、造墓階層が想定されるにとどまっていたが、本稿による作法の分析から宮ノ本丘陵墓地の造墓者が都市的集住を余儀なくされた人々によって造墓されたものと考えることが可能となった。結果として多階層、多作法、群集墓地が都市的墓地として位置づけられる手がかりを導き出した。しかし再度述べるが概念上対極に位置する村落的墓地が本稿では描けていない。この点については、他地域における墓地分析を通して明らかにしてゆく必要がある。また作法分析のための諸前提についても本稿の性格上省略した、別稿を用意し責を果たしたい。

5. 成果と課題

墓制研究は、「都市」的な場での墓研究が進む反面、「村落」的と解される場における墓研究が遅延している点が上げられる。「都市」的な場における墓地の類型化は、古代においては森浩一氏、山田邦和氏をはじめとして多くの先学によって進められ（森、1973。山田、1996）、中世においても静岡県一の谷墳墓群の評価をめぐり多くの学説史が積み重ねられている（石井・網野、1988）。これら成果から導き出される「都市」的な場における墓地は、古代においては居住域から隔絶した地への墓地形成、中世においても継続するとする見解がある。しかし『日本後紀』延暦十六年記載の「葬家側」を字義どおりに理解すると、一般民衆における墓地は、居住域での墓地形成をうかがわせる。この記事については秩序維持意識が階層によって異なるとする山本幸司氏や勝田至氏による地域差を考慮すべきとの意見もあり（山本、1986。勝田、1988）、どの程度普遍化できるかは検討を要する。少なくとも考古事象上からは、検証すべきである。また「村落」的な場を分析し抽出する条件をまず整備しておく必要もある。この場合の「村落」的な場を、「都市」的な場の対置概念として捉えるのか、国家的な場に対する在地的な場として捉えるのかによって、抽出される属性に差が生じる。既に中世村落に対する自立的集団であるとするイメージは、清水三男氏ほかにより早くから変更を迫られており（清水、1941）、これをどのような属性で理解するのか。例えば「都市」的食器使用と「村落」的食器使用についての一定のモデルは伊野近富氏、高橋照彦氏により提示されてきており（伊野、

1989。高橋、1999)、これを援用することも一つの方法であろう。古代集落研究に踏み込み、そこから導き出せる「村落」像を認識した上で、「都市」的墓地と「村落」的墓地のあり方を問い直す必要がある。これは、ここで提示した宮ノ本墓地の位置が古代国家の命脈と一致するような墓地造営を行っており、このことが等しく「都市」的空間において造られた墓と規定するものではない。それは「都市」的空間に居住する人々の質が問われる必要があり、この点から想起される墓地構造を考古資料上から読み取る必要を感じる。具体的には別稿を用意する。

【引用文献】

- 島田寅次郎（1937）「福岡県に於ける中世の墳墓」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第十二輯』福岡県
- 清水三男（1941）『日本中世の村落』日本評論社
- 森浩一（1973）「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」『論集 終末期古墳』塙書房
- 間壁霞子（1982）「八・九世紀の古墳再利用について」『日本宗教社会史論叢』水野恭一郎先生頌寿記念会
- 中間研志（1983）「大宰府の奥津城」『大宰府古文化論叢』下巻 九州歴史資料館
- 金子浩之（1984）「平城京と葬地」『文化財學報』第三集 奈良大学文学部文化財学科
- 山本幸司（1986）「貴族社会に於ける穢と秩序」『日本史研究』287 日本史研究会
- 江浦洋（1988）「Ⅵ.考察 3.中世墓をめぐる諸問題」『日置荘遺跡（その3）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- 石井進・網野善彦編（1988）『中世の都市と墳墓』日本エディタースクール出版部
- 花田勝広（1988）「律令制の確立にみる葬地の変革」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会
- 伊野近富（1989）「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ 日本中世土器研究会
- 狭川真一（1990）「古代都市・大宰府の検討」『古文化談叢』第23集 九州古文化研究会
- 水藤真（1991）『中世の葬送・墓制』吉川弘文館
- 太宰府市史編纂委員会（1992）『太宰府市史 -考古資料編-』太宰府市
- 太宰府市史編纂委員会（1994）『太宰府市史 -建築・美術工芸資料編-』太宰府市
- 中島恒次郎（1995a）「古代前期における食器製作の技法」『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
- 中島恒次郎（1995b）「12.九州北部」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 山田邦和（1996）「京都の都市空間と墓地」『日本史研究』409 日本史研究会
- 高橋照彦（1997）「「瓷器」「茶碗」「葉碗」「様器」考」『国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』国立歴史民俗博物館
- 狭川真一（1998）「古代火葬墓の造営とその背景」『古文化談叢』第41集 九州古文化研究会
- 太宰府市史編纂委員会（1998）『太宰府市史 -建築・美術工芸資料編-』太宰府市
- 秋山浩三（1999）「古代の男性墓・女性墓」『古代文化』第51巻第12号 （財）古代学協会
- 狭川真一（1999）「北部九州における火葬墓の出現」『古代文化』第51巻第12号 （財）古代学協会
- 高橋照彦（1999）「土器の流通・消費からみた平安京とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集 国立歴史民俗博物館
- 渡邊邦雄（2000）「律令墓制における古墳の再利用」『考古学雑誌 第85巻 第4号』日本考古学会
- 中島恒次郎（2000a）「地方における「畿内産土師器」の影響」『古代土師器の生産と流通』奈良国立文化財研究所所内特別研究
- 中島恒次郎（2000b）「大宰府における実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究』ⅩⅤ 日本中世土器研究会
- 勝田至（2003）『死者たちの中世』吉川弘文館
- 西山良平（2004）『都市平安京』京都大学学術出版会
- 太宰府町教育委員会（1980）『宮ノ本遺跡』
- 太宰府町教育委員会（1982）『大宰府条坊跡』
- 太宰府市教育委員会（1987）『宮ノ本遺跡 II -古墳・墳墓編-』
- 太宰府市教育委員会（1993）『太宰府・佐野地区遺跡群 IV』
- 太宰府市教育委員会（1994）『大宰府史跡指定拡張の経緯』
- 太宰府市教育委員会（1995）『太宰府・佐野地区遺跡群 V』
- 太宰府市教育委員会（1998a）『太宰府・佐野地区遺跡群 VIII』
- 太宰府市教区委員会（1998b）『大宰府条坊跡 X』

太宰府市教育委員会（1999）『太宰府・佐野地区遺跡群 ⅠX』

太宰府市教育委員会（1999）『横岳遺跡』

太宰府市教育委員会（2000）『太宰府・佐野地区遺跡群 X』

太宰府市教育委員会（2001）『太宰府・佐野地区遺跡群 XI』

太宰府市教育委員会（2002）『太宰府・佐野地区遺跡群 Ⅲ』

太宰府市教育委員会（2004）『太宰府・佐野地区遺跡群 Ⅳ』

福岡県教育委員会（1977）『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集』

福岡県教育委員会（1978）『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIV』

福岡県教育委員会（2004）『浦ノ田遺跡 Ⅳ』

九州歴史資料館（1988）『大宰府史跡 昭和62年度発掘調査概報』

筑紫野市教育委員会（1997）『大宰府条坊跡 第99次発掘調査』

筑紫野市教育委員会（1998）『大宰府条坊跡 第123次発掘調査』

筑紫野市教育委員会（1997）『堀池遺跡』

【脚註】

1) 「大宰府」が示す空間的な範囲は、学説史上、大きく三者存在している。これら三者を以下に整理し、本稿では特に注記しない限りは、狭義の大宰府である2) の概念を示している。

1) 西海道統括機関としての大宰府（広義の大宰府）

大宰府鴻臚館、各国国府など関連諸司、役所を包括する。

2) 羅城としての大宰府（狭義の大宰府）

大野城、基肆城、水城によって囲まれる範囲。

3) 政務の場としての大宰府（官衙域）

2) 埋納品による区分階層が、造墓階層に等しく結びつくのかは、個々の墓のあり方から見て検討を要する課題である。なおBからDへと階層が下降する点については、高橋照彦氏による文献資料から検討された食器階層を援用している（高橋、1997）。またAについては、稀少性、ならびに造墓傾向から上位として想定した。

3) 当時の人々が抱く古墳への観念については、文献史学側から「鬼の棲む場」として描かれていることが明らかにされている。当時の人々にとって、古墳石室が既に「前代の墓」というよりは、全く異なった思いで捉えられていたことは確かであろう（渡邊、2000）。しかし、文献の残る地域での思いであり、また古墳再利用に対する解釈が、地域統治権正当化として捉える見解から考えると、これを普遍化すべきものかどうか検討を要するところである。

表2 第5次調査 遺構一覧表

S番号	遺構番号	遺構種別	堆積土	前後関係	時 期	地区番号
1	5SX001	焼土坑	黒色土→灰色土			CⅨ
2		土坑	茶黒色土			CⅨ
3		土坑	灰色土			CⅨ
4		土坑	茶灰色土			CⅨ
5	5SX005	焼土坑	黒色土→灰色土			CⅨ
6		包含層				CⅨ
7	5SX007	焼土坑				CⅨ
8		凹み	茶色土			CⅨ
9		凹み	茶色土			CⅨ
10	5SX010	焼土坑				CⅨ
11		包含層				CⅨ
12		土坑	炭化物混入土			CⅨ
13	5SX013	焼土坑				CⅨ
14		包含層				CⅨ
15	5SX015	焼土坑		S-15→S-14		CⅨ
16		凹み				CⅨ
17	5SX017	焼土坑				
18		欠番				
19		欠番				
20		欠番				
21	5ST021	木棺墓		S-22→S-21		DⅨ
22	5ST022	甕棺墓				DⅨ
23	5SK023	土坑				DⅨ
24	5ST024	火葬墓				DⅨ
25		土坑				DⅨ
26		土坑				DⅨ
27		土坑				DⅨ
28		土坑				DⅨ
29		土坑				DⅨ
30	5ST030	甕棺墓				DⅨ
31		土坑				DⅨ
32		凹み				DⅨ
33		凹み				DⅨ
34		土坑				DⅨ
35		欠番				DⅨ
36		土坑				DⅨ

表3 第5次調査 出土遺物一覧表

S-1(A区)

須	恵	器	坏 a
土	師	器	破片、坏 d
石	製	品	剥片(黒曜石)

S-1焼土坑(A区)

須	恵	器	坏 c、坏 a
---	---	---	---------

S-1①

土	師	器	坏
---	---	---	---

S-1②

土	師	器	皿 a
---	---	---	-----

S-1③

土	師	器	坏
---	---	---	---

S-1⑤

須	恵	器	供膳具
---	---	---	-----

S-1④

須	恵	器	坏身
---	---	---	----

S-2

須	恵	器	蓋c3、壺(双耳壺)、坏
土	師	器	供膳具、甕a、煮佛具、皿 a
石	製	品	剥片(黒曜石)

S-2茶黒土

須	恵	器	甕、供膳具
土	師	器	破片

S-4

須	恵	器	破片
国	産	陶	器

S-5

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-6茶色土

須	恵	器	蓋3、坏身、甕、壺
土	師	器	高坏
製	塩	土	煎煎土器

S-6黒茶色土

須	恵	器	坏蓋、蓋1、坏身	
土	師	器	甕	
縄	文	土	器	浅鉢

S-6淡茶土

須	恵	器	坏蓋、坏身、甕、蓋1、蓋3
土	師	器	坏C
製	塩	土	煎炊土器
弥	生	土	壺(中期)
そ	の	他	炭化物

S-8

土	師	器	供膳具、煮佛具
---	---	---	---------

S-9

古	式	土	師	器	二重口縁壺
石		製		品	スクレイパー(チャート)

S-11

須	恵	器	破片
---	---	---	----

S-14

須	恵	器	蓋3
土	師	器	甕

S-16

須	恵	器	蓋3
土	師	器	破片

S-21

国	産	陶	器	壺
国	産	磁	器	蓋

S-22

国	産	陶	器	甕
---	---	---	---	---

S-23

肥	前	系	陶	磁	器	皿
国	産	陶	器	壺		

S-23

国	産	陶	器	壺、蓋
---	---	---	---	-----

S-24

国	産	陶	器	壺(蔵骨器)
---	---	---	---	--------

S-26

須	恵	器	破片
古	式	土	鉢
土	製	品	鳩形土製品

S-29

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-27

国	産	陶	器	破片
国	産	磁	器	猪口

S-28

土	師	器	煮佛具		
国	産	陶	器	蓋	
国	産	磁	器	小椀	
古	式	土	師	器	鉢

S-30

国	産	陶	器	德利(瓶)
---	---	---	---	-------

S-31

国	産	陶	器	壺
---	---	---	---	---

S-33

国	産	磁	器	破片
---	---	---	---	----

S-34

土	師	器	破片	
国	産	陶	器	小椀

S-36

土	製	品	土鈴
---	---	---	----

トレンチ

須	恵	器	鉢a、坏c
---	---	---	-------

表土

須	惠	器	破片
土	師	質	土
国	産	陶	器
国	産	磁	器
土	製	品	石鏝

表採

須	恵	器	蓋a3
土	師	器	皿b

Z

須	恵	器	坏身、壺
国	産	陶	器
国	産	磁	器
			壺 德利(瓶)

黒茶色土

須	恵	器	坏蓋、坏c、蓋1、蓋c3、甕
土	師	器	煮佛具
国	産	磁	破片
古	式	土	甕、壺

表4 第6次調査 遺構一覧表

S番号	遺構番号	遺構種別	堆積土	前後関係	時期	地区番号
1	6SD001	溝	灰黒色土		鎌倉初期	
2		小穴	茶灰色砂		古墳前期初頭	
3	6SK003	土坑	灰色砂		弥生終末	
4	6SD004	溝	白色砂		古墳後期	
5	6SK005	土坑			古墳後期	D15
6	6SK006	土坑	茶黒色土		弥生後期	I3
7	6SK007	土坑	茶黒色土		弥生終末	I5
8		小穴群			古墳前期初頭	H6・I5～6
9		撓乱	灰色土		平安後期	F4
10	6ST010	木棺墓			平安前期	G3
11	6SK011	土坑			古墳前期初頭	I4
12	6SD012	溝		S-53→S-12	古墳前期初頭	18・19ライン
13		欠番				
14		欠番				
15	6SI015	住居	灰茶色土		古墳前期初頭	H3
16		小穴群	茶黒色土		弥生後期	G4
17		小穴			古墳前期初頭	G5
18		凹み	炭化物混入		古墳終末	F5
19		小穴			古墳	G6
20	6SI020	住居			古墳前期初頭	
21	6SD021	溝	灰色土		中世前期	F5
22		凹み			古墳前期	F5
23		小穴			古墳	G5
24		凹み			古墳前期	G4
25	6SI025	住居			古墳前期	G4
26		小穴群			弥生後期	F6
27		小穴			古墳	G7
28		小穴			古墳	G7
29		凹み			古墳	G5
30	6SI030	住居			古墳後期	G7
31		小穴	茶灰色土		古墳前期	G8
32		凹み			古墳前期	I9
33		小穴			古墳前期	I9
34		小穴			古墳前期	H8
35	6SI035	住居			古墳前期初頭	F9
36		小穴群			平安後期	E14
37		小穴	茶黒色土		不明	D14
38		小穴群	茶黒色土		古墳前期	E12
39		小穴群			不明	D11
40	6SI040	住居			弥生後期	I5
41		凹み			古墳	E11
42		凹み			古墳	D11
43		小穴	茶灰色砂		弥生後期	E11
44		小穴群			古墳前期	H10
45	6SI045	住居		S-45→S-25→S-30・40・I5	弥生後期	G4
46		小穴群			弥生	I8
47		小穴群			古代	D15・16
48		小穴群			古墳後期	E6
49		小穴			古墳前期初頭	H7
50	6SI050	住居			古墳前期初頭	E11
51		小穴			弥生後期	F6
52		小穴			古墳前期初頭	H9
53	6SD053	溝			古墳前期初頭	18・19
54		小穴		S-54→S-15	弥生後期	H4

表5-1 第6次調査 出土遺物一覧表

S-1

須恵器	環c、ハソウ、坏身、甕、蓋3、皿a
土師器	環d、小皿a、坏a(糸)、丸底坏a(ヘラ)
黒色土器	A 椀c
黒色土器	B 椀c
越州窯系青磁	I類(1)、皿類(2)
瓦類	平瓦(格子)
石製品	破片(黒曜石、サスカイト)
白磁	椀V(2)
弥生土器	高坏(中期)、ヒサコ形土器(中期)
古式土師器	甕(後期)、甕(中期)
古式土師器	破片、器台、高坏、二重口縁壺

S-2

須恵器	破片
古式土師器	甕、器台

S-3

弥生土器	甕(後期)、無頭壺(後期終末)
------	-----------------

S-3灰色土

須恵器	甕
弥生土器	袋状口縁壺、甕

S-4

須恵器	甕、ハソウ
弥生土器	高坏
古式土師器	高坏、甕

S-5埋土

須恵器	坏身(6c代)
弥生土器	甕

S-6

弥生土器	壺(中期)、高杯、大型甕
------	--------------

S-7

石製品	剥片(黒曜石)
弥生土器	甕(中期、終末)、鉢(後期)

S-8

弥生土器	甕
古式土師器	甕

S-9

須恵器	蓋3、壺、坏身(7c代)
土師器	甕、鉢、蓋1、坏c、蓋c
黒色土器	B 小皿a(ヘラ、糸)、坏身(ヘラ、糸)
越州窯系青磁	椀I類(1)、II類(1)
龍泉窯系青磁	椀破片(1)、椀「b(1)
同安窯系青磁	椀破片(1)
瓦類	平瓦(縄目)
白磁	椀V(3)、椀IV(1)
中国陶器	破片
弥生土器	甕(後期)
古式土師器	器台、高坏、甕(布留型)
石製品	砥石(砂岩)、剥片(サスカイト)

S-10埋土中

須恵器	破片
土師器	坏a(ヘラ)、煮佛具
黒色土器	A 椀

S-11

石製品	石包丁(サスカイト)
弥生土器	甕(後期)、破片(中期)
古式土師器	精製鉢、甕、高坏、大型甕、壺、無頭壺

S-12灰色砂

須恵器	甕
石製品	石包丁(凝灰岩)
弥生土器	甕(後期)、袋状口縁壺、高坏、広口壺
古式土師器	高坏、甕

S-15

須恵器	破片
石製品	剥片(黒曜石)
弥生土器	甕、壺(後期)、小鉢(後期)
弥生土器	高坏、甕(後期)、器台

S-15灰茶色土

弥生土器	甕、壺×小甕、器台、高坏、壺(中期)
古式土師器	甕、瓶(?)←混入か(用途限定できず)

S-15黄色ブロック混入土

弥生土器	甕(後期)、鉢
古式土師器	鉢(精製土器)、壺

S-15茶色細粒砂

弥生土器	壺(中期)、甕(後期、角閃石)
古式土師器	高坏、二重口縁壺、甕、鉢

S-15 P-1

古式土師器	甕
-------	---

S-15 焼きわ

須恵器	坏c(8c前期)←混入
古式土師器	ミニチュア土器、甕

S-15a

古式土師器	甕
-------	---

S-15b

古式土師器	甕
-------	---

S-15c

古式土師器	壺
-------	---

S-15壁

弥生土器	甕(後期)
------	-------

S-16

弥生土器	高杯、甕
------	------

S-17

土師器	無頭壺
弥生土器	甕(後期)

S-18

須恵器	蓋1、蓋c
土師器	甕

S-19

古式土師器	甕
-------	---

S-20

弥生土器	破片(中期)
古式土師器	甕、鉢(精製土器)

S-20

弥生土器	甕(後期)、鉢、ミニチュア土器
古式土師器	壺

S-20A

弥生土器	破片(中期)
古式土師器	把手、甕、鉢

S-20A

石製品	剥片(サスカイト)、玉(滑石製)
-----	------------------

S-20A

古式土師器	鉢、甕、高坏
-------	--------

S-20B

古式土師器	丸底壺、把手、高坏、鉢、甕
-------	---------------

S-20B

弥生土器	高坏(中期)
古式土師器	甕、鉢

S-20C

弥生土器	破片(中期)
古式土師器	鉢、直口壺、甕
土製品	焼土塊

S-20C

石製品	破片(滑石)
-----	--------

表5-2 第6次調査 出土遺物一覧表

S-20D

石	製	品	玉原材料(滑石)
古	式	土	師器 甗、高坏

S-20D

石	製	品	剥片(サヌカイト)
弥	生	土	器 甗(後期)、壺
古	式	土	師器 甗

S-20 e

古	式	土	師器 鉢
---	---	---	------

S-20a

石	製	品	石鉄(黒曜石)
古	式	土	師器 鉢、二重口縁壺、甗

S-20b

古	式	土	師器 破片、甗
---	---	---	---------

S-20c

古	式	土	師器 甗、高坏、鉢
---	---	---	-----------

S-20c2層

古	式	土	師器 鉢、高坏、甗、壺、ミニチュア土器
---	---	---	---------------------

S-20d

古	式	土	師器 甗
---	---	---	------

S-20壁

古	式	土	師器 甗、支脚、鉢
---	---	---	-----------

S-20床下

古	式	土	師器 壺
---	---	---	------

S-20c1層

古	式	土	師器 甗、鉢、壺
---	---	---	----------

S-20c2層

石	製	品	叩石(玄武岩・花崗岩)
---	---	---	-------------

S-21

須	恵	器	破片、甗、供膳具
中	国	陶	器 壺破片(4)
古	式	土	師器 破片

S-22

弥	生	土	器 破片(中期)
古	式	土	師器 甗

S-23

古	式	土	師器 破片、甗
---	---	---	---------

S-24

古	式	土	師器 甗(布留型)
---	---	---	-----------

S-25

弥	生	土	器 支脚、広口壺、甗(後期)
---	---	---	----------------

S-25A

須	恵	器	蓋3(混入)
石	製	品	剥片(サヌカイト)
古	式	土	師器 甗(布留型)、鉢

S-25B

石	製	品	剥片(黒曜石)
古	式	土	師器 器台、鉢、甗

S-25a

古	式	土	師器 破片、甗
---	---	---	---------

S-25b

古	式	土	師器 供膳具、甗
---	---	---	----------

S-25c

古	式	土	師器 破片
---	---	---	-------

S-26

弥	生	土	器 甗(後期)
---	---	---	---------

S-27

弥	生	土	器 甗(後期)
古	式	土	師器 支脚、甗

S-28

古	式	土	師器 甗
---	---	---	------

S-29

弥	生	土	器 破片(中期)
古	式	土	師器 鉢、甗

S-30

古	式	土	師器 破片
---	---	---	-------

S-30A

須	恵	器	鉢、甗
古	式	土	師器 鉢、甗
土	製	品	籠

S-30B

須	恵	器	供膳具、甗
古	式	土	師器 甗

S-30C

須	恵	器	甗、坏蓋
古	式	土	師器 鉢(内黒土器)、甗、甗、鉢

S-30D

須	恵	器	坏蓋
石	製	品	叩石×摺石(硬質砂岩)、E(滑石)
			剥片(サヌカイト)
弥	生	土	器 破片(中期)
古	式	土	師器 甗、鉢、甗、ミニチュア土器

S-30a

古	式	土	師器 甗
---	---	---	------

S-30b

古	式	土	師器 破片
---	---	---	-------

S-30c

古	式	土	師器 甗
---	---	---	------

S-30d

須	恵	器	甗
石	製	品	破片(滑石)
古	式	土	師器 鉢、ミニチュア土器、甗

S-30e

古	式	土	師器 甗
---	---	---	------

S-30f

古	式	土	師器 甗
---	---	---	------

S-30g

古	式	土	師器 破片
---	---	---	-------

S-30h

古	式	土	師器 甗、甗、ミニチュア土器
---	---	---	----------------

S-30壁

古	式	土	師器 鉢、甗
---	---	---	--------

S-31

古	式	土	師器 甗(大型)、鉢
---	---	---	------------

S-32

古	式	土	師器 甗
---	---	---	------

S-33

古	式	土	師器 甗
石	製	品	剥片(黒曜石)

S-34

古	式	土	師器 高坏
---	---	---	-------

S-35

土	師	器	坏(混入)
弥	生	土	器 甗(後期)
古	式	土	師器 甗(角閃石混入)、二重口縁壺、広口壺

表5-3 第6次調査 出土遺物一覧表

S-35A

弥生土器	甕
古式土師器	甕、高坏

S-35B

弥生土器	壺(中期)
古式土師器	甕

S-35C

弥生土器	破片(中期)
古式土師器	甕、支脚、広口壺

S-35D

石製品	剥片(黒曜石)
弥生土器	甕(後期)
古式土師器	甕(角閃石混入)、甕(布留型)、高坏

S-35壁

弥生土器	甕(後期)
古式土師器	鉢

S-35a

古式土師器	甕
-------	---

S-35b

古式土師器	甕
-------	---

S-36

須恵器	坏c
土師器	丸坏

S-37

土師器	破片
-----	----

S-38

古式土師器	甕
-------	---

S-39

古式土師器	甕
-------	---

S-40黒茶土

石製品	剥片(黒曜石)
弥生土器	甕(後期)、支脚
その他	小玉(ガラス)

S-40茶黒土

弥生土器	高坏(中期)、甕
------	----------

S-40A黒茶土

石製品	剥片(サヌカイト)
弥生土器	甕(後期)、破片(中期)、鉢、高坏

S-40B黒茶土

石製品	剥片(黒曜石・サヌカイト)
-----	---------------

S-40B灰茶土

須恵器	破片(混入)
弥生土器	甕

S-40C

弥生土器	高坏(後期)、甕、無頭壺
	大型甕(後期、中期)

S-40D

石製品	叩石(玄武岩)
弥生土器	鉢、高坏、二重口縁壺、支脚、甕

S-40a

弥生土器	破片
------	----

S-40b

弥生土器	破片
------	----

S-40c

石製品	石鎌(サヌカイト)
-----	-----------

S-41

古式土師器	甕
-------	---

S-42

古式土師器	甕
-------	---

S-43

弥生土器	甕(後期)
------	-------

S-44

古式土師器	高坏、甕
-------	------

S-45

古式土師器	甕
-------	---

S-45A

石製品	石鎌
弥生土器	袋状口縁壺(中期)、鉢、甕(後期)、支脚

S-45B

石製品	剥片(黒曜石)
弥生土器	甕(後期)

S-45b

弥生土器	甕、小壺
------	------

S-45c

石製品	剥片(黒曜石)
弥生土器	甕

S-45c掘り方

弥生土器	甕
------	---

S-45c壁

古式土師器	破片、甕
-------	------

S-46

弥生土器	支脚、甕
------	------

S-47

須恵器	坏c(8c初)、坏身
土師器	甕、坏

S-48

須恵器	甕、供膳具
古式土師器	甕

S-49

弥生土器	甕(後期)
古式土師器	高坏

S-50

古式土師器	甕(中期)、二重口縁壺
-------	-------------

S-51

弥生土器	甕(後期)
------	-------

S-52

古式土師器	甕
-------	---

S-53

須恵器	破片(混入)
弥生土器	甕(後期終末)、器台、壺、大型甕
	甕(中期後半)、広口壺(中期)
古式土師器	高坏、ミニチュア土器
石製品	叩石(玄武岩)

S-54

弥生土器	広口壺、甕(後期)
------	-----------

茶色土

須恵器	坏蓋、坏身、蓋1、蓋3、甕、高坏
土師器	坏c、把手付甕
龍泉窯系青磁	坏×小皿a(系)、坏c
須恵質土器	碗Ⅱb(2)
肥前系陶磁器	碗?
国産陶磁器	染付壺、碗、香炉
白磁	搦鉢、甕
	碗Ⅳ(6)、Ⅴ-4(1)、Ⅱ(Ⅱ)
染付(輸入)	皿Ⅲ(1)、壺他破片(3)
中国陶器	破片
瓦類	壺破片
	破片(近世)、平瓦(格子)
石製品	砥石(砂岩)、石包丁未製、石包丁(サヌカイト)
	石匙(黒曜石)、剥片(サヌカイト、黒曜石)
弥生土器	蓋、甕、壺(中期)
	大型甕、甕(角閃石混入)
古式土師器	高坏、短頸壺、支脚、丸底壺、甕(布留型)
土製品	甕、鉢、把手、二重口縁壺、小型壺
	フイゴ羽目

表5-4 第6次調査 出土遺物一覧表

黒茶色砂

須恵器	破片、蓋I、甕、坏身、坏×皿
弥生土器	甕(後期)
古式土師器	甕(在地的、角閃石混入)、短頸壺
	大型甕、高坏、把手

焼乱

須恵器	甕
土師器	供膳具
国産陶器	破片
国産磁器	白磁(近世)
龍泉窯系青磁	碗破片(2)
古式土師器	甕

試掘(住居北)

古式土師器	高坏、匙形土器
	三重口縁壺、甕(角閃石混入)

試掘(表土)

須恵器	坏c、甕、坏身、鉢b、坏蓋
龍泉窯系青磁	碗I-2(1)
中国陶器	破片(1)

試掘

須恵器	甕
同安窯系青磁	碗I b(1)
白磁	碗IV(1)
石製品	剥片(サヌカイト)

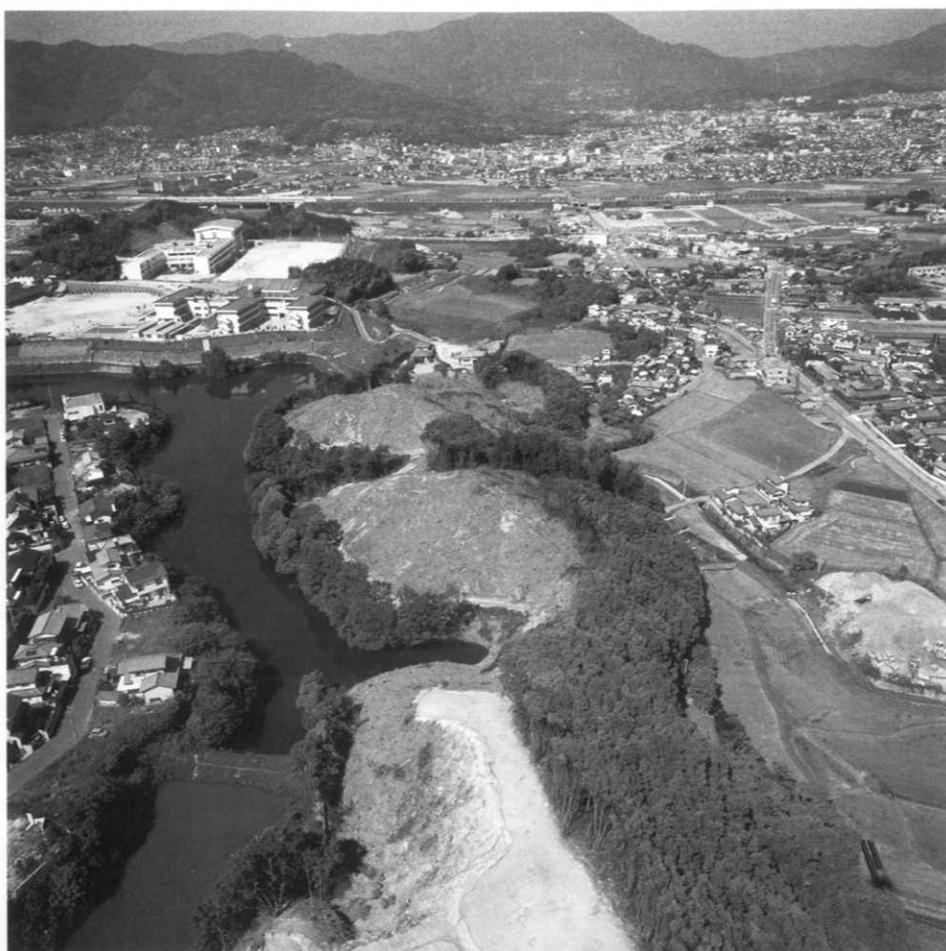
Z

古式土師器	甕
-------	---

写 真 図 版



調査地全景（平成2年撮影 空中写真 上が西）



宮ノ本遺跡第5次調査全景（空中写真 上が東）



宮ノ本遺跡第6次調査全景（空中写真 上が北）

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん 19									
書名	太宰府・佐野地区遺跡群 19									
副書名	佐野上地区画整理事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	78集									
編著者	中島恒次郎									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2005（平成17）年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 [備山推定案]	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第5次	条坊外	だざいふしおおあざむかいざのあざみやのもと 太宰府市大字向佐野字宮ノ本236-1外	402214	210091-005	55.479	-46.946	19901105	19910108	7400	区画整理
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第6次	条坊外	だざいふしおおあざむかいざのあざみやのもと 太宰府市大字向佐野字宮ノ本197外	402214	210091-006	55.693	-46.655	19900709	19900730	900	区画整理
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項		
宮ノ本遺跡 第5次	集落 築	弥生 古墳 奈良 江戸	焼土壇 甕棺墓 土壇墓		弥生土器 古式土師器 土師器 須恵器 陶器					
宮ノ本遺跡 第6次	集落 築	弥生 古墳 平安	竪穴住居 溝 木棺墓		弥生土器 古式土師器 土師器 須恵器 黑色土器 鏡 石製品					

太宰府・佐野地区遺跡群 19

－佐野上地区画整理事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書－
太宰府市の文化財 第78集

平成17（2005）年3月

編集 太宰府市教育委員会
発行 教育部 文化財課

〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号

印刷 株式会社 三光

〒812-0015
福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4

宮ノ本遺跡第5次調査

